アクセサリー

藤戸志乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アクセサリー

【Ｎコード】
Ｎ２８５６Ｔ

【作者名】
藤戸志乃

【あらすじ】
キスは挨拶、セックスは遊び……。
そんな男の行動一つに、泣いて浮かれて、バカみたい。

実咲は付き合っている彼の浮気を見てしまった。
もう別れるしかない、そう覚悟を決めるが、雅貴を好きな気持ちが実咲の決心を揺るがせる。
こんな男に振り回されたくない。
別れを切り出した実咲に、雅貴の返した反応は、意外な物だった。

1

キスはあいさつ、ＳＥＸは遊び。
そんなこと、分かっていたのに。
でもそんな男の行動一つに、浮かれて泣いて……バカみたい。

実咲はあふれてきた涙を無造作にぐいっと拭った。
「ほんと、バカ……」
涙で震える声で呟いた。
分かっていたのに、そんな人だって。
でも、それでも信じたかった、自分だけは特別だと。
嫌なことから全部目をそらして、耳をふさいで、考えないようにして。
そこまでバカなふりをして自分の手の中にある幸せを守ろうとしたのに、それさえもさせてもらえない。
バカみたい。
涙をこらえようとして、喉がこらえきれないくらい痛みを増した。
泣きたくなんかないのに、涙があふれ、喉の痛みに耐えかねてしゃくりが上がる。
悲しくて、辛くて、惨めで。
それでも、たまらなく好きな気持ちが変わらずあって、そんな自分がたまらなく嫌で。
後から後から涙が込み上げてくる。こらえようとすればするほど、激しく押し寄せてくる。

自分と付き合っているはずの雅貴が、彼好みの美人と抱き合ってキスを交わしている。最近、彼の周りで見かけていたきれいな人。
実咲は凝視していたその場面から目を背け、また来た道を逃げるように駆け戻った。

目に焼き付いたその映像から逃げたくて、頭から消してしまいたくて。

けれど、いいかげんに終わりなんだと思い知らされて、それが嘘であってほしくて。

……全部から、逃げ出したかった。

絶対に後ろは振り向かない。

見たくもない。キスをしている二人の姿なんか。

キスの後、雅貴は彼女の腰を抱き寄せ、きっとそのまま恋人のように寄り添って歩くだろう。そして当たり前のようにホテルまで誘うのだ。そう、実咲にするのと同じように。

だから見なくても簡単に想像がついた。

いま実咲と付き合っているからといって、そんな言葉だけの関係に意味なんてないのだから。雅貴にとって付き合っていようがいまいが、セックスさえできれば実咲もキスをしていた彼女も同じなのだろう。

そして自分だけは特別だと自分自身に思い込ませてのこのことついて行った実咲のように、彼女も誘われるままについて行くのだろう。

雅貴、セックス好きだよね。

実咲は心の中で皮肉に呟く。自嘲めいた笑みが口端に浮かんだ。

なんで、あんな人を好きになったんだろう。

それは今までにも、自分に対して繰り返し問い続けていた事。今更答えがでるはずもなかった。

理屈ではないのだろう。だから尚更想いを変える術を見つけられないのかもしれない。

「あんなバカ、どこがいいのよ」

声に出して自分を責めて、けれど思い浮かぶのはそんな最低な男と自分以外の女のキスシーンだった。

胸を占める気持ちは悔しさでも腹立たしさでも怒りでもなく、た

だ自分を襲う悲しさと、胸が痛くなるほどの辛い思い。
その事がこらえようもないほど悲しくて辛くて、ただ涙があふれた。

2

帰ってきた部屋の中は嫌になるほど静かで、自分の息づかいがやけに響いて聞こえた。

ベッドに体を埋め込むように投げ出して、力一杯さんざん泣いた。叫びたい気持ちのまま、布団と枕に顔を埋めて実咲は声を上げた。胸に渦巻く気持ちを吐き出すように、泣けるだけ泣いてやろうと、力一杯泣いた。

さんざん泣きわめくと、泣いて暴れている自分が滑稽に思えてきて力が抜けた。

むくりと体を起こすと、実咲は自嘲気味に笑う。

もう、終わりなんだ。

疲れるほど泣いて、少しすっきりした頭と投げやりな気分でたどり着いた結論。

続けたければ続けられる。見なかったふりをして、いつものように隣にいればいいだけのこと。

雅貴を手放したくない気持ちが、そう自分を誘惑する。

けれど自分はそれに耐えられない事も分かっていた。

雅貴と付き合っていく上でこの程度のことが気になるようなら、続けていても自分が辛くなるだけなのは目に見えているから。

だから終わらせよう。

実咲は決意する。

「別れよう」と、たった一言でいい。

そしたらきっと軽く「分かった」と返されて、それで終わる。

別れようと決意しているのに、まだ雅貴のことが好きな自分が「本当にそれで良いのか」と決意を揺るがそうとする。別れたところで忘れられるのか、と。

決意と躊躇いの狭間で堂々巡りになりそうな頭を振って、実咲は

自分に言い聞かせる。
忘れられるかどうかなんて分からない。けれど、きっと自分は今より楽になる。
だから、別れるのが正解なのだ。だって、もう考えなくてすむのだから、と。
いつも考えていた。雅貴にとって自分がなんなのか、いつまでこんな関係が続けることができるのか、と。別れてしまえば、もうそんな事を考えなくて良いのだ。
付き合う前も、付き合い始めてからも雅貴は実咲だけを見ることはなかった。「付き合う」という言葉の意味さえ考えるのがばからしくなるほどに。
全て言葉の上だけのこと。気持ちも行動も伴わない「付き合う」という言葉。それに振り回されただけの四ヶ月。
考えれば考えるほどあまりにもバカバカしくて笑いさえ込み上げてくる。
何もなかったフリまでして繕る価値がどれほどあるのか。
静かな部屋に、実咲の笑い声がむなしく響いた。
実咲は小さくため息をつく。
雅貴の容姿は周りの男達からは群を抜いて良い。長身で細身だけれど筋肉質な引き締まった身体。きれいだけれど、どこか男臭い整った顔立ち。会話は退屈させないし、いつも周りに女がいる。
実咲はそんな雅貴と一年余りの間、ただの友人でしかなかった。けれど友達同士の付き合いの中で、いつからか雅貴の隣に自分以外の女性が隣にいることを辛いと感じるようになっていた。隣にいるのは自分でありたい、友人ではなく女としてみられたい、そんな風に願うようになって、実咲は雅貴の彼女の座を望んだ。
その結果、彼女というその立場はあっさりと実咲のもとに転がり込んできた。
実咲はその軽さの意味から目を逸らし自分に都合のいい部分だけを見て、雅貴にとって自分自身の存在が特別であるという理由を見

いだそうとしていた。
雅貴の周りには実咲より遙かにかわいい女の子が数多いる。男慣れしていて後腐れのないその子達。比べて、どちらかといえばまじめで、男の子と付き合ったことはあるもののセックスに至っては雅貴が初めてだったような自分。そんな実咲のことを知っていながら、それでも雅貴が自分を選んだその意味、……特別だからだと、思いたかった。
もって一ヶ月、早くて三日。どこまで本当か知らないが、そんな付き合い方しかしないと噂されていた雅貴。確かに友達として側にいた頃から、取っ替え引き替え、すぐに周りにいる女の子は変わっていった。そんな雅貴が、自分とは四ヶ月ももっているなんてことに特別を見いだして、実咲は彼女の座にすがってきた。
なんて事なかったのに。ただ、お互い別れを切り出さなかっただけ、それだけのこと。雅貴にとって、自分は別れを切り出さなくていいくらいには都合が悪くなかっただけのこと。
そう思うと、また涙があふれてきた。
本当は知っていた。
見ないふりをしていただけで気付いていた。自分と付き合っている間も他の女と寝ていたこと。キスは本当に挨拶代わりに誰とでもしていること。
知らないふりして、聞こえないふりして、自分だけは特別と言い聞かせて。
だけど、雅貴は私でなくてもいいんだよね。
実咲はこらえようとしてもこぼれる嗚咽を聞きながら、心の中でつぶやく。
分かっていた、知っていたよ、そんなこと。
本気で雅貴を好きな私が、バカなんだ。
こんな事で泣いている私が、バカなんだ……。
こぼれる涙をぬぐい、こぼれる嗚咽をかみ殺し、疲れたように実咲は笑う。雅貴を信じようとしてきた自分があまりにも滑稽だった。

もう、明日で全部終わり。
眠れない夜は、ひどく長かった。

3

「おはようございまーす」
研究室に男の声が響いた。
実咲は試験管を揺する手を止める。顔を上げて入り口に立つ男の顔を見た。
雅貴。
実咲の心臓が突然どくどくと音を立てて騒ぎ出した。
「おはよう」
わずかに声がかすれた。
「あれ？　今研究室にいるの、実咲だけ？」
実咲以外いない事に気付くと、雅貴はとたんに砕けた様子になりにこにこしながら入ってくる。
「みんな現場に行ってるから」
実咲はなんでもないフリをして試験管を置き、判定を書き込む。そんな実咲の素っ気なさはいつも通りの反応だったが、「いつも通り」にしようと思うと、いつも通りがどうだったかを見失いそうになる。
「実咲、目、赤い。寝不足？」
歩み寄ってきた雅貴が、実咲の頬を触る。
昨日は、何の連絡もしてこなかった人。
なのに心配そうに見つめてくる瞳が愛しくて実咲の胸が痛む。
「そう？　昨夜ちょっと眠れなかったから。そのせいかな」
夜に呼び出して別れを告げるつもりだった。けれど、今なら誰もいない、いっそ、今別れを切り出そうか。
いつも通りを装って会話を交わしながら実咲は考える。
「実咲でも仕事中居眠りとかする？」
「出来るわけないでしょ。だいたいが立ち仕事か、居眠りが出来ないような作業中だし」

苦笑しながら、笑っている雅貴の脇腹を「もうっ」と肘で小突く。
別れを切り出そうかと思うと、顔を見ることが出来なかった。
実咲は新しい試験管を取り出すと小刻みに揺すり、仕事と当たり障りのない会話で動揺を隠す。
「それに、今日は検体が多いから忙しいし。あ、そうだ、シャーレ届いてる？　今日中に来ないと足らないんだけど」
「ああ、とりあえず一箱確保してきた。メーカー違うけど大丈夫？」
「サイズは？」
「それは一緒」
「なら良いよ。あ、単価は？」
「あー、えっと。こっちが安い。けどまあ、ほとんど一緒ぐらい。確認する？　単価当たりだと一円以下」
「ふぅん。あ、これ、以前サンプルもらったトコのだね」
「そう、それ」
「次は、いつもの入る？」
「三日後にはいけるはずだけど」
「じゃあ、それで良いよ。経理にも説明お願いね」
別れを切り出そうと思いながら、結局は切り出せないまま仕事の話でごまかしている。早く言わないと、誰かが戻ってくる。
そう思うと、どくどく心臓が高鳴り、試験管を持つ手元がわずかに震えた。試験官を振るのが作業の一つで良かったと、心の中で溜息をつく。
突然雅貴が笑った。
「相変わらず、仕事熱心だよな」
「何のこと？」
「他に人いないし、俺が来てるわけだし、少しぐらい手を止めてもよくない？」
からかうような物言いに、実咲は手を止めることなく「あり得ない」と笑う。
「今日は忙しいって言ったでしょ。時間のタイミングが五分ずれた

ら三十分帰るのが遅れるのよ。めちゃくちゃ濃密スケジュールなの。その代わり、うまくいけば定時で帰れるけど」
「ふぅん。俺も、今日は六時には終わるかな。終わったら電話して。晩飯一緒に食おう」
スケジュール帳を確認しながら雅貴が言った。実咲は唾液を飲み込む。
「……そうね」
そうだ、何も今、こんなところで別れを切り出す必要はない。仕事が終わってから、プライベートな時間にする方が良い。
実咲はそう自分に言い聞かせ、少し動揺が落ち着いた心臓の刻む音を感じながら雅貴を見上げる。
「じゃあ、夜に」
雅貴はそういうと、ちらっとドアの向こうを見て実咲にキスをする。
「なにして……っ」
「実咲が素っ気ないから」
当たり前のように雅貴が笑う。実咲はため息をついた。
ああ、なんで、口元がゆるんでいるんだろう。
そんな自分が情けなくて、あきれた表情は、雅貴に向けているように見せかけながら、本当に実咲があきれているのは、自分自身だった。
「場所は考えてよね」
「大丈夫、人はいないから。そのくらいは確認した。俺が実咲の評判を落とすようなこと、するわけないだろ？」
「どうだか」
実咲は雅貴を追い払うような手つきで手を振る。
雅貴は「何、その態度」と笑いながら研究室を出た。
部屋を出た雅貴ににっこりと笑いながら手を振る。
その姿が見えなくなって、実咲はため息をついた。
何をしてるんだか。

別れようと思っている相手に愛想を振りまいて。バカみたい。
なんでもないフリをするばかげたプライドに、まだ振り回されている。
結局、予定通り、夜まで先延ばし。
雅貴が実咲を誘う意味。それがセックスの誘いであることを十分にわかっていた。
雅貴と会う時は、何もしなくても、セックスだけはしていた。
セックスの意味が愛されているとは同等の意味でないことは十分に分かっている。愛情なんて、そんなものなくったっていくらでも出来る行為だっていうことぐらい。
わかっているのに求められることを嬉しいと思う自分は、やはりバカなのかもしれない。実咲は、心の中で自分を嘲った。

4

仕事中、頭の中はどうやって別れを切り出すか、いつ、切り出すか、そのことで頭がいっぱいだった。忙しいのに、ろくに仕事が手につかない。ミスをしないように心がければ仕事は遅くなり、急げば小さなミスを繰り返す。

こんなんじゃダメだ……。

そう思うのに、気持ちは仕事が終わった後のことばかりを考えようとする。

別れを切り出せば雅貴はどう反応するのか……。

考えるだけでも緊張で鼓動が早くなる。こわかった。イヤだった。本当は、別れたいわけじゃなかった。なのに、それを切り出すしかないこの状況がたまらなく辛かった。

さんざんな一日になった。一日で何回「すみません」と言っただろう。実咲は、私事に振り回されて仕事がぼろぼろになってしまう自分の精神面の弱さを呪う。自分のちょっとしたミスが他の人の仕事に影響してくるのに。

ため息をつきながら会社を出た。結局、定時より一時間近遅くなってしまった。

「終わった？　軽く飯でも食おうっか？」

会社を出てすぐのところで声をかけられ、びっくりして顔を上げる。

雅貴がにこにこと笑いながら実咲に歩み寄ってきていた。

「……いつから待ってたの？」

「そんなに経ってない。行こう」

気にするなという雅貴に、実咲は泣きたくなる。

「そうね」

今日一日実咲を苦しめた張本人は、何も知らずに涼しく笑っている。そしてこんな日に限って、雅貴は優しい。そんな雅貴が憎くて、

けれど愛しくて、蹴り飛ばしてやりたいと思った。
けれど弱みを見せたくなくて、実咲は同じように涼しげに笑って見せた。
「ありがとう」と、さらりと言って。
当たり前のように雅貴の隣を歩く。
今日が、こうして一緒に歩ける最後の日。
そう考えると、実咲はぞっとした。
のど元から下腹部にかけて、ぐぅっと底冷えしていくような感覚。
頭がくらくらして、体が重く感じた。そして、別れることを意識するだけで血の気が引くほど辛く感じている事実に動揺した。
今日、別れるのだ。私が別れを切り出すんだ。
すぐ隣にいる雅貴の存在を感じる事で余計にその事実が実咲に襲いかかってきた。
実咲は止めようとしても止まらない激しい動悸におそわれながら、いつ、どうやって切り出すか、考えることで感情を抑え込もうとする。
反面、動揺とは裏腹に今はまだ雅貴が隣にいるという事実にほっとしている自分も感じていた。
これが最後なんだ。
実咲は、必死に自分にそう言い聞かせる。
だからこうやって一緒にいることをうれしいなんて思ったらいけない。もう、これが最後なんだから。この時間を延ばしたいだなんて、思ったらいけない。いつまでも苦しみたくないなら、早く終わらせないと。
実咲は相反する感情をまた堂々巡りで考えている自分に気づき、こっそりとため息をついて雅貴の顔を盗み見る。
いつもと同じきれいな横顔だった。
「何だよ」
視線に気づいた雅貴が笑った。
「何でもないよ」

はっとして無理矢理笑顔を作りながら目をそらす。
好きだなんて思ったらいけない。昨日のあの彼女ともこんな風に一緒にいた事を忘れたらいけない。雅貴の笑顔を横目に、実咲は隠れてため息をついた。
「なんか食べたいものある？」
「別に。あんまり食欲ないから軽食があるところが良いけど」
「俺は結構ガッツリ食べたいんだけど……」
普通に話をするのが、こんなに辛いことだとは思わなかった。実咲は視線をそらせながら、気持ちをごまかすように辺りを見渡す。
「じゃあ、ファミレス行こっか。あそこならそこそこ種類あるだろうし」
目にとまったファミレスを指して言うと、雅貴が笑う。
「おまえ、そういうとこ、ほんとこだわりないよな」
「え？」
「なんでもない」
意味が分からずに問い返すと、雅貴は実咲の手をさっと握って楽しそうにファミレスへと足を向けた。
扉を開けるとカランと音がして、店員に「いらっしゃいませ」と迎えられた。
案内された席に座り、注文を済ませると重い沈黙が訪れた。
もっとも、重いと感じているのは実咲だけだったのかもしれないが。
本当は雅貴にも聞こえているんじゃないかと思うほど、実咲の心臓がどくどくと大きな音を立てている。
「なんで黙ってるの？」
雅貴が笑いながら実咲のうつむき加減の顔をのぞき込んできた。
今、かもしれない。今が言うときなのかもしれない。
実咲は息を吸い込んだ。
「……何でもないよ」
けれど出てきた言葉は自分の理性を裏切った。そして取り繕うよ

うに雅貴に笑いかける自分がいた。
笑っている自分を、何をしているんだと頭の片隅で責める声がした。
実咲は笑った表情のまま雅貴を見つめる。
どうしようもない。今更言い出せないのは、どうしようもなかった。
言いにくいんじゃない、プライドに振り回されているわけでもない……私は、言いたくないんだ。
笑いながら胸がきりきりと痛んだ。
雅貴が好き。別れたくない。
そんな自分に気づいてはいた。それじゃだめなのに。分かっていても、もう少し、もう少し……と延ばしている。

5（前書き）

5

「注文は以上でよろしいですか？」
店員が運んできた食べ物を確認すると軽く頷いて、去っていくその姿を何気なく横目に見る。
「今日、大丈夫だったか？　居眠りとかしなかった？」
笑う雅貴が憎らしかった。誰のせいだと思っているんだと怒鳴ってやりたかったが、その勇気もない。
「居眠りはしてないけど。あんまり、大丈夫とは言えないかもね。定時のつもりだったのに、一時間も遅くなるなんて」
苦笑いしてごまかしながら、熱いコーヒーカップに口を付けて、その香りだけ確かめて口に含むことなくカップをおく。落ち着かない。
「なんか、おかしい」
「なにが？」
「調子悪いんじゃない？」
雅貴が手を伸ばしてきて、額に触れた。
気持ちよかった。
ずっと触れていて欲しい。
その感情を抑え込んで、実咲は笑いながら雅貴の手を押し戻す。
「大丈夫だって」
そう笑って答えながら、全然大丈夫じゃない自分がいる。自分がおかしいのは十分に分かっている。でも、それを気付かれるのはイヤでごまかす。
そして、ごまかしながらふと思う。
心配、してくれているのかな。
ふと思いついたその考えに、うれしさがこみ上げてきた。
そんな風に感じる自分が嫌だった。

期待したら、ダメだ。
実咲は浮かれる気持ちを必死に押さえる。
なんでもないフリしている実咲に雅貴がつぶやくように尋ねてきた。
「今日、大丈夫？」
雅貴のたった一言で舞い上がっていた実咲の気持ちが沈んだ。
ほら。
そう自分を嘲笑う。
体を気遣ってくれてた訳じゃなく、雅貴はセックスができるかどうかが気になっていただけだった。
否応なしに気付かされた事実。
そうだ、雅貴は私なんて何とも思っていない。彼女って言う名前を付けた専用のセックスフレンド。
馬鹿だな、私。わかっていても、何度も何度も期待をしてしまう。
本当に馬鹿だよなぁ……。
「……大丈夫だよ」
実咲は泣きそうな気分で、笑って答えた。
これが最後だ。雅貴に抱かれる、最後の機会。
こんな気持ちでも、こんなにダメだって思っていても、それでも抱かれたいと思ってしまう。最後なのに抱かれたいなんて、終わらそうと思いながら、セックスするなんて。
馬鹿げているけど、せめて、最後だから。
自分に言い訳をする。
言い訳をしながら実咲は惨めな気持ちで自分の意志の弱さを嘲笑った。
雅貴が食事を終えると、しばらく何でもない話をした。
そして、ファミレスを出ると実咲の部屋に向かう。
実咲は雅貴の少し斜め後ろを歩いていた。
何してるんだろう、私。
自分のしてることがむなしかった。別れようとしてる男とセック

スしに家に向かっている。
なにしてるんだろう。
やめた方がいい。
頭の中ではわかっていても、言い出せずに雅貴の後をついて行く。
今言った方がいいってわかっているのに、頭の中ではセックスを終えた後に別れ話を切り出している自分を想像していたりする。
終わったら言おう。どうせ、いつものようにセックスしてしまえば雅貴はそのまま帰るつもりだろうから。
帰ろうとした雅貴に言えばいい。
「別れよう」って。
そしたら、きっと「わかった」って簡単に返事が返ってくるだろうから。それで終わるだけだから。

実咲のアパートに帰り着くと、いつものように先に雅貴がシャワーを浴びて、実咲が後でシャワーを浴びる。
はじめの頃は、いっぱいいちゃいちゃしたなぁ。一緒にシャワー浴びたりして。たった四ヶ月なのに、もう一緒に入ることさえほとんどなくなって。一人暮らし用のアパートのお風呂なんて、狭すぎて二人では入れるような広さではないから仕方がないのだけれど、それでも無理して一緒に入ったりしていたことが、ぼんやりと思い出された。
……ナニ考えてんだろ。倦怠期の夫婦みたい。
くだらないことを考えながら出ると、雅貴が笑って実咲を手招きする。
実咲はそれに応えて当たり前のように雅貴の膝の上にのった。
キスして、肌を合わせて、腕を互いに絡み合わせて。
雅貴の体温を感じながら実咲は考える。
イヤだな。別れようとしている男に抱かれて、幸せを感じるなんて。
「……んっ」

抱かれて、抱きしめて、気持ちよさに流されて。
まだ少し余裕のある頭の片隅で考える。
セックスって好きだな。好きな人に抱かれて、幸せと、気持ちよさだけ追っかけてればいい。イヤなことなんて何も考える余裕もない。気持ちよさに流されて、今、このときのことだけ考えてられる。
二人の息づかいが荒くなる。
この時間だけが、ずっと続けばいいのに。

6

深く、息をついた。
雅貴がシャワーをすませて生乾きの髪のまま服をつけている姿をベッドに体を埋めたまま、ぼんやりと眺める。
最後なんだ。これが、最後。
「……雅貴」
「なに？」
声をかけると振り向きもしないで返ってくる雅貴の声。
こんなもんかな。これ以上、何も変わりはしない。
実咲はあきらめて呟いた。
「別れようっか」
実咲に目も向けずに服を着ていた雅貴が一瞬止まって振り返った。
「え？」
「……だから、別れよう」
「なんで」
ワケがわからないと言うように首をかしげる雅貴を見て、実咲の胸にどうしようもない悲しみがこみ上げた。悲しそうでも、つらそうでもない。突然言われて怒っているわけでもない。別れる理由が思い浮かばないから、訝しんでるだけ、そんな表情。
「……別れたいから」
「だから、何で別れたいわけ？」
その問いかけに思わず笑った。
「わかんないんだ」
「思いあたらないし」
「だろうね、雅貴は思い当たらないかもね」
言いながら自嘲する。雅貴がわかるなんて、初めから思っていなかったけれど。

泣きそうだった。同時に、どうでもよくなった。
「雅貴さ、昨日何してた？」
「……」
雅貴は答えない。実咲は息を吐いた。
「言わないだけの良識はあるんだ。まあ、一応、彼女だもんね、私。……名目だけだけどね」
軽く笑ってベッドの上から雅貴を見上げる。
「私さ、やっぱり理解できないし。わかってたつもりだったけど、ああゆうことやられるのはやっぱりイヤだし」
何を思っているかわからない雅貴の表情に不安を感じ、目をそらせてそのまま一気に言いたいことをはき出した。
「みんながみんなさ、雅貴と一緒じゃないんだよ。挨拶程度の気分でキスしたりとか、遊ぶ程度の気持ちでセックスしたりとか、……理解できないよ。雅貴からしたら何でもないことでしょ。そんな価値観の違う人に私がごちゃごちゃ言ったところで、理解できないでしょ。私の価値観を雅貴に押しつける気はないよ。でも私も雅貴の価値観は理解できないし理解しようとも思わない。だから、そんな雅貴についていけないから別れようって言ってるの。これ以上つきあってると、干渉しそうだし。雅貴、うっとうしいの、嫌いでしょ？」
言い終わると、小さく息を吐いて、横目に雅貴の表情を伺う。雅貴は、まっすぐに実咲を見ていた。
「……実咲なら、それでもいいけど？」
どこまで本気かわからない声だった。
けれど、それは思いがけない返事でもあった。
実咲の視線の先で雅貴は笑っている。
何故、こんな状況で笑えるんだろう。
実咲には理解できなかった。
雅貴の言葉は、その内容も口調も冗談にしか聞こえなかった。けれど悔しいことに、そんな言葉でたまらなくうれしくなっている自

分がいた。
簡単に終わるはずだった。
実咲の想像では「わかった」と一言返事が返ってきて、それで終わるはずだった。雅貴の今までの女性関係は、全てそうだったから。そのことを知っていたから。
どうして。
実咲は泣きたくなった。
どうして私にはそんな言葉をかけるの。
からかわれているのか、遊ばれているのか。
ああ、もしかしたら笑いのネタにでもされているんだろうか。
ほんの一秒にも満たないわずかな時間、実咲の脳裏にいろんな考えがよぎった。
けれど、それらの不安を全て払拭するほどうれしい言葉だった。
信じられないのに、信じたくてたまらない自分。
「なあ、別れることないだろ?」
歩み寄ってきた雅貴が実咲の顔をのぞき込んだ。
また、私はこのまま流されてしまうんだろうか。
実咲は目の前にある雅貴の顔をぼんやりと見る。
ダメなのに、絶対ダメだと思っているのに。
「干渉してもいいって言われてもね。信用できない人とはつきあえないって言う意味だったんだけど、わかんなかった?」
涙で声が震えそうになるのをギリギリで押さえながら強がることができた。
「じゃあ、実咲とつきあう間は、他の女に手を出さない、それなら別れない?」
やっぱり本気とは思えない口調だった。
馬鹿にして……っ
「……そうね、それだったら考えてもいいわね。雅貴に、それができるならね」
自分を押さえながら、必死で演技をする。馬鹿にしたように雅貴

に笑いかける自分の口元が、わずかに引きつっているのがわかった。
「じゃあ、賭けるか？」
「賭け？」
実咲が眉をひそめると、何でもないように雅貴が笑った。
「そう、俺が浮気をするか、しないか」
「それが、何の意味があるわけ？　賭けたらなんかくれるの？」
ばかばかしくてつきあっていられない。
心の中で実咲は叫ぶ。何とか平常を装っているが、今すぐ泣いてしまいたかった。出て行ってと叫び散らしたかった。
何でこんな男が好きなんだろう。馬鹿を見るのはわかっているのに、別れようとしないだけで、別れたくないと言われたわけでもないのに、どうしてこんなにうれしいんだろう。
おそらくこのまま流されてしまうだろう自分が、たまらなく情けなかった。
「賭け対象は、そうだな。こんなんでどう？　俺が浮気をしたら、実咲の言うことを何でも一つ聞く。俺が浮気をしなかったら実咲は俺と別れない」
バカバカしい。
実咲は心の中だけで笑った。
バカバカしいと思っているのに、それでも言うのだ。バカバカしいことを口にする雅貴より、もっとバカな自分は。
「何でも言うこと聞くって、ほんとに何でも？」
「そう、何でも」
気づかれないように唾液を飲み、思い切って言った。
「じゃあ、ずっと私だけ見てって言ったら、私だけとつきあうの？」
「もちろん」
笑いながらうなずく雅貴。
なんて、この男の言葉は軽いんだろう。
欠片ほどの期待が裏切られただけなのに、ひどく動揺した。先の言葉が本気じゃないことぐらい、バカでも分かるだろう。なのに落

胆した自身に、実咲は本気が少しでも感じられることを無意識に期待していたのを自覚してしまう。
「ふざけてるわね」
「……かもね。でも、かなり本気」
そう言って雅貴が再び実咲に被さってくる。元々ベッドの上にいた実咲を押し倒すような体勢になって、キスをしてきた。
うそつき。
それでも、実咲はは言う。ひきとめられたうれしさと、あふれるほどの幸福感に負けて。
「そう、その約束、忘れないでね」
仕方なくつきあう、そんなニュアンスを含ませることだけが最後の強がりだった。
「なあ、も一回しようか？」
雅貴が囁きながらベルトの留め具をはずす。
実咲は言葉を返さずに、腕を絡ませることでそれに応えた。
決別さえできない自分の情けなさにやりきれなくなりながら、そんなイヤな気持ちを一瞬だけでも忘れさせてくれるセックスの誘惑に負けて。

7

ピピッ、ピピッ……。

目覚ましが鳴っている。

実咲は眠さをこらえて起きあがると目覚ましを止めた。

別れるはずだった雅貴と別れなかった気の重さ、そしてそれをどこかほっとして、うれしく思っている自分。目覚めたと同時に襲ってきた複雑な気分を紛らわすように、実咲は髪をかき上げてため息をついた。

今日から、バカげた雅貴のゲームが始まる。

今日は雅貴が研究室にまで顔を出すことはないはずだ。その事に少しほっとしながら、実咲は白衣に着替える。

「おはよ」

顔を上げると涼子がいた。

彼女は高校の頃からの友達で、実咲が気を使わず何でも話せる数少ない友達だった。大学は別れたのに、会社で一緒になり、付き合いはそろそろ十年近くなる。会社が一緒なのは偶然ではなく、就職難で右往左往してた頃に二年早く入社した彼女からうけてみないかと誘われたのだ。

「おはよ」

返すと、涼子は困ったように笑った。

「浮かない顔してる」

顔は笑っているが、実咲を心配している声だ。

「ま、ね」

苦笑気味に笑うと涼子がそのまま隣に来て小さい声で囁く。

「で、どうしたの？　ていうか、どうなった？」

二日前雅貴の浮気現場を見たときに、唯一愚痴を漏らした相手が涼子だった。別れるつもりであることも全部話してある。

愚痴に付き合わせた上、心配までかけさせている。挙げ句の果てにその心配への返事が更に情けなくて実咲は曖昧に笑って小さくなりながら答えた。

「最悪なことに、別れてない。もう、ダメすぎ」

小さい声でコソッと答えると、涼子が顔をしかめて、頭を押さえた。

「なんでまた。辛くない？」

「けっこうね」

答えて、ため息をつく。

周りに聞こえないようにコソコソ話が続く。

「でもさ、どういう訳かあいつ、私が別れようって言ったのに、ひきとめたのよ」

「マジ？」

涼子が裏返りかけた声を出した。

「うん、マジで。もうさ、イヤなんだけど、それが嬉しくてさ、ダメだね」

笑うしかなくて笑うと、涼子も困ったように口元だけ笑いかけてきた。

「正直、ダメだと思うけど、仕方ないか、そんなことになっちゃったんなら」

「うん、そう言ってくれるとありがたい。涼子、今日の昼あいてる？」

「うん？　グチ聞いて欲しい？」

先に言われて、実咲は笑ってうなずいた。

「そう。悪いけど私の精神安定剤になってちょうだい」

「高くつくよ？」

「お昼代？」

「もち」

涼子が笑って、実咲はまじめな顔を作って返す。

「承知いたしました」

「うそうそ」
軽口で話すうちに、朝礼の時間になり、二人は慌てて向かった。

「あのバカ、どうしようもない奴だとは思ってたけど、ホントにどうしようもない奴だね」
昼休み、実咲は喫茶店で昨日の出来事を涼子に話すと、彼女はあきれかえった様子でため息をついた。
「だよね」
「でも、そのどうしようもない男が好きな実咲も、どうしようもないよね」
「まーね」
実咲は笑いながら水を一口飲む。実咲は苦笑いをするぐらいしか返事が出来なかった。すると、涼子は少しきつい表情になり実咲に詰め寄ってくる。
「まーねじゃないよ、実咲。前から思ってたけどさ、何であんなんにあんたが引っかかるのよ。そりゃ井上君はかっこいいよ？　私だって、誘われたらふらふら～って行きたくなるのは認める。でも所詮遊びの相手としては、でしょ。あんたが本気になる価値が、わかんない」
心配してくれる涼子に、実咲は力なく頷いた。
「そうだよねぇ……。私も、そう思うんだけど。でもさ、雅貴は悪い奴じゃないのよ」
自分でそう言ってから、ため息が出た。
脳裏をよぎるのは、雅貴の笑顔。
「どこが！」
涼子が目をつり上げたのを見て、実咲は困ったように笑った。
「うん、だからね、女への態度はどうかと思うんだけど。人としては悪くないんだよ、ただ女にだらしなさすぎるんだよね」
その言葉に、涼子がむっとした様子で更に詰め寄ってくる。
「ということは、実咲にとってはダメな人間って事に変わりないじ

ゃん」
「そこが問題なのよ」
あははは、と、実咲は笑って見せた。笑うしかない気分だった。
何で私は雅貴を弁護しているのだろう、と。
そんな気持ちがやりきれなかった。好きな気持ちっていうのは、こんなにもやっかいだ。ダメな奴だと思いながらも、人に言われるとかばいたくなってしまう。
涼子がため息をついて、真剣な顔をして実咲を見た。
「賭で付き合うなんて、そんなコト言うのは、本気だと思えないよ。絶対、いつか実咲が苦しくなるよ。意地をはって付き合ったりしない方がいいと思うんだけど」
涼子の言葉と、そして真剣に実咲を思う気持ちとが、胸に突き刺さった。
その通りだと実咲は思った。その通りだと思うのに、うなずけない自分が切なくて、情けなくて、涙がこみ上げそうになる。
「分かってる。分かってるけどさ、ダメなんだよ。嬉しいの。ひきとめられるなんて思わなかったからさ。別れなきゃって思ってるけど、ホントのホントは別れたくなくって……。ずっと一緒にいたいの。辛くなるって分かっててもさ、一緒にいたいんだ」
実咲は泣きそうになりながら笑う。
すると、困ったように笑った涼子がぽんぽんと背中をたたいた。
「うん、そうだね、そんなもんだよね。辛いのは実咲なのにね、ごめんね」
優しい声だった。涼子の気持ちが嬉しくて、今度は違う意味で涙がこみ上げてきた。涼子の言葉は正しい、実咲がそう感じているのも知っていて、涼子はそれでも実咲を思いやって尊重してくれている。
それが分かった。
うれしさに、実咲の頬がゆるむ。
実咲は目尻をぬぐって、涼子に笑顔を向けた。

「ううん、ありがと。涼子がさ、いてくれてよかった。甘えてごめんね」
「いいって。私は、実咲があいつと付き合うの、あんまり賛成しないけど、実咲が泣くのヤだしさ。いい方向に行けるように祈ってるから。迷惑とか思わなくていいからさ、いつでも愚痴っていいから」
「昼ご飯代払ったら？」
「そうそう、そこ重要」
ぷっと二人で吹き出す。実咲は涙を拭いながら笑った。
グチを交えながらもたわいない話をしていると携帯がなった。
着信を見て、実咲の手が止まる。それを見て察した様子で涼子が尋ねた。
「誰？」
「……雅貴」
今はまだ、雅貴と顔を合わせたくなかったし、声も聞きたくなかった。
顔を見れば、声を聞けば、また感情に流される。そして流される自分に嫌気がさすだろう。そして会いたくてたまらない自分を、嫌悪感を持って自覚させられるのだ。
「出なよ」
涼子の言葉に実咲は戸惑いながらも、出ないでいる理由を思いつかず覚悟を決めて電話にでた。
「はい」
『実咲？　今日、何時頃終わる？』
「今日はたぶん六時頃だと思う」
『じゃあ、その後どっか行こう』
断ろうか、実咲は一瞬そう考えたが、断ると「賭に付き合ってあげている自分」のスタンスが崩れそうに思えた。
遊んであげているのは、私の方。
雅貴にそう思わせたい。そんなくだらないプライドが実咲を突き動かした。

「わかった、終わったら電話する」
気がつくと、そう答えていた。断ることが屈辱に思えた。
電話を切ってから、とたんに後悔がこみ上げる。何をしているんだろう、と。くだらないプライドに振り回されても自分に良いことは何もないのに。
実咲はそんな自分に疲れてふっと息を吐くと、涼子が目の前で、しょうがないなぁというふうに、あきらめた様子でに笑っていた。
「思うようにしたらいいよ。実咲が望む方を私は応援するから。ダメだと思うのならそう言ってあげる。でも実咲が選んだのなら、私は実咲の選んだ方を応援するよ。それでもしがんばってもダメなら慰めるぐらいしてあげるから」
「うん、ありがとう」
涼子と話していると、実咲の目の前が開けて見えた。心が軽くなるように思えた。
涼子がいてくれて良かった。
そう思うけれど、改めてもう一度言うにはちょっと照れくさくて言えず、実咲はちょっとごまかして敬礼をしてみた。
「その時はよろしく。頼りにしてます」
「よろしい。その時の謝礼は忘れないように！」
涼子が胸を張って、実咲に会わせたまじめな低い声で答えた。
「昼食？」
実咲がくっと吹き出すと、涼子もぷっと吹き出し、顔を見合わせて笑った。
朝から重かった足取りが、喫茶店を出る頃には、だいぶ軽くなっていた。

8

仕事が終わった。
それがたまらなく憂鬱に思えた。
憂鬱で逃げてしまいたいのに、会えないと寂しくなるだろう。仕事であれば、どちらの気持ちも抑えがきく。けれど、会社の外に出れば、両方の気持ちにはさまれて身動きが取りづらい。
涼子とは部署が違うため終わる時間も違う。
実咲はため息をつき、ためらいながら携帯を取り出す。着信履歴に残る雅貴の名前。
やっぱり、忘れたふりして帰ろうか……。
一瞬悩んで、けれど結局かけてしまう。
呼び出し音を聞きながら、いっそ、電話に出ないで欲しいなどと考える。けれどすぐに呼び出し音がぷつっと途切れて雅貴の声が聞こえてきた。わずかな緊張感に、心臓がどくりとはねた。
『終わった？』
実咲の心とは裏腹に機嫌良さそうな雅貴の声。
「うん。今どこにいる？」
『そこから一番近いコンビニ。外にいるから』
「分かった。十分ぐらいで行く」
なんでもない会話に訳が分からないほど緊張した。実咲は切れた携帯を見つめながら小さく息を吐く。
私はこんなに緊張しているのに、昨日の今日で、雅貴には何の変化もない。
そう思うと、更に自分が情けなく思えて、もう一度ため息をついた。
「こんなコトしてて、いいもんかな」
呟きながら重い足取りでコンビニに向かう。
見えてきたところで、雅貴がコンビニから少し離れたところに座

り込んでいるのを見つけた。
何しているのか怪訝に思いながらも近づくと、足下に子犬が戯れているのが見えた。
またか。
実咲は苦笑した。
実咲が雅貴と親しくなったきっかけも、彼が捨て犬と遊んでいたのを見たときだった。わずかに懐かしさが込み上げた。
実咲が声をかける前に気づいたらしく、雅貴は顔を上げて「よお」と軽く声をかけてきた。
「また捨て犬でも見つけた？」
「ていうかもらった。里親探してるって言うから」
子犬が差し出される。実咲はそれに逆らわず受け取ると、胸に抱いた。
「ちっちゃいね、生まれてそんなにたってないのかな」
「三ヶ月。子犬を人にやるのならそれまでは絶対に親元で育てるのが義務だって、説得しておいたから。そしたら三ヶ月になったらそっこーで連れて来やがった」
「なんで三ヶ月？」
「犬同士の社会性をつけるため。あんまりちっこいときに母犬から離したら、犬が自分を犬だって自覚しないんだってさ」
「へぇ。そんなのがあるんだ」
「売ってるヤツは、平気で三ヶ月以下のヤツを売ってたりするけどな。ああいうの見ると何かやりきれないよな。取り扱っている以上俺が知っている程度のことは知ってるだろうに、そんな常識より、子犬の時期に需要があるからそれを優先させて売るとか。命よりも売り上げ重視っていうの？　そういう子犬を押しつけられる無知な飼い主からしても、良い迷惑だよな。まあ、飼い主が無知だから、ああいう商売の仕方が成り立つんだろうけど」
辛辣なことをなんでもない表情で言いながら、実咲が抱いている子犬に手を伸ばし、優しい目をして子犬の首を撫でた。

「雅貴、よく引き取る気になったね」
「二匹も三匹も一緒だろ」
苦笑しながら雅貴は実咲の腕から子犬を抱き取った。
「一回家帰るからさ、ちょっとつきあえよ」
「おっけ」
答えて、一緒に歩き始める。
あのときと一緒だな。
実咲は懐かしんでそっと笑う。
実咲の胸に懐かしさが胸に広がっていた。
その既視感が実咲の気持ちをゆるめてしまったのか、雅貴と肩が触れ合った。これまでみたいにふれあうほどの距離で歩きたくないと気をつけていたのに。自分の気のゆるみを感じながら実咲はまたさりげなく距離をあけた。
なんでこのタイミングなんだろう。
子犬を抱いた雅貴を見て思う。
いっそのこと嫌いになりたいのに、今やたらと実咲の好きな雅貴の姿ばかり見せつけられているようだった。
好きだなんて思っちゃいけない。揺るみかけた気を引き締めた瞬間。
「そんなに離れるなよ。やっぱりまだ怒ってるわけ?」
一瞬、考えていることが知られたかのように感じて、実咲はどきりとした。
が、そんなわけはない。実咲は冷静になると、今度は雅貴の言葉にムカッときた。
何をバカなことを言っているのか、と。怒ってないわけがないじゃないか、と。
けれどそんな気持ちを抑えて実咲は笑ってみせた。
「怒ってるわよ」
本心をあえていつもの軽口のように言ってのける。昨夜は雅貴と一緒にいる誘惑に負けたけれど、ゲームというのなら上位に立つふ

りぐらいしてみせる。にっこり笑ってなんでもないふりをしてみせる。

「悪かったって」

実咲の笑顔を真に受けたのか雅貴はへらへらと謝ってきた。実咲はにっこり笑ったまま雅貴に挑戦するように視線を合わせた。

「まさか謝って許してもらえるなんて思ってないでしょ？」

「分かった。じゃあ、こいつを心ゆくまで触らせてやるから」

そう言って子犬が差し出される。

あっさりと自分の挑戦が予想外な方向に躱され、怒っていたのに、もう雅貴の言葉に揺らぎ始めている。

「もうっ」

実咲は思わず本当に笑って、再び差し出された子犬を抱き取ると、子犬にキスをしながらこれ見よがしに言った。

「おまえは、こんなダメ男になっちゃダメよ」

「お～い、実咲。それはちょっと失礼じゃないか？」

雅貴の言葉に実咲は「ふーんだ」と顔をしかめて見せ、頭の片隅で考える。

そうだ、女としてそばにいなければ、雅貴の隣はとても居心地がよかったんだ。

久しぶりに感じる居心地の良さに、張り付かせていただけだった実咲の笑顔が本当の笑顔に変わる。

いやになる。

実咲は心の中でつぶやいて、二人の間にある気安さや楽しさを感じながら、簡単にいらだちが消えた事を、自嘲した。

そして、苦々しい気持ちで思い出す。

雅貴とこんな風に軽口を言い合うの、私、好きだったんだよな。

最近はこんな風に言葉を交わすことが少なくなっていたけれど。

軽口を交わすごとに、実咲の胸の中に以前の気持ちがよみがえってきていた。

「なにが失礼なわけ？　ペットは主人に似るから、雅貴にだけは似

ない方がいいに決まってるじゃない？」
ふふんと笑って言うと、ぷっと雅貴が吹き出した。
「違うって。よく見てみ。そいつ雌だから。失礼な奴だなぁ。こんなに美人なのに男扱いされて。な」
雅貴が実咲の腕の中の子犬を優しくなでて話しかける。子犬に近づけられた顔。けれど実咲の目の前にある雅貴の顔。一瞬どきりとする。
けれど雅貴の意識は子犬だけに向けられていて、期待混じりの警戒が無駄だったことに気づく。
そんな内心の恥ずかしさを振り払いながら、ふと思う。
そうだ、私は、雅貴のこんなところが好きだった。
動物が好きで、捨て犬に優しくて、里親を捜すために何軒もの知り合いに電話するような雅貴が。
よみがえる気持ちが、出会った頃の記憶を引き寄せた。

9　過去　～出会い１

雅貴は入社当時から新入社員の中で噂になっていた。
事務用品や実験器具の営業で出入りしている井上雅貴。
背が高く顔立ちもよくその上社交性まであったから、入社してすぐに女性関係の噂が耳に入ってきていたように実咲は記憶している。
当時実咲は雅貴に対して「顔がよくてもてるらしい」ぐらいの印象だけで興味はなかったにもかかわらず、それでも耳に入るぐらいには、その営業さんの存在は有名だった。
実咲がいる研究室は毎日大量に使う消耗品が多いために、彼も頻繁に顔を出し、先輩や同僚が競って対応していた。
意識し始めたのは入社一年目の半ば頃だった。
その日、会社からの帰りに実咲は捨て犬を見つけた。

「どうしたの？」
実咲が子犬に声をかけながら頭をなでると、その子犬はパタパタと尻尾をふってよろこんでいた。もしかしたら、捨てられる瞬間までかわいがられていたのかもしれない。そう思うと切なかった。
一人暮らしのマンションでは飼えないとは思いつつ、せめてもと餌を買って戻ると、そこには子犬に声をかける雅貴がいた。
時々シャーレを届けに来る人だ、という事はすぐに気がついた。たらしの営業さん。
けれど、あまりにも関心がなさ過ぎて、実咲は声をかけたいのになかなか名前を思い出せずに苦労した。
先輩達、この人のこと、なんって呼んでたっけ……と、実咲は必死に思い出して声をかけた。
「井上君、だよね？」
子犬を抱き上げたまま雅貴が振り返り、実咲を見て頭をひねった。
「えっと……、実咲ちゃん、だっけ？」

戸惑いがちな表情と声に、お互いにお互いの認識が甘いことを感じて、軽くほっとした。
それにしても。何で下の名前で呼ぶわけ？　しかも、なんで「ちゃん」付け。
その時、親しくもないのにそんな風に呼ばれてむっとしたのと、よく名前知ってるなと感心したのを覚えている。
「そう。よく名前知ってたね」
苦笑気味に実咲が答えると雅貴も苦笑して言った。
「俺も思った。全然話したことないし。でも名字の方は覚えてないんだよ。営業としては失格かなぁ」
「なにそれ」
困ったように苦笑いする雅貴の様子がおかしくて、実咲は名前を呼ばれて不快になっていたことも忘れて笑った。
「やっぱり変だと思う？」
「ちょっとね」
困ったように笑う雅貴に、実咲はからかうように笑って頷いた。
「あー、そうだ、ほら、研究室の室長さん。いつも、実咲ちゃんって呼んでるでしょ？　たぶん、そのせいだ。俺のイメージで君が「実咲ちゃん」になるのは仕方ないと思う。許して」
言いながら雅貴の目が実咲の持っているスーパーの袋にそそがれた。
「それ、ドッグフード？」
「うん。飼えないんだけど、せめて餌ぐらいあげようかと思って」
実咲が中を見せると雅貴はちょっと驚いたように缶詰を手に取った。
「この缶、けっこう高いだろ」
実咲はぷっと吹き出す。
「まあね。でも人の食事に比べたら安いもんだし。毎日ならともかく、今日だけだし」
実咲の言葉に、雅貴がからかうように笑いながら、ひとさし指を

立てて、わざとらしく言った。
「あんまり、いい餌食わすと、後が大変なんだぞ。あと、野良犬に餌付けも良くないよ。状況によりけりだけど、飼う気がないのなら、放っておくか、保健所に連絡」
にこっと笑って冗談めかして言った雅貴の言葉に、実咲はパチンと手を打った。
「確かに、そうかも。思いつかなかった」
思いがけない言葉に、実咲はなるほどと頷きながら雅貴の腕の中の子犬を撫でた。
「そうだね。教えてくれてありがとう」
雅貴を見上げると、礼を言われたのが意表を突いたらしく少し驚いた顔をして実咲を見、そして破顔した。
「どーいたしまして」
そういって楽しそうに笑う雅貴を見ながら、注意するでもなく、考えを押しつけるでもなく、さりげなく流せるように教えてくれた事に気付く。
実咲の中の「井上君」の好感度が上がった。
「井上君は、その子つれて帰るの？」
「まあ、しばらくはそうしようかと思ってる」
歯切れの悪い答えに実咲は首をかしげた。
「しばらく？」
「そう。ウチは犬三匹いてさ、一匹がけっこうな年でね、月イチで病院つれてかないとやばい状態なんだ。その上、手のかかる子犬が増えたらさすがにキツイから、里親が見つかるまでウチに泊めとく方向で」
「そうなんだ。でも、連れて帰って家の人は大丈夫なの？」
実咲の問いに雅貴はわざとらしく顔をしかめた。
「一人暮らしだからそれは問題ないけど……しばらく家の中は恐ろしいことになるな」
そう言うと、すぐに「まあ、何とかなると思う」と笑顔で立ち上

がった。話を切り上げようとしているのが分かり、実咲もそれにあわせて立ち上がる。
「んじゃ、この子のために、がんばってね。それじゃ、このドッグフード、もらってくれる？」
「さんきゅ、もらっとく」
「グルメ犬になったらごめんね」
快く受け取ってもらえたことにほっとして実咲が笑うと、
「その時は責任とってもらって、実咲ちゃんに時々高級ドッグフードを差し入れしてもらうよ」
と、雅貴も笑いながら返してきた。

１０　過去　～出会い２

実咲から袋を受け取ると「じゃあ」と手を挙げて、彼は止めてある原付に向かう。実咲はその後ろ姿にふと疑問を感じて呼び止めた。
「ねえ、井上君、子犬つれてどうやって帰るの？　まさか、その原付に乗せて？」
背中に呼びかけると彼は振り返って、何でもないような口調の返事を返してきた。
「そうだけど？」
当たり前のような返事に、実咲は戸惑いながら尋ねた。
「家、近いの？」
「あんまり近くはないな。」
苦笑いしながら言ったその返事を聞いて、呆れたのと感心したのとでひどく笑いが込み上げてきたのを今でもはっきりと覚えている。
「子犬つれて、どうやってバイクを走らせる気？」
「なんとか」
涼しそうな顔をして雅貴が答えた。
「なんとかって」
実咲は吹き出した。
「井上君って、意外と面白い人だね」
実咲はひとしきり笑うと、たいした問題でもなさそうな顔をしている雅貴に言った。
「よかったら車で送るよ」
その時雅貴の表情がゆるんだ。
「ホント？　三十分乗せていくことになるから、面倒だと思っていたんだ。こいつも疲れるだろうし」
「その代わり原付取りに、ここまで戻ってこないといけないけどね。二度手間だけど」
「おっけー、おっけー。助かるよ、ほんと。実咲ちゃんの方こそ、

迷惑かけるけど」
　思いがけず遠慮がちな反応に好感が持てて、実咲は思わず笑った。
「迷惑じゃないよ。井上君のおかげで、私もこの子のことを心配せずにいられるわけだし」
「でも実咲ちゃん、車乗ってきてるように見えないけど」
　確かに実咲は徒歩だった。
「アパートに置いてあるから。こっから歩いて十分弱だけど、急いで取ってくるから十五分ぐらい待っててもらえる？」
「家、どっち？」
「こっち。この通りのパチンコ屋のとこを右に曲がって、そしたら本屋あるの、知ってる？そこの近くなんだけど」
　実咲が指した方を見て雅貴が頷く。
「あぁ、それなら一緒に行こうか。俺んちはこの通りをずっと行くんだし」
「そう？」
　そうして一緒に歩き出すと、私たちはとりとめもなく話した。
「でもウチまでくるの面倒じゃない？」
「なんで？」
「原付押しながら歩いたら疲れるし」
「まあね。楽ではないけどな。でも、こんな道ばたに原付置き去りにできないし。下り坂だし、そんなに大変でもないよ。実咲ちゃんのアパートの駐輪場におかせてよ」
「そっか。うん。そうだね。じゃあ先に原付乗っていっても良いよ。犬つれて私が歩くからさ、向こうで待っていてよ」
　原付を押すのは結構大変なはずなのに、雅貴は笑って実咲の提案を断った。
「そんなにおいはらわなくてもいいだろ」
「追い払ってなんかないよ」
「じゃあ、一緒に歩いても良いだろ。実咲ちゃんさー、いつも研究室の奥の方にいるし、俺が荷物持って行っても、全然動く気配ない

し。嫌われているかと、どきどきしてたんだよ」
その言い方がおかしくて笑うと、「実咲ちゃんと話してみたかったんだ」と、さらっとくさいことを言われてしまった。
名前もまともに覚えてなかったのに、話してみたかったっていうのは単なる社交辞令なんだろうと思ったが、悪い気はしなかった。
「話したこともない人を嫌ったりなんかしないよ。ただ」
「ただ？」
「井上君、先輩達のお気に入りだからね。井上君と話したい人いっぱいいるし、私がわざわざ行く必要ないから」
実咲の受け答えに、雅貴はにやっと笑ってから、大げさなぐらいうなだれた。
「ふーん。俺、やっぱり実咲ちゃんからあんまり良い印象をもたれてなかったんだろ？」
確かに、と、実咲は考える。あまり良い印象は持っていなかった。かといって、格別悪い印象を持っていたわけでもないけれど。良くも悪くも、関心がなかった、と言う方が正しい。
でも、ここは。
実咲はわざとらしくにっこりと雅貴に笑いかけた。
「あ、ばれた？」
「うわっ、傷つく！」
雅貴は、わざとらしく更にがっくりとうなだれた。
会話を交わしながら、実咲は、意外に話しやすい雅貴に「さすが営業」と感心していた。
実咲自身は、あまり人と話すのが得意な方ではなかった。特に、社交的な人と話すのは大抵疲れる傾向にある。けれど雅貴と話すときは、息が合うというか、自然に会話が弾むのを感じていた。

11　過去　～出会い3

「それにしても、井上君って、原付なんだね。ふつーに、かっこいい車乗ってそうなのに」
　何となく覚えた違和感を、ふと実咲は口にしてみた。
「無理。車は好きだけど、金かかるし。なんか、俺、そういうイメージあるみたいだね。そんなに遊んでるつもりはないんだけどなぁ。欲しい車は買えないんだよ。適当に手頃なヤツも考えたけど気に入らない状態の車乗るくらいなら、ない方がましだし」
「へぇ、井上君、買えないぐらい高い車が欲しいの？」
　うっかり非難がましい口調で言ってしまった実咲の言葉に、雅貴がクスッと笑った。
「一戸建てに住んでるから」
　雅貴はなんでもないように言ったが、実咲はえっと止まる。
「親元、って事だよね？」
　と言って、あれ？　と思う。それならむしろお金が貯まる。考え込む実咲を前に彼はにっこりと笑った。
「一人暮らしって言ったろ？」
「まさか……買ったの？」
「まあね」
「分かった！　犬のためでしょ？」
　驚いたのを隠すように、からかうようにおもしろくもない冗談のつもりで言った実咲だったが、雅貴はにやりと笑うことでそれに答えた。まさかの正解だったらしい。
「なんでまた、そこまでして」
　あきれるを通り越して、感心してしまった。
「ウチのは、全部おれが拾ってきたんだよ。一人暮らしする前から飼ってた奴らもいるし」
「全部って、全部捨て犬を拾ったの？」

驚く実咲に、雅貴が頷く。
「そう」
「三匹捨ててあったのを全部引き取ったって事？」
その質問に、雅貴は楽しそうに笑った。
「普通は、そう思うよな。三匹の犬が全部自分が拾ってきた犬って聞いたら」
「違うの？！」
驚き通しの実咲に、彼が胸を張った。
「俺の捨て犬センサーは高精度なんだ」
「なにそれ」
思わず笑ってしまった実咲に、雅貴はしみじみとつぶやいた。
「冗談抜きでさ、なんでか捨て犬と遭遇するんだよ。二十六年生きてきて七回子犬を捨ててあるのに遭遇したってヤツは、俺以外に出会ったことがないね」
「七回も？」
子犬を拾った回数で感心する日が来るとは思わなかった、と、実咲はまじまじと、さっきから自分を驚かせ続けている張本人の顔を見た。
「奇跡の高確率」
にやりと彼は笑った。
「……それは、犬に運命感じるのは当然かもね……。うん、家買ったっていうの、納得できたよ」
はぁぁ……と、しきりに感心しながらも、実咲は雅貴をからかった。
「それにしても、車より家だなんて、予想外に堅実なことをするんだね」
彼が思った以上に好印象な事がうれしくて、にまにましながら見つめた実咲に、雅貴が苦笑いした。
「初めてまともに話したのに、予想外に堅実とか、失礼じゃない？どうせなら『犬のためにそこまでするなんて、優しいのね』とか

言われた方がうれしいんだけど」
「あ、それは、他の女の子に任せるよ」
実咲がはは っと笑って手を振ると、雅貴はわざとらしくため息をついた。
「実咲ちゃんって、結構きついことをさらっと言うよな」
「でも、確かに、優しいって言うか、すごいよね。私には、そこまでの思い切りって言うか、根性ないし。犬は実家において来ることもできたんでしょう?」
何気なく尋ねたことに、彼は真っ直ぐ前を見て答えた。
「俺以外に犬を好きな人がいないからね」
淡々とした声になったことに、この時実咲は気付かなかった。
「好きじゃないのに飼わせてくれてたんだ。それはそれですごいね」
雅貴は、その言葉に複雑そうな顔をして、ごまかすように笑った。
そこでようやく実咲は聞いてはいけないことなのだと気付いた。
アパートに着くと、そのまま車に乗り込む。
「送っていった帰りだけど、そのまま私の車乗って原付を取りに戻る? それとも今日は原付、置いて帰る?」
実咲は運転をしながら尋ねる。
「それじゃあ、帰りも頼むよ」
頷いた雅貴に実咲はほっとした。普通の会話は続けられることにも、さっきの会話の後でも自分と話すことを雅貴が不快に思っていないらしいことにも。そして何より。
「うん。よかった、私も助かるかも」
ほっとして笑った実咲に、不思議そうに雅貴は顔を向けた。
「なんで実咲ちゃんが?」
「方向音痴なんだよね。送っていくのは井上君がいるから良いけど、帰り道が分からなくなったらどうしようかと思ってたの」
「ナビつけたら?」
苦笑いする実咲にからかうように雅貴が言うと、実咲は真剣に頷いた。

「ホント、ナビ欲しいんだけどね。でも、お金かかるし。自分でやったら安くすむって聞いたけど私にはわかんないし」
「俺、そういうの得意だよ」
ため息をついた実咲に、雅貴が弾んだ声で言った。
「車持ってないのに？」
「趣味だから」
楽しげに言う雅貴の声に、本当にそういうのが好きらしいと感じ取れた。
「それは、設置してくれるって事？」
実咲が笑うと、うれしそうに雅貴が頷いた。
「うん、つける気になったら声かけてよ」
「そう？　ありがとう」
実咲は笑ってうなずく。頼むことができれば確かに良いかもしれないけれど、そんな気はさらさらなかった。好きなことを話して楽しんでいるだけの、ちょっとした社交辞令だとしか思っていなかった。
家に着くと、車で待とうとする実咲に、雅貴が部屋にあがるよう声をかけた。子犬が慣れるのに時間がかかったら待たせることになるから、と。
実咲は車から降りて、家を見渡す。
中古物件だったのだろう。その家の雰囲気もまた、微妙なノスタルジックさが意外だった。
実咲の中の雅貴のイメージは、この数時間でだいぶ変わっていた。あまり新しい家ではなかったが、庭が広い。そして、実咲はぎょっとする。
「い、井上くん、庭に出るところの戸、開いてるんだけど……」
「うん、その辺りは開けっ放し。犬がいつでも家の中は入れるように。元々客間用？　ていうか、床の間って言うの？　みたいな和室だったんだけど、今はそこが犬小屋なんだ」
「ちょっと待って、今、私、犬小屋の概念について、考え直すから」

コルクの床になっている部屋と、犬と、庭を見ながら、実咲は唖然とする。雅貴がにやにやと笑っていた。
「実咲ちゃん、おもしろい言い方するなぁ」
「うん、でも、おもしろいのは、井上くんの発想の方だと思う。防犯上どうなのよ、それ」
「あー。そこはほら、犬もいるし」
にやにやと嘯いた雅貴に、実咲は首をひねる。
「あり得ないでしょ」
「ホント大丈夫。そこの部屋は庭から誰でも入れるけど、そっから他の部屋には入れないような作りにリフォームしてあるから」
「……なるほど」
思わず感心して庭から中をのぞいた実咲だった。
玄関から家にあがると、犬小屋部屋に続くドアの鍵を開け、そっからに移動する。一匹の寝そべった老犬がゆっくりと立ち上がり、雅貴に歩み寄ってきた。そして元気な二匹も雅貴に駆け寄った。
慣れない環境に、子犬は戸惑っていたが、3匹の犬たちはどれも子犬に関心を示すが、いたずらすることなく、また弱っているという老犬は子犬の世話をするかのようにクンクンと子犬をかいでは側にいようとしていた。子犬はすぐに落ち着いていった。
その様子に安心した雅貴は実咲に言った。
「今日は本当に助かったよ。良かったら一緒に晩飯食わない？　お礼におごらせてほしいんだけど」
「え？」
にこにこと笑っている雅貴を前に実咲は戸惑った。おごってもらえるようなことはした覚えがない。そもそも、子犬を引き取って大変なのは雅貴の方だ。自分は引き取れずに放置するつもりだった。
返答に困ってしまった実咲に、雅貴が困ったように笑う。
「まさかとは思うけど、俺が送り狼になるとか、そういう心配はしてないよな？」
実咲は吹き出した。

「それはやばいね。断ろうかな」
クスクスと笑う実咲に、雅貴がほっとしたように笑う。
「あんまり良い噂がないのは知ってるけどね。でも俺だって同意を得ないと手を出したりしないし」
まいったな、とわざとらしく困ったフリをしておいてから、雅貴はまじめな顔で実咲を振り返った。
「でも、実咲ちゃん可愛いし、実咲ちゃんさえよかったら俺は手を出しても……」
雅貴が美咲の肩に手を置いた。
「絶対遠慮しとく」
ペシっとその手を振り払い、実咲は、つんと顔を背けた。けれど、笑いをこらえる実咲の口元はゆるんでいる。
「うわ、ソッコー？」
「まーね」
雅貴が自分をそういう目で見ていないらしいことを実咲は感じていたため、実咲にとっても、雅貴にとっても、このやりとりは気楽な軽口でしかなかった。
二人きりの部屋での、そんなやりとりさえただの楽しい会話だった。
笑いながら、部屋を出る。
その後、結局、口の上手い雅貴に言いくるめられて、実咲は夕食をおごってもらうことになった。
この日から実咲は雅貴に対する印象を変えていた。
思ってたほど変な人じゃないかも。
時々研究室にやってくる、女の子ウケの良い営業さん。
また話す機会があれば、楽しいかもしれない、そう思った。

12

この時はまだ思いがけなく気の合う友達を見つけたような気分でしかなかった。

それからしばらくは、たまに言葉を交わすぐらいの会社に顔を出す営業さんにすぎなかった。

けれど、実咲が机の上に置きっぱなしにしていた本がきっかけで、本と音楽の趣味で意気投合し、それ以外にも話が合ったりといったところで、恋愛対象としてではなく、友達として急激に親しくなっていった。

冗談半分にしかきいていなかったナビ設置も、親しくなったことで結局本当に雅貴に頼んでやってもらうことになった。

というよりも雅貴がナビ設置に乗り気で、自分の趣味を実咲の車に乗せて楽しんでいたというのが正しいかったのだが。

気の合う男友達ができて楽しかった。

ナビ設置や、本やＣＤの貸し借りをする内に雅貴の友達とも親しくなったほどだった。

完全な友人としての付き合いしかなかったし、一年以上もの間、実咲にとって雅貴は気の合う男友達でしかなかった。

それが、どうしてこんな風になっちゃうのかなぁ。

実咲は思い出しながら苦笑した。

そう、あの頃は楽しかったのだ。あの頃の気持ちのまま、友達として付き合っていけていたのなら、こんな辛い思いをせずにすんだのに。

女癖が悪すぎと笑いながら、雅貴をこづいて彼を好きなままでいられたのに。

出会ったのは二年ほど前の出来事だった。実咲にはたった二年で、自分の中の何もかもが変わってしまったように思えた。

けれど雅貴は何一つ変わっていない。出会った頃のままなのに。
変わったのは、私自身。
二年前と同じような状況に、今実咲はいた。
実咲のアパートの駐車場で、実咲の車に犬を抱いて乗り込む雅貴。
状況は同じなのに、あの頃との気持ちの違いが、実咲の胸に突き刺さった。
あのときは楽しかったのに。
今は雅貴が側にいることに、実咲の胸の中に幸せと苦痛が同居している。
「おまえ、頼むから車でお漏らしすんなよ」
雅貴が子犬に話しかける。
子犬はぱたぱたとしっぽを振って、雅貴の指をぺろぺろとなめている。
楽しそうに雅貴が笑っていた。
その姿が愛しくて、こみ上げてくる幸福感。そして苦痛。
実咲はそれらから目をそらし、からかいを含んだ声ですごんでみせた。
「もしもの時は、雅貴が責任もってちゃんと自分の体で受け止めてね」
にやりと笑う実咲に、雅貴が神妙な面持ちで頭を下げた。
「……すみません、バスタオルを貸して下さい」
殊勝な態度に、実咲は鷹揚に頷いて見せると、顔を見合わせて二人で笑った。
実咲はとってきたバスタオルを渡すと、運転席に乗り込んだ。
運転をしながら雅貴を盗み見る。
今のような穏やかな表情を見るのは久しぶりだった。
最近はまともに会話したことがなかったのだと気がつく。バカみたいに、出会えばセックスをしていた。
セックスは気持ちが良い。体だけでなく、心が。不安な気持ちや苦しい気持ちをごまかしてくれる。素肌が触れれば側にいる実感を

満たしてくれる。自分が雅貴にとって一番近い存在だと勘違いさせてくれる。快感が考える事を放棄させてくれる。だから、バカみたいに体を求め、体だけを求めてくる雅貴に応えた。

今、子犬に向ける穏やかな雅貴の表情を見て、セックスの気持ちよさを求める事の無意味さを、突きつけられる思いだった。

セックスに雅貴の心はない。

小犬を見つめる雅貴の優しいまなざしに、実咲は現実を痛感した。

穏やかな雅貴の表情は愛しすぎて、腹立たしいほどに切なさをつもらせる。

ハンドルを握る実咲の手に力がこもる。

これ以上、彼を盗み見るのはやめようと思った。

動揺して、手元が狂いかねないと思った。前を真剣に見ているのに、集中して運転をしようとしているのに、実咲の頭の中は、どこか他人事のように白々しくふわふわと景色が流れていく。人が飛び出してきても、とっさに動けないかもしれないと思えるほどに、運転に集中できずにいる自分を感じていた。

運転に集中しようとしているのに、実咲の頭の中は隙あらば雅貴のことを考えようとする。

運転に集中しないと、そう思いながらも以前雅貴の家で飼われていた老犬が死んだときのことが実咲の脳裏をよぎった。

「犬は人より先に死んでしまうからな」

あの時、雅貴がそう言って悲しそうに微笑んだ。

その表情が浮かんで離れない。

小学生の頃拾ってきて初めて飼った犬だったと話してくれた。

母親は犬が好きで、母に教わりながら二人で育てたのだと。その後、母親が病気でなくなり、母の言ったことを思い出しながら、一人で世話を続けていたと話した。

「母が亡くなってからは、こいつがいたから、大夫救われたよ」

そう、愛おしそうに、命が尽きた老犬を撫でていた。

雅貴が犬に向ける笑顔は、いつでも優しい。

あの頃は私と話す時もそんな笑顔をしていたのに、と実咲は思い出した。

裏のない、好意が裏打ちされた笑顔。

思い返すと、雅貴が自分に向ける表情に違いがあることがわかり、愕然とした。

雅貴の犬に向けるような笑顔が、私に向けるものとは違うと感じるようになったのはいつ頃からだっただろう。

実咲は考える。笑顔なのに。同じ笑顔であるはずなのに、この子犬達に向ける笑顔は優しく、実咲を含め女性に向ける笑顔が軽薄に見えるようになってしまっていた。

子犬に向ける優しい笑顔。「先に死んでしまうから」そう言って悲しげに笑ったその情の深さ。

一度でもあっただろうか。付き合っていた女性と別れてあれほど悲しそうに微笑んだことなんて。

雅貴はいつでも女性と別れるたび何事もなかったように笑っていた。

きっと私と別れても、同じように笑っているのだろう。

そう思った瞬間、たとえようのない悲しみが実咲の胸をしめた。

おまえはいいね。雅貴に優しくされて。きっとこれからも大切にしてもらえる。

雅貴の腕の中にいる子犬に、実咲は心の中でそっと話しかけた。

12（後書き）

読んで下さっている皆様、拍手を下さってる皆様、いつもありがとうございます。
拍手へのコメントのお返事は、活動報告にて行っております。
時折、自覚なしでネタバレしていくので、ネタバレが苦手な方は、活動報告をのぞく際は、ご注意下さい。

13

雅貴の家に着くと二匹の犬が出迎えてくれた。
もう、この二匹にも会えないと思っていた。元気だが十才を超えているアズキとまだまだ元気盛りのリュウ。
「相変わらず元気ねぇ」
実咲は目を細めた。
雅貴は飛びついてくるリュウの頭を軽くなでながら子犬を二匹の犬と対面させる。
「今日からウチの家族になるからな」
子犬を抱きしめたまま座り、なおも飛びつこうとするリュウを牽制しながら話しかける。
「けんかすんなよ」
雅貴はリュウの頭をわしゃわしゃとなでた。
リュウに比べてずいぶんおとなしいアズキは子犬に興味を示したように鼻を突きつけている。
新入りと古株達はクンクンと互いににおいをかぎながら、挨拶を交わしている。
「こーら、ちび助。あばれるなっ」
子犬が少し落ち着かない様子でばたばたともがきはじめた。
「タラシはイヤだってさ～。ねー？」
実咲は茶々を入れながら歩み寄って子犬の頭をなでると雅貴が苦笑した。
「……根に持ってる？」
のぞき込む雅貴に、実咲がにっこりと笑う。
「持ってる」
そのやりとりに胸が一瞬痛むが、何気ない会話として流れていく。
以前のような打ち解けた雰囲気があった。
いいな、ずっとこうしていたいな。

実咲はこの心地よさに和みかけた。しかしその楽しい気持ちとは裏腹に、続かないと分かっていながらそんなことを望んでしまう自分自身を顧みて、たまらなくせつなくなった。

実咲は立ち上がると、何気なく部屋の中を見渡した。

雅貴の家には、流した浮き名を考えると、驚くほどに女臭さがない。

あまり家には女性を連れてこないようにしているらしい。

理由は、この犬たちだと雅貴は言う。

出会ったきっかけの子犬のことがなければ、実咲もこの家に来ることはなかったのかもしれない。それでも以降何度か雅貴の家に行くこともあったのだが、それもずっと友達としてのつきあいの上で成り立っていたのだろう。

今思えば「彼女」に収まってからここへ来るのは久しぶりだったのだから。

おそらく雅貴は家に女性を連れ込んだことはほとんどないはずだと、実咲は思っている。実咲との付き合いも、セックスをするときは必ずホテルか実咲の部屋なのだ。

自分の部屋に女の子が来ると、女の子を一人で帰すのはイヤだからとか、送っていくための車がないだとか、尤もらしいことを言っていたが、今の実咲には、雅貴が、自分のテリトリーから女性を追い払っているだけにしか思えなかった。

雅貴は、女性と付き合うとき、どこか一歩距離をおいているような気がした。

実咲はふと、いつか交わした雅貴との会話を思い出した。

まだ友達としてこの部屋にきた頃のことだった。

「ホントに、犬好きだよね」

雅貴と犬たちが遊ぶ姿はほほえましくて言った言葉だった。

「雅貴、付き合っている人に嫌がられたことない？」

あまりにもかわいがる様に、おもしろがって実咲がからかうと、

実咲を見て雅貴の片方の口端がゆがむように弧を描いた。
「一回、犬と私とどっちが大切なのよって聞かれたことあるな、そう言えば」
「なにそれ」
実咲が笑うと、雅貴はおかしいだろ？　と言うように口元が笑みを作る。目は笑っていないように見えた。
「で、なんて答えたの？」
「犬の方が大事なんて、思っていても言うわけないだろ」
雅貴が笑った。
「まあ、それはそうよね。で、実際のところはどうなの？」
からかう実咲に、雅貴は笑って、当然のように言った。
「人間は、俺がいなくても生きていけるけど、ウチにいる奴らは、飼い犬にしてしまった以上、俺がいないとまともに生きていくことは不可能だ。そしたら、必然的に答えは決まるだろう？　それが犬を飼う以上、飼い主が持つ責任だしな。大切にできないのなら、自分の都合ばかり押しつけるのなら、ペットを飼う資格はないだろ」
当然のように、面白そうに笑いながら雅貴は言った。それを分からない女達をあざけっているようにも見えた。

その頃、雅貴の付き合うタイプの女性にあまりいい印象を持っていなかった実咲は、相手の女性の気持ちを考えたことはなかった。けれど今になって思い出した雅貴の言葉に、実咲は痛みを覚えた。
当時実咲は、彼の一本筋の通った考え方には共感する部分が多かった反面、フェミニストのくせにずいぶんと皮肉な見方をすると思っていた。
今になってそれを思うと、ふと疑問がよぎる。
本当にフェミニストだろうか。むしろ女性を厭っているようにも……。
そこまで考えて、ばかばかしいと考えを拭う。
いつだって女の子には愛想良く、優しすぎるぐらい優しい態度。

常に「彼女」がいて、同時進行で何人とも付き合うような男だ。
女嫌いだなどという、突拍子もない考えをした自分に、実咲は苦笑いした。
こみ上げてくる笑いと同時に、妙な不安感もこみ上げてきた。
雅貴は部屋の中を歩き始めた子犬と、先輩犬たちの様子を穏やかな顔で見守っている。
「雅貴」
不安になって名前を呼んだ。
「なに？」
雅貴が返事と同時に振り返った。その穏やかな笑顔が、犬に向けていた表情そのままで、実咲はたとえようのない安心感を覚える。
「……雅貴の作った、カルボナーラ食べたい」
何の用もなく呼んだ手前、適当に思いつくことを言ってごまかす。
雅貴は一人暮らしが長く、実咲よりも料理もうまい。高校生の頃から一人暮らしをしているのだという。一人暮らしをしなければいけないほど実家が遠いわけでもなかったらしいが、再婚したばかりの年若い義理の母に気をつかったのだと言っていた。
「いい年こいて、俺と一回りしか違わない母親を持つとは思わなかったよ」
そう言って皮肉るように笑ったことがある。
実咲はその恩恵を何度かうけたり、得意料理だという何品かを習ったりしたことがあった。
雅貴は一歩間違えると嫌味なぐらい、いろいろとそつのない男だった。けれど自分が出来るからといって人を見下すようなことはせず、丁寧に根気よく教えてくれた。
どんぶり勘定で料理をする実咲には雅貴の作る料理は面倒なほど手が込んでいて、ほとんど作ったことがないのだが。たまに思い出して作ると、失敗をする……というよりも別物になっていた。
実咲の言葉に、雅貴は少し悩むように「あー……」とつぶやく。
断るつもりなのだろうと実咲は思った。雅貴はこの家に他人を長居

させる気はないはずだからと。
言ってみただけなのだ。今更、雅貴に期待することはない。雅貴にとっては代えのきくセックスフレンドの一人でしかないのだから。
好きだなんて思ったらいけない。自分が特別だと勘違いしたら傷つく。
断られたときの返事を考えながら、よりにもよって、自分が傷つくようなことを口走ってしまったことを実咲は悔やんでいた。
雅貴は悩んだ様子で、冷蔵庫を開けている。そして、キッチンで戸棚の中を確認すると、実咲に向かって笑顔を向けた。
「じゃあ、久しぶりに食ってく？」
屈託のない笑顔に、実咲は一瞬ひるんだ。思いがけない言葉と、思いがけない雅貴の表情。実咲は動揺した。
「え？　いいの？」
うわずりそうな声で、必死に、なんでもないフリをしながら返事をする。
「自分で言っといて」
「……うん、そうだね。ありがとう。久しぶりに食べたかったんだ。雅貴に習ったとおりに作っても、なんでかうまくいかなくて」
「卵液を絡めるときにコツがいるんだって。実咲は急ぎすぎるんだよ」
雅貴が、楽しそうに笑った。

14

「楽しいなんて、思いたくないんだけどね」
いつものように二人で食事をしながら自嘲気味につぶやく実咲に、涼子はなんでもない顔をして言葉を返す。
「仕方ないでしょ。嫌いになったから別れようとしたのとはワケが違うんだし」
「まーね」
実咲はため息混じりに、目の前の食べ物を食べるでもなしにお箸でつついた。
「でもさ、ちょっといい傾向じゃない？」
「なんで？」
にっこり笑って言った涼子に実咲はいぶかしみながら箸を置く。
「だってさ、ずっと一緒にいるのが辛いって言ってたでしょ。それって楽しいって思える余裕が今までずっとなかったってことでしょ？　でも、今は楽しい」
ね？　と、涼子が笑った。その思いがけない言葉に、実咲は動揺した。置いた箸をもう一度持ち上げ、また目の前の食べ物をつつく。
「それは……もう、別れる決意があるからじゃないかな……」
「そうかなぁ……」
涼子の納得がいかなそうな反応を見ながら、実咲はこれまでのことを思い返してみた。
「でも、そうだね。最近っていうか、雅貴と付き合う前頃からかな？　思い返すとさ、昨日みたいに一緒にいて楽しかったこと、ほとんどなかった気がする」
「そうなの？」
「うん。一緒にいるとさ、うれしかったり、幸せな気持ちになったりとかはするよ。好きだから。でも、楽しいかって言うと、ちょっ

と違ってたかも。どっちかっていうと、辛かった。たとえばさ、涼子とこうしてただ話してたりするだけで私は楽しいしありがたいなぁとは思うんだけど、こんな感覚、雅貴とはなくなってた。好きな人が一緒にいるっていう幸せはあるんだけど、それは、もっと、こう、自己陶酔的って言うか……」

どう言えば上手く伝わるか分からずに、説明していると、涼子がうんうんと頷いてきた。

「あ、それはちょっと分かる。私の場合は、実咲と一緒にいて楽しいって言うよりなんか一緒にいるだけで落ち着く～ってかんじ？」

「そうそう。そんな感じ。気を使わなくていいって言うか……。前は、雅貴と一緒にいても、楽しかったんだよ……」

実咲は言葉を切ると、さっきからいじるだけだった料理をようやくぱくりと一口食べた。

「なんなんだろうね……。どうしてこんなになっちゃったのかなぁ」

思い返すと、友達として楽しく遊んでいた頃があまりにも遠くに感じた。

その様子を見ながら、涼子が少し躊躇いがちに問いかけてきた。

「……あのさ、でも今はまた楽しく感じてるんでしょ？　もしかしたら前のように戻れるのかもしれないよ？」

「え……？」

「……で、もし、そうなったら、どうする？」

以前のように戻れたら。

想像して、実咲はため息をついた。

昨日の楽しかった時間が実咲の脳裏をよぎった。楽しくて、手放し難い幸せな時間。

幸せすぎて、賭をした現実との落差が押し寄せる。

あんな幸せな時間が恋人としての時間として続いたら、自分がどうするのか想像もつかなかった。

「……どうしようね」

気力のないその返事に、涼子が詰め寄った。

「どうしようね、じゃないよ。情を移せば移すほど別れるのが辛いよ？　ただでさえこんななのに、いい状態がずっと続けばそれでいいけどさ、もし同じ事繰り返されたら……つらいよ？」

「……慰めてくれる？」

哀れっぽい顔をして見つめる実咲に、涼子が渋い顔をして苦言を呈す。

「慰めてあげるけどさ……覚悟はしといた方がいいかもね。でも最初から悲観もいい結果生まれるわけもないし、ある程度前向きな部分も必要だよね」

「無茶いってるよ……」

実咲は空になった食器をよけると、テーブルに突っ伏した。

「……他人事だもん」

涼子は、いっそ冷淡にふふんと笑って言ってのけた。

「そうね、他人事よね」

実咲は突っ伏したまま涼子を見上げ、笑った。他人事と言いながら、本当は誰よりも気にかけてくれていることを知っている。聞き流して欲しいことはちゃんと聞き流してくれる。慰めて欲しいときでもいさめられて、でも本当に辛いときは誰よりも本気で向き合ってくれる。

彼女の言葉ほど優しい「他人事」という言葉はない。少し離れて冷静に、本質を的確に突くような、親身になり過ぎない、けれど心からの優しさ。

「うまくいこうがいくまいが、やれるだけのことをした方が後悔しないと思うよ」

他人事と切り捨てたその口で、涼子がこの上なく優しい声で実咲を包み込む。

「……かもね」

実咲は、涼子を見上げて微笑んだ。

15

やれるだけのこと。

けれど、何をすればいいというのだろう。

信じることはできない。どうしても疑ってしまう。そして疑り続けていたい。信じてまた傷つくくらいなら、疑って「ああ、やっぱり」とあきらめた方が楽だから。けれど疑り続ける自分に、一体どれだけのことができるというのか。

どうして「好き」だけじゃいけないんだろう。

そう思うと切なくなった。それだけなら、きっと辛くはなかった。けれどそれだけではいられなくて。見返りが欲しい。雅貴にも同じように自分を思って欲しい。

たったそれだけの願いは、果てしなく無理なことのように思える。

実咲は雅貴からただの一度も「好き」という言葉を聞いたことがなかった。

分かっている。たぶん、雅貴には私に対する恋愛感情はない。

その結論に実咲は溜め息をついた。

それは最初から分かっていたことだった。雅貴の実咲に対する感情は、友情の上の好意だ。大切にされているのも分かっている。好意を持ってくれているのも知っている。けれど、それは恋愛感情ではない。実咲の想いと雅貴の想いは同じ位置にはないのだ。けれど、いつか、好きになってもらえたら……そう期待をしていたけれど。

なのに彼の気持ちを得るために始めた二人の付き合いは、実咲が求めれば求めるほどに、遠ざかっているように感じた。

雅貴の気持ちを求めて、追えば追うほど遠くに感じた。

近くにいると感じた瞬間、突き放されるような。なのに突き放されたかと思うと、いつものように側にいたり。

私だけを見て欲しいという想いは、ついに届かなかった。

抱き合って名前を呼ばれる瞬間はあんなにも近いのに、呼ぶ声は

求められていると感じるのに、終わってしまえば寒々しいほどに、遠くにいる。もしかしたら、嫌われているんじゃないかと思うほどに、いっそ冷淡に雅貴は去ってゆく。

突き放されているのではと感じる瞬間が怖くて、身構える癖がついてしまったのかもしれない。期待しないようにする癖が。

癖は抜けない。そして現実も辛いことの方が多い。

雅貴を信じるのは、とても難しいことに思えた。

自信を持っていた、彼の実咲に対する好意すらも疑りたくなるほどに。

付き合っている間に、ずっとつきまとっていた他の女性の影。入り替わり立ち替わり数多の女性が雅貴の周りを立ち寄っては去ってゆく。

人気があるのも考え物だ。実咲と雅貴がつきあっているのを知らない会社の同僚達はその話題で何かあると盛り上がるのだ。実咲はそれを知っていたから、彼女たちの情報界隈では雅貴と一緒に行かないようにしていたため、見つかったことがないのだが。

それでも雅貴が他の女性とキスしているのを見たあの瞬間まで、ずっとそれらの噂を信じないようにしていた。噂に過ぎないと。それはただの友達だと。

けれど、あの突き放されていると感じる瞬間を重ねたぶんだけ、目をそらしていても、確かに不安はふくらんでいたのだ。

そして、実際に実咲を抱いたその腕で、他の女性も抱いていた。

私と雅貴の気持ちは、あまりにも違うところにある。

実咲は何度目かの溜め息を小さくつく。

好きだと、ただそれだけ思えていた頃のままいられたなら、どれだけ楽だっただろうと実咲は想像する。友達として側で笑っていられるだけで十分だった、あの頃のままで。

以前は一緒にいるだけで楽しかった。趣味が似ていて、話していていつまでも会話が途切れることがなかった。CDや本の貸し借りをしたり、雅貴の男友達に混ざって一緒に遊びに行ったりもしたこ

ともあった。

雅貴のことを友達として信頼していた。考え方も価値観も似ていた。一緒にいて気兼ねをすることもなくとても落ち着けた。自分にとってそうなように、雅貴にとっても自分は大切な友達なんだと感じていた。

あの頃はまだ、雅貴のだらしない面が見えていなかっただけかもしれない。雅貴は友人に対してはいい奴なのは確かなのだ。頻繁に女性を取っ替え引き替え遊んでいる割に男友達が多い。

あの頃の実咲は、女としてより友達としての付き合いしかせず、また雅貴も女としての実咲を求めてもいなかったから、見えていなくて当たり前だったのかもしれない。

そのままでいればよかったのに。

けれど、それは悔やんでも仕方のないことなのだ。

もう、友達としてみていられなくなってしまったのだから。あの頃の気持ちには戻れないのだから。

いつ頃だっただろう、女として見られていないことが辛く思えてきたのは。

そして、いつからだったのだろう、雅貴の軽薄な側面を感じるようになったのは。

実咲は思い返し、そしてまた溜め息をついた。

雅貴への思いが変わったから、それまで見えなかった側面を感じるようになった自分に気付く。彼は、以前から女性に関しては何一つ変わっていないのだと、痛感した。

16

あれはいつだっただろう。
実咲はこんな風に変わってしまった、始まりの出来事を思い返す。
何となく雅貴に対する気持ちがくすぶり始めていた頃だったけれど、まだ友達としか思っていなかった頃。
ファーストフードの店内で、二人で音楽か何かの趣味の話題で盛り上がっていた、その時の出来事を。

そのとき突然会話途中に一人の女性が割り込んできた。実咲より年下だろうか。とてもきれいな子だと実咲は思った。
「雅貴」
少しキツイ目をして雅貴と実咲をにらむ彼女に、雅貴は実咲には向けないような、優しい笑顔を浮かべて彼女を見上げた。
「こんなところで会えるとは思わなかったな」
その時その雅貴の表情を見て釈然としない気分になったのを覚えている。
私にはそんな風に笑わないくせに、でれでれして。
そんな風に思ったような記憶がある。
割り込んできた彼女は前置きもなく嘲るように言った。
「この人とも付き合ってるの？」
雅貴は苦笑して彼女を見上げていた。
「彼女はただの友達だよ」
「嘘。新しく付き合ってる子がいるって聞いたのよ。ずいぶんとランクを落としたのね」
「だからそれは別の子。そんな事で嘘はつかないよ。あっちの彼女は君とは違ったタイプの美人だよ」
二人の会話を聞きながら、胃が重くなったような気がした。
彼女が実咲に対して向けた暴言を、雅貴は否定すらしなかった。

それに対して腹が立つのとは違う、けれど気分でも悪くなったように胃がむかむかした。けれど実咲はなんでもないふりをして立ち上がった。

「二人で話す時間が必要そうね。私は帰るから」

雅貴は引き留める素振りすらせず、頷いた。

帰る準備をする時間が、やけに惨めに思えたのを覚えている。帰り際、「じゃあ」と目配せをした実咲に、雅貴が声をかけた。

「ごめん、後で連絡するから」

実咲は頷くと、なんでもないフリをしてその場を去った。

なんでもないふりして歩きながら、惨めさに唇を噛んだ。

確かに私はさっきの彼女みたいに美人じゃない。メイクなんてみっともなくない程度にやってるだけだし。可愛い格好なんてしてないし、色気なんてないし。

言葉にして考えていると、余計に惨めだった。

きれいにメイクをして、きれいにセットされた髪、高そうな可愛らしい服の彼女を思い出した。

きれいな子だった。

そして自分をもう一度省みると、溜め息がこぼれた。

歩きながらふと横を見る。

地味で、華やかさの欠片もない自分の姿がガラスに映っていた。

その日の夜、雅貴から連絡があった。彼女の暴言をいさめなかったことをまず謝られた。あこで彼女を諫めると、余計にひどくなると思ったからだと弁明した上で、それでもイヤな思いをさせたはずだから、と、ひたすら謝ってくれた。

実咲は笑って「その判断は正しいと思う、気にしなくて良いよ」と答えた。

笑いながら答えたその言葉は、確かに本心ではあったが、それでも惨めだった。

その時はどうしてか自分でも分かっていなかった。

けれど今になって考えれば、それがきっかけだったように思う。
雅貴が女と一緒にいるのを見るたび、聞く度に苦しく感じるようになってきたのだ。
自分に見せない笑い方、自分に向けられない優しい声。それを自分以外の女に向けられているのを見ると苦しく感じるようになった。
どうして自分にはあんな風に笑ってくれないんだろう。どうして自分にはあんな優しい声をかけてくれないんだろう。
そう考えれば考えるほど辛くなっていった。
私もあんな風に笑いかけてもらいたい。
いつの間にかそんなことを考えるようになっていた。

あのとき私が求めていたそれは、ただの軽薄なだけの笑顔だったのに。優しい笑顔ではなく、ただ優しそうなだけの上っ面だけの笑顔だったのに。そんなことにも気付けず、あの時どうしてもその笑顔が欲しかった。あの笑い方を向けられない自分は女としてダメなのだと思いこんでしまった。
思い返すと苦笑いが漏れた。
それからだった。実咲が服装や化粧に気を使い始めたのは。
少しずつ、少しずつ、自分を変えていったその頃が思い出された。
メイクを丁寧にするようになった。味気ないTシャツを着ないようになった。それまで手をつけていなかったアイメイクを始めて、ただ塗るだけだった口紅にグロスを付けたりラメを入れたりして雰囲気の違いを出すようにして……そうして少しずつ小さなメイクのテクニックを積み重ねていった。
自分の目にも以前との違いが明らかに分かるほどになったのは、雅貴を気にし始めて2、3ヶ月は経った頃だった。鏡の前には雅貴が付き合う彼女達のようにきれいにメイクをして髪を整え、ブランド物の服に身を包んだ実咲がいた。
増えていった化粧道具、ブランド物の服や小物。
これで雅貴の周りの女の人に引け目をとらずにすむ。

そう思うと実咲は満足だった。
そして実咲の変化に伴って雅貴の態度も少しずつ変わってきていた。
「なんか最近、雰囲気が変わった」
初めの頃はそんな風に訪ねられたりもした。そのたびに、
「最近、何となく興味が出てきてね。こういうのかわいいからやってみたくなったんだ」
と、ごまかしていた。
そして実咲が少しずつ新しいものを取り入れるたびに、雅貴は気付くと「いいね」とほめた。
結果、実咲は半ば有頂天になって自分を飾りだした。
その頃には、もう実咲も自分の気持ちに気づいていた。
私は、雅貴が好きなのだ。
雅貴に、自分を見てもらいたい。女として見られたい。
気付けば尚のこと実咲の中でその気持ちは日々大きくなっていった。
そして、ある日、ついに雅貴が言った。
「なんか最近、すごくかわいくなってない？　いいかんじ。その方が絶対いいって」
そう言って向けられた笑顔。
それは雅貴が彼女たちに向けるような優しい笑顔だった。
欲しかった笑顔が向けられた。そう思うと興奮が体を駆け抜けた。
雅貴が私を認めた。
実咲にはそう思えた。
友達というポジションは変わらなかったが、雅貴の実咲を見る目は確かに女に対する目になっていた。
しかしその頃から、雅貴の女に対する薄情さが目につきだした。
それまで眉をひそめることがなかったわけではないが、それでもほとんど気にしたこともなかったことだ。
なのにその頃になって突然気になりだした。

それは自分には関係なかった雅貴の女に対する対応が、自分にとって関係ないものではなくなっただけなのかもしれない。

事実、雅貴が同時に数人の女と関係を持っていたところで、今までなら実咲に関係のないことだった。「あんた、そういうの、よくないって」軽く笑ってやめなよと注意するだけでそれ以上のことはなかった。

けれど、雅貴を男として気にすれば気にするほどそういう軽薄さがイヤでたまらなくなってきた。女を自分の脇の添え物ぐらいにしか思ってないように、取っ替え引っ替えして彼女を変えていく。そんな態度にたまらないほどの嫌悪感を覚えた。

女として雅貴に認められれば認められるほど、雅貴にとって自分が替えのきく存在になっていくように思えた。自分もセックスをすれば、雅貴にはもう用済みになってしまう、そう思えた。

そんな雅貴の一面を、実咲はその時になって初めて実感したのだ。

17

思い返すと、ろくでもないことばかりが思い出されて、実咲はため息をついた。

好きにならなければ、そんなところに気付かずにすんでいたのかもしれないのに。

けれど、それでも一緒にいたかった。

そうして実咲は、雅貴の望む女らしさを少しずつ身につけていき、でもずっと一緒にいるために姑息にも友達のふりをし続けた。

そうして友達のふりをしながら、女の人と腕を組んで歩く雅貴の後ろ姿を目で追いかけた。

雅貴の軽薄さに嫌悪を覚えながら、それでもそうして雅貴の隣にいるのは自分でありたいと願ってしまうようになっていた。

こんなに雅貴の女癖の悪さに嫌気がさしているのに、それでも、どうしても雅貴を好きな気持ちが止められなかった。

あきらめるにはあの頃の雅貴は優しすぎた。もしかしたら私は特別かも知れない、と期待させるのは十分なほどに。それはただの友達としての優しさだったが、それが余計に特別に扱われているように感じられたのだ。

そして、とうとう耐えきれなくなった実咲は、あの日、雅貴が付き合っていた女性と別れたのを見計らって彼を呼び出した。

仕事が終わって夕食がてらの小料理屋。居酒屋を兼ねたその店内の喧噪から少し離れたボックス席に陣取り、そしておもむろに切り出した。

「ねえ、私と付き合ってよ」

自分であきれるほどそっけない声と言葉だった。

雅貴が実咲の目の前で悩むように小さく首をかしげる。

心臓がイヤになるほど大きく鼓動を打っていた。
けれど、それが精一杯だった。
どんな顔をしていいのか分からず、ただ必死でその言葉を言っていた。
自分以外の女と一緒にいる姿を見たくない、だたその一心で。雅貴の隣にいるのは自分でありたくて。
そして、叶わないのなら、いっそのこと、雅貴から離れたくて。
玉砕覚悟だった。雅貴は確かに自分を女として認めているようではある。けれど雅貴にとっては自分は友達に過ぎない。それに、雅貴と付き合う女性を近くで見過ぎていた。自分より明らかにランクが上の女性。そして雅貴の周りにはまだそんな女性達が雅貴と関係を持とうとたむろっている。
自分なんかを選ぶはずがない。でも今の状況は耐えられない。
その時の実咲には期待と諦めが同時に胸の中にあった。
「付き合うって、今からどっか一緒に行くわけじゃなくってか？」
的はずれな答えに、少しあきれて、少し力が抜けて、そして少し笑って、わずかにふるえながらテーブル越しに、雅貴のほほを軽く握ったこぶしでトンとたたくように触れる。
「んなわけないでしょ。どうしてそんなことを言うためにこんなトコにわざわざ呼び出すのよ」
「……まぁ、そりゃそうだよな」
雅貴は少し驚いた様子で、髪をかき上げながら頭を掻いていた。
「いや、そうかなとは思ったんだけど、もし「本屋行くの付き合って」とかって感じだったら、早とちりで恥ずかしいだろ」
「そうかもしんないけどさ……」
力ががっくりと抜けているのに、緊張と動揺のふるえは止まらなかった。
「じゃあ、付き合おうか」
動揺している実咲へフェイントをかけるようにあっさりと雅貴が言ってのけた。

唐突すぎて、実咲の頭は一瞬雅貴の言葉が理解できなかった。
「え？」
実咲は彼の顔を見た。
雅貴は笑っていた。女性にいつも向けている、甘ったるい笑顔で。
実咲は、自分に向けるその笑顔を見て、はじめて不快感を覚えた。
欲しかったはずの笑顔は、得てみると、とても価値のない物だったと言うことに、このとき、漠然とながらも気づき始めていたのだろう。
ああ、やっぱりこの程度か。
あの時の実咲の気持ちを言葉にするとすれば、そんな感じだった。
答えをもらった瞬間、うれしいはずなのに同時にむなしさと切なさが胸を占めていた。
自分は、雅貴と友達だった。雅貴の周りの女性ほど美人でもない。けれど、それでも自分と付き合ってくれるというのなら、雅貴にとって自分は特別なのかもしれない。そんな期待を打ち砕くには十分すぎるほど、軽い答えだった。
自分も、他の女と変わりないのだ。
それがそのとき実咲に突きつけられた現実だった。
締め付けるような痛みが実咲の胸を襲った。

そこから自分の気持ちをごまかす日々が始まった。
その日の絶望を胸の中に押し込めて、もしかしたらと期待を抱き続けた。
自分と付き合っているはずなのに、見え隠れする女の影に目をつぶった。イヤでも耳に届く噂から必死で耳をふさいだ。時折感じる突き放されるような雅貴の遠さも気のせいと思い込もうとした。
一緒にいるのが幸せで、うれしくて、つらさと苦しさから目を背けて。
そうしている内に実咲は、ふと気付いた。
自分が、誰よりも長く雅貴の彼女の位置に座り続けていることに。

ああ、やっぱり、私は特別なんだ。
それに反する心の声を無視して、実咲は自分に言い聞かせた。
そうして自分をごまかし続けた結果、実咲は一番嫌な形で現実を思い知らされることとなった。
思い出したくもない数日前のキスの場面が思い出され、実咲は頭を振った。
せめて、ずっと胸にあった不安から目をそらさずにいたなら、あれほど傷つかなかったかもしれないのに。

17（後書き）

ヤフーの辞書より引用。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1．おもむろ‐に【徐に】

［副］落ち着いて、ゆっくりと行動するさま。「―立ち上がる」「―口を開く」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

18

どうしようもないことが思い出されて、実咲は自分の考えの甘さを後悔する。

友達としているだけなら、雅貴はいい奴だと思えるのに。その気持ちは今も変わりなく実咲の胸の中にあった。けれど、その思いがなおのこと、自分をそんな勘違いへと追い込んだのだのかもしれないと、そう思えた。

好きだという気持ちを打ち砕いてもおかしくないほどに、雅貴の女の人に対する誠意のなさに実咲は嫌悪を覚えていた。

「そうだよ、最低だよ」

実咲は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

最低の男だと、心底思うのに。そして、その最低さに傷つけられたのに。

なのに、それでも気持ちが変わらないのは、どうしてなのか。

考えるだけで胸がつまった。

深いため息がこぼれた。それには深い自嘲がこもっていた。

「もしかしたら……って、期待してるのかな」

声に出してつぶやいてみた。

それはあまりにも白々しく、滑稽に響いた。

私は信じていたいのかもしれない。

自分は特別だと、以前のように一人の人間として雅貴が自分を認めてくれていると。そして、いつかそのうち、自分の事を女性として好きになってくれるかもしれないと。

そんな風に考えながら、実咲は笑った。

笑わないと押しつぶされそうだった。

考えた内容が、あまりにも現実不可能に思えて。考えた内容をあり得ないと否定する感情ばかりが押し寄せてきて。

「前向きに、か」

涼子の言葉を思い出し、ふっと息を吐く。
期待し続けて、何か進展があるというのか。雅貴が自分を本心から受け止めようとするように変わるとでも言うのか。
友達として今も一緒にいたのなら、こんな風に、決別がこれから先に見え隠れするような事態にはならなかったのだろうか。
「なんで、好きなのかなぁ」
今更、どうしようもないことをつぶやいてみる。声に出してみると、何となく心が落ち着いた。けれど、何か変化が起こるわけでもない。
見切りはつけているはずなのに、それでも、未だに薄情さの裏にあるかもしれない女性への誠実さを雅貴に求めている。
もし自分がもう一度雅貴を信頼して、それで以前のような信頼し会える関係を取り戻せるのなら。
考えて、実咲は自分をいさめるように軽く首を振った。
きっとそんなことは起こらない。雅貴にとって友達でなくなった自分は他の女と変わらないのだから。
確かに、雅貴はいつものように簡単に実咲と別れようとはしなかった。けれどそれはただの気まぐれに過ぎないだろうと実咲は思っている。こうして再び付き合うのは、別れたくないのではなく、ただのゲームのような物なのだから。
思い起こせば、つきあい始めていつの間にか以前のような軽口をたたくような楽しい会話が二人の間になくなっていた。
突き放されているんじゃないか、そう感じる瞬間がまた訪れるのではないかと、怖くて逃げていた。
ろくに会話もなくセックスをしていた。実咲は雅貴の目を他に向けさせないために必死で自分を飾っていた。
そこまで考えて実咲は我に返った。
ああ、そうなんだ……。
そのことに気がついた瞬間、涙がこみ上げてきた。
特別であるはずがない。私は、友達ですらなくなっていたのだか

ら。

実咲は、自分が雅貴の周りにいた女性達と同じ存在になっていることに気付く。着飾って、雅貴の気を引く彼女たちと。

ようやく気付いた気分だった。頭でわかっていたことが、ようやくすとんと自分の中に落ちてきたような感覚。

私は特別じゃない。雅貴が私に執着しているわけでもない。ただの遊び、ゲームでしかない。

そうだ、そういうことなんだ……。

気付いた事実に胸が押しつぶされそうになる。

無理だよ、涼子。

実咲はすがるように親友を心の中に思い描く。

この状況を変えられるほどの力は、私にはない。私にできる事なんて、変わればいいと思いながら何もできずに、せいぜい強がって、なんでもないふりして雅貴と最後のゲームに付き合うくらい。ゲームが終わったときに、鼻で笑って、なんでもないふりをしていられるよう予防線を張るぐらい。

私にできることは、自分が傷つかないように、雅貴を信じないようにするだけ。

こんなんじゃ何も変わらない、分かっていても、それ以外のことはできそうにない。

無理だよ。

心の中で親友に話しかける。前向きにと言って発破をかけてくれたその言葉さえ、今の実咲には重かった。

私に、雅貴を変える力はない。

結果は、きっと変わらない。

絶望が実咲を包み込んだ。

実咲は息を吸った。

もう、いい。何も変えられないのなら、何も変わらなくていい。

雅貴との関係の終着点を見た気がした。

でも、それでも一緒にいたい、少しでも長く。

雅貴が飽きて、最後通知を突きつけてくれる、そのときまで。
実咲は深く長い息をついた。
今だけ、ゲームが終わるその時まで、それを覚悟して雅貴と一緒にいられることを考えよう。
何も考えず、今までのように不安から目をそらして。
私には、きっと何も変えられない。自分の気持ちも、雅貴の気持ちも。だから、今だけは一緒に……。
実咲は暗鬱とした絶望の中、自嘲した。

せめて、友達のままでいられたらよかったのにね。

19

その日は、待ち合わせの場所に行くと雅貴は本を読んでいた。実咲に気付くと本を閉じて雅貴が軽く手を振る。それに手を振り返すと、実咲はテーブルの向かいに座った。

「そういえばさ、この本の新刊でたの知ってる？」

雅貴が暇つぶしに読んでた本をさした。

「うん？　買ったよ」

「マジで？　俺、探してるんだけど、売り切れてるみたいでさ。ちょっと足のばしたらあるのわかってるけど時間なくて」

「貸して欲しい？」

実咲がにやりと笑ってもったいぶると、雅貴が顔の前で両手を会わせた。

「お願いします」

ここ数日、仕事が終わると一緒にいるのが当たり前のようになっていた。つきあい始めた当初でさえ、連日待ち合わせて一緒に過ごすことはなかった。

けれど賭をしてから、毎晩電話がかかってくるようになった。会った日に電話なんてろくにしてきたことないのに、今は会った日も、会わなかった日も、必ず電話をかけてくる。

わざとらしいと思いつつも気がつくと心待ちにしている自分に気付く。ゲームを始めてたった十数日しか経ってないのに、それが当たり前のように心待ちにしている。

実咲はそんな自分の弱さを叱咤するものの、自分の気持ちなのにコントロールできずにいた。

信じたくないのに、信じたくてたまらない。

好きになりたくないのに、好きで好きでたまらない。

当たり前のように一緒にいて、当たり前のように毎日電話がかかってきて、当たり前のように実咲だけを見ているように見える雅貴。

イヤになる。

実咲は心の中で悪態をつく。

勘違いをしてしまいそうな自分が、イヤでたまらない。分かってるくせに、それでも、もしかしたら雅貴が自分だけを本当に見てくれるのではないかと、期待しそうになってしまう自分がいる。

ゲームのくせに、そんな風に見せかける雅貴が憎い。こんなにも、こんなにも雅貴のことが好きなのに、雅貴にとってはゲームでしかないことが、たまらなく辛い。

優しい雅貴。

以前のような楽しくて居心地の良い関係が続いていた。

自分の名前を呼ぶ彼の声は優しくて、体を重ねた後でも当たり前のように実咲を抱きしめる。以前のように自分を突き放すような冷たさを感じなくなっていた。

むしろ、雅貴は以前より優しくなった。友人としてつきあっていた頃の思いやりと、彼女としてつきあい始めてからの優しさと、両方を実咲に向けているように感じられた。

実咲の望んだ雅貴が、そこにいた。

「実咲」

優しく名前を呼ばれ、抱き寄せられる。

そうしてキスをしたのは、雅貴の家のリビングでのこと。

どうして、家になんか呼ぶの。

どうしてこの家で、そんなに優しくするの。

期待が募り、実咲は心の中で雅貴をなじる。

優しくされたら期待をしてしまう。三匹の犬と戯れながら、屈託なく笑う表情がそのまま向けられて、そのままキスされて。

うれしくて幸せで、それが苦しくて胸の痛みとしてこみ上げる。

この家にいることを許されたら期待してしまう。

どうせ、私のことなんか、本当はどうでもいいくせに。

心の中でなじりながら、幸福感に流される。
キスをしていると、遊んでいるのかと思ったのか、犬が飛び入り参加してきた。
「おまえ、邪魔すんなよ」
笑いながら雅貴がすり寄ってくるその体をなでた。
雅貴にじゃれつく犬の様子にふっと気持ちが和み、実咲も笑う。
「雅貴と遊ぶの、ホントに好きだね」
犬に話しかけて、その首をなでた。
雅貴の家は居心地がいい。今は三匹になった犬たちが実咲の心を和ませてくれた。何より、彼らがいるせいか、家では雅貴自身がとてもゆったりとくつろいでいる様子になる。犬たちと戯れる雅貴を見るのは楽しかった。
半分押し倒された状態から、実咲は体を起こすと、先日引き取った子犬を抱き上げ、雅貴と寄り添うような状態で座り直す。雅貴が笑いながら犬をかまう様子が楽しかった。
抱き上げた子犬が、実咲の顔をぺろぺろとなめた。くすぐったくて、子犬の愛情表現がかわいくて、その口元に顔を寄せる。
「……実咲」
突然子犬が雅貴に奪い取られ、キスされる。
「つづき、しよ」
雅貴に誘われるまま寝室に入る。
「おまえらは邪魔するから、だめ」
笑って犬たちを閉め出すと、そのままベッドに押し倒される。
はじめて入った部屋だった。一人で寝るには、大きすぎるベッド。
この部屋に、自分以外の女性が入ったことあるのだろうか。
疑問が浮かび、そして考えるのをやめた。
どちらにしろ、自分にとってはよくない考えにたどり着く。
過去にいたのだとしたら、その特別な女性への嫉妬を抱き、いなければ自分は期待する。
「……何を考えてんの？」

雅貴の問いかけに笑う。
「ドアの向こうで、寂しがってる子がいるよ」
ドアの向こうから聞こえる、クンクンとなく声。
それを気にする実咲に、にやりと雅貴も笑顔を返した。
「じゃあ、入れる？　犬って、最中をじっと見てるから興奮するって話、聞いたことあるけど。試してみる？」
実咲に覆い被さるような体制で、からかうようにささやく雅貴の声。
「絶対に、やだ」
実咲がぺちっとたたくようにして顔の真上にある雅貴の両ほほを挟むと、彼は笑って実咲を抱きしめるように彼女の体に身を沈めた。

幸せなまま、毎日が過ぎていた。
きっと、怖いぐらい幸せ、という言葉は、こういう時のためにあるのだろうと実咲は思う。
賭を始めて一ヶ月がたっていた。
雅貴の言葉を信用なんかしていなかった。少なくとも、信用しないと自分を戒め続けていた。
けれど、これまでの一ヶ月、実咲の知る限りでは雅貴が約束を破った様子はなかった。
まだ、ゲームに負けたくない気持ちの方が強いのかもしれない。
そんな言葉で必死に自分をいさめる。
たかが一ヶ月、だけど、幸せでたまらなかった一ヶ月。
自分をいさめなければ、雅貴のことを信じたくて信じたくてたまらない自分が、「もういいだろう」と、「もう信用してもいいだろう？」と、誘惑する。甘い考えに流されそうになる。
雅貴が見せる誠実ともいえる態度がうれしくてたまらない。
なのに信用できない。信じたいと思うこともあったけれど「もし

かしたら」と不安がよぎる。信用できないのに信じたい。信じたいけれど、疑り続けていたい。相反する感情が実咲の中で交差していた。

けれど、雅貴が今だけでも実咲だけを見ているということが、理性や不安を全て押し流すほどの幸福感を感じさせていた。

「実咲」

優しく名前を呼ばれ、当たり前のようにそばにいるようになった雅貴が手をつないでくる。

そんな何でもないことが、どうしようもなくうれしい。

回数なんてもう覚えてないほどセックスをしてきたのに、手をつないで歩いてることの方が幸せだなんて、自分でも不思議だ。

雅貴の大きな手が、実咲の手のひらを包むように握りしめる。つないだ手の感触が気持ちよくて、幸せになる。

距離をとろうと思っても、手をつなごうと伸ばされた手に、思わず触れてしまう。躊躇いながらも軽く雅貴の手に触れるようにつなぐと、その瞬間彼の表情が和らいで、優しく握りかえされる。

まるで当たり前のように一緒にいた。

それがあまりにも幸せで、実咲は望む。

ずっと、こうしていることができればいいのに、と。

限りがあることを分かっていながら、この瞬間が少しでも長く続くようにと。

信用しないという反面、叶わぬと思いながら、今の幸せなときが続けばいいと、祈り続けていた。

20

それは、このところ当たり前になっている、帰り際の待ち合わせの時だった。

実咲は待ち合わせ場所に向かっていた。目的の場所はすぐ目の前。その時、目の端に見慣れない影がうつり、見るともなしにその木の陰へ目を向けたときだった。

油断していた。

それが、真っ先に感じた事だった。

実咲は、自分の血の気が一瞬で引いたのを感じた。

目に映るその光景。

冷えてくらくらし始めた頭と、握りしめた手のひらにじんわりと滲む冷や汗を感じながら、それを、半ば呆然として見つめていた。

見せかけの誠実さだと、分かっていたはずなのに。まだ、大丈夫だとでも思っていたのか。

頭の片隅で、自分を嘲笑う声がした。

信じないと、自分に言い聞かせていたはずなのに。

分かっていたはずなのに。

感覚が、ぼんやりと遠ざかり、実咲は動揺している自分をどこか遠くの方で感じているような気分に陥る。

今、その場で起こっていることが、どこか他人事のように感じていた。

反面、体は強張り、ずん、と重くなったようにも感じた。

息をすることさえ忘れたように、なぜか息苦しい。そのくせ、激しい動悸が耳の奥で、ドクドクと響く。

なのに感覚は、ひどく鈍いままで、ぼうっとその状況を把握していく。

実咲は身じろぎもせず、ただ、呆然とその瞬間を見ていた。
そして、分かり切っていたのに、泣きたいほどの絶望が押し寄せてきたのを頭の片隅で自覚していた。
感覚はひどく遠いのに、じわり、じわりと、自分の体に浸透していくように、絶望が実咲の体中に広がっていく。

視線の先に、雅貴がいる。実咲が固まっていたのは、ほんの数秒にも満たないような短い時間。けれど、実咲が雅貴に気付いた瞬間から、彼は実咲の視線をとらえていた。
雅貴は分かっていてやっているのだ。実咲に目を向けても悪びれた様子もない。当たり前のように「彼女」を抱きしめたその腕を放そうとしない。

雅貴は、実咲ではない、別の女性を抱きしめていた。そして、今、実咲の目の前でキスをしている。
わざと。実咲に見せつけるように。

それに気付いた瞬間、呪縛が解けたように、感覚が一気に戻ってきた。
戻った感覚とともに絶望を上回る感情がこみ上げていた。
実咲は手を痛いぐらいに握りしめて、自分でも理解しがたい感情があふれそうになるのを必死でこらえた。
心臓が大きく胸を打っていた。握りしめた拳が小さく震えた。
実咲は、自分を落ち着けるように大きく息を吐く。
どうせなら、ずっとだまされていたかった。信用しきれないなんて口先で言いながら、ホントはあのままずっと心の中で期待し続けていたかった。
けれど目の前の現実が、そんな期待を打ち砕く。
だましてさえもくれない。そんな甘い夢さえ見させてくれない。
やっぱり、あんた最低だよ、雅貴。

期待半分、信頼しかけていた矢先の二度目のその場面。そして今度は、実咲が見ているのを知りながらの、意図的な行動なのは一目瞭然で。

雅貴がさっきのキスから抱きしめたままでいる、自分ではない女性。雅貴が再びその彼女にキスをしながら、その視線を実咲にむけた。

その目が笑っていた。

まるでいたずらでもしているかのように。

21

何を考えているのかわからなかった。
実咲に気付いたとたんキスをした雅貴。
別れたければ、そう言えばそれですむというのに、何を回りくどくこんな形で見せつけられなければいけないのか。どうしてこうまで私を傷つけようとするのか。
実咲は雅貴から視線をそらし、きびすを返す。
何でもないように、気にもしていないように。ただ、あきれただけのふりをして。
傷ついたと悟られないように、走り去らないだけがせめてものプライド。
勝手にすればいい。いい加減に愛想も尽きた。どんなに好きでも、雅貴という人間がどれだけ女に対して最低になれるのか、いいかげん思い知らされた。自分の人生をこれ以上めちゃくちゃにする必要もないだろう。
泣きそうになるのをこらえる。誰がこんなところで泣くものか。視界が霞んだが拭いもしなかった。拭うそぶりさえ雅貴には見せたくなかった。うつむきそうになる顔をぐっとまっすぐ前に上げた。
家に帰れば、一人でいくらでも泣ける。ここはまだ人目もある。泣いたら止まらなくなるのは目に見えている。あいつのせいでこれ以上恥なんてかきたくもない。
「……実咲っ」
思いがけない声が後ろから駆け寄ってくる。
今更何をしにきたのか。
追いかけてくる雅貴を振り返りもせず、実咲は歩いた。
「待てよ」
肩をつかまれて顔も見ずにふりほどいた。
「そんなに怒るなよ、ほんの冗談だよ。浮気する気なんてないから」

困ったような声にも聞こえるが、あまりにも空々しく思えた。
実咲は小さく鼻で笑った。じゃあ、さっきのあれは何のつもりだったという気なのか。あれが浮気でないなら、なんだと。
雅貴の言葉に応える気すら起こらなかった。
「ホントにそんな気はなかったんだ。実咲、悪かった。ちゃんと何でも言うこと聞くから」
あまりにも軽い雅貴の声が実咲の耳を通り過ぎる。
今更、何を言っているのだろう。
馬鹿にして。ここまで本気でゲームの延長にされているとは思わなかった。未だに賭のことを言うだなんて。
「ああ、そう、そうだったわね。何でも言うこと聞くのよね？」
ならば望み通り、賭に勝った商品を頂いてやろうと実咲は思った。勝つことは分かっていても、勝ちたくもなかった賭の、代償を。
言い捨てた実咲に喜々として雅貴の言葉が返ってきた。
「うん、何でも言って。ちゃんと聞くから」
やっと話が通じたと、ほっとしている雅貴の考えが、手に取るように分かった。
そんなはずはないと考えたら分かるだろうに。雅貴の何一つ心の込もっていない言葉、そんなものが、どうしてこの状況の自分に通じるなんて考えることができるのか。
実咲は腹を立てる。そんな風に雅貴が思うのは、それだけ実咲のことを見ていないからなのだ、そういうことだと思った。
早足で歩きながら実咲は顔も見ずに吐き捨てた。
「二度と私の前に顔を見せないで」
「え……ちょ……っ、実咲？」
どうして焦るんだろう、今更。分かっていたことだろうに。
「悪かった、ホントに悪かったから！　そんなに怒るなよ」
意外にも真剣な声だった。思わず実咲が振り返りそうになるほどに。けれど振り返る前に雅貴の腕が力ずくで実咲の歩みを止めさせた。その反動で実咲はそのまま雅貴に顔を向

ける。
　そして雅貴の目を見据えると怒りを隠すのをやめて吐き捨てた。
「……聞こえなかったの？　顔を見せるなと言ったのよ？　何でも言うこと聞くんでしょ？」
　あの一瞬、実咲を止める真剣な声が初めて実咲の胸に届いた。けれど一度や二度雅貴が心に響くような言葉を言ったくらいで収まるような怒りでもなかった。
「そうだけど、そうじゃなくて。なあ、本当にもうしないから、そんなに怒るなよ」
　向かい合ったとたん、ほっとしたのか雅貴の言葉が軽くなった。口調から困っているのは確かなようだ。けれどそれだけだった。
　なんて、心のこもらない言葉なんだろう。
　そう思えて、雅貴の言葉が更に実咲の怒りをたきつけた。
「もうしない？」
　実咲は嘲笑った。
「私とつきあうのはゲームなんでしょ？　浮気するかしないか賭けてただけでしょ？　あんたは浮気をした、だから、ゲームオーバーでしょ？　なにマジになってんの？」
　怒鳴りたいのをこらえて、雅貴の口調に合わせて軽く言ってみせる。
　雅貴が一瞬考え込んだ。
「俺のこと、好きじゃないの？」
　真剣な表情で雅貴が問いかけてきた。実咲にはその言葉の真意が分からなかった。その表情の意味も。本気なのか、そうでないのか。
「だとしたら、なんなの？」
　切り返して雅貴の本心を探る。その答えはあまりにも実咲をこけにしていた。少なくとも実咲はそう感じた。
「やりなおそうよ」
　実咲は笑った。
「二回も同じ事されて、しかもさっきのはわざと、だったよね？

好きな男にそこまでされて、それでもつきあうような馬鹿になれって？」

実咲は笑いながら、雅貴の目をのぞき込む。

「あんまり馬鹿にしないでほしいわね。あんた、何したか分かってないわけ？　人傷つけて、それが簡単に許されるとでも思ってんの？」

笑うしかなかった。あまりにもバカバカしくて。あまりにも呆れたり、あまりにも辛かったりすると、人はほんとに笑ってしまうものだと、頭の片隅で考えていた。

「それは……本当に悪かった。でも、本当に本気じゃなかった。本気なら、わざと見せるようにやらないことぐらい、わかるだろ？」

本気じゃない、よくもそんな白々しいことが言えたものだ。分かりたくもない。その言葉を飲み込み、実咲は子供をあやすように雅貴の言葉を聞いてあげる。そして、言いたいことを言わせてあげているのは、雅貴に最後通知を告げるためだった。

「仮に、本気じゃなかったとして？　あんた、私になにさせたかったの」

実咲の問いかけに、一瞬ひるんだ雅貴だったが、ためらいがちに答えた。

「おまえなら、なにを命令するのか、その、興味があった」

そんなことのためにこんなバカげたことをされて自分は傷ついたのか。

その内容に、実咲はどうしようもない衝撃を受けた。焦燥感なのか、怒りなのか、それとも悲しみだったのか。

「あんた、馬鹿？　「私だけ見て」とか、本気で言うと思ったの？　あんなところ見せておいて、そんな命令したところで、あんたが本気で従うと、そんなことを私が信じるとでも思ったわけ？　所詮あんたはゲームみたいに遊んでいるだけでしょ？　私だけ見てるふりをして？　私に、そんなゲームして楽しんでるあんたを見て、喜べって？　本気でもないあんたをみて、何を喜べって？」

実咲が堪えきれずにまくし立てると、雅貴の表情が違うとそんなつもりはないと訴えかけた。

「確かに、実咲の言うとおりだな……悪かった。ただ、そう言うと、思ったんだ。もし、実咲がそう言ったら、実咲とだけとつきあうつもりだった。それは本当だ」

真剣な声だった。けれど、それが必要以上に実咲の神経を逆撫でた。

私がつきあえといったら、つきあうつもりだった？　自分の意志じゃなく「おまえがつきあえといったから」つきあう？

屈辱的だと思った。つき合いたいから付き合う訳じゃない、そういう意味とほぼ等しいではないか。

それが、好きな女に対する仕打ちか。

実咲は口に出しそうになったその言葉を飲み込んだ。

好きだなんて、言われたことは一度もない。好きじゃないから、自分にこんな仕打ちができるのだ。仮に、本当は好きだとして、なのにこんな事をするというのなら、尚更これ以上付き合い切れない。

おかしくて、涙が出てくる。

最後まで、人を馬鹿にしている男だ。

これ以上、話すことなんて、なにもない。

真剣な表情で懇願するような雅貴の視線。それをまっすぐにらみ返していた実咲はそっけないほどの動きで背を向けると言い放った。

「……バイバイ」

実咲の決意を感じてか雅貴はそれ以上何も言わず、帰ろうとする実咲をひきとめようともしなかった。ただ、実咲はその場から逃げるような気持ちで歩きながら、その場を立ち去るまで背中に雅貴の視線を感じていた。

肩肘張って、強がって、ようやく家にたどり着くと、倒れ込むようにベッドに転がる。

疲れた、な。

実咲は何をする気力も起きないまま寝返りを打ち、その度にため息をこぼした。

毎日かかってきていた電話は、もう来ない。

自分自身で別れを決めたのに、それでも悲しさがこみ上げてきて、涙がこぼれた。

「雅貴、あんた最低だよ」

つぶやく声が震えた。

もう、二度と会いたくない。会えば、きっと決心が揺らいでしまうから。あんな馬鹿な男に引っかかって、これ以上生活をめちゃくちゃにしたくない。

ふと自分の姿を思い出す。

この服も、このスカートも、この髪型も、身につけたアクセサリーも、クローゼットに入っているあの服も、あのワンピースも、あのコートも、あの靴も、全部、全部、全部、雅貴に自分を見て欲しくて選んだ。

ホントはどれも私の趣味じゃない。貯金を全部はたいてまでして買った服。バカみたいな金額のバッグに、邪魔なばかりのアクセサリー。私は自分を殺してまで、雅貴の何が欲しかったんだろう。

もう、雅貴になんか振り回されない。

こんな物はもういらない。全部明日処分しよう。

私はもう、無駄に自分を飾ったりしない。

アクセサリーは、必要ない。

22

ブランドもの、多かったからなぁ……。

数日後、手元に入った金額を見て実咲は驚いていた。いくら元が高かったとはいえ、売り捌くと端金にしかならないと思っていたのに、実際は結構な金額になったのだ。

引っ越し費用のほとんどを賄えるぐらいには。

始めは捨てようかとも思っていたが、全て無駄になったのかと思うと癪に障るから、売って生活の足しにした方がよっぽど賢いと考え直した結果だった。

でも。

と、実咲は自嘲する。

元々の金額考えると、端金か……。

一体いくらつぎ込んでいたかなんて、考えたくもなかった。

ここ数日で一気に部屋の中がガランとしていた。

雅貴と別れた実感がわいてきて、一瞬胸が痛んだが、せいせいしたと自分を笑いとばして終わらせた。

化粧品は売り飛ばせないから、誰か友達にでもあげようか。

チークも、アイシャドウもこんなにたくさんいらない。冠婚葬祭用にでもおとなしいのを一つおいておけばそれでいい。

だいたい、ごちゃごちゃ毎日化粧するのも面倒なのよね。ファンデーションと、口紅が一つあれば十分。あ、でも、この顔じゃ、アイブローもいるか。

鏡に向かって、すっぴんのまま前髪をちょいとあげてみる。作りすぎてあまり残っていない眉が出てきた。

眉も、もうここまで作り込むことはなくなるだろう。

部屋の中を精一杯片付けて、首に掛けてあるタオルで汗をぬぐう。

冷蔵庫からペットのお茶を取り出すと、そのままどさっと床に座って、グビグビと飲んだ。

そして、そんな自分に、ぷっと吹き出す。
このところ、こんな事したことがなかった。
雅貴は、かわいい、きれいな子が好きだったしね。私は自分で作った「いい女」のイメージ通りに、自分を演じていたから。
思い返すと、苦い笑みがこみ上げてくる。だいたい、こんな姿もこの一年間した覚えがない。高校時代の体操服のジャージに、使い古したTシャツ。
元々は、汚しても気軽に洗濯機を回せるような、こんな服が好きだった。
そうそう、こういうのが、ホントは楽なんだよ。
わずかなむなしさを覚えつつも、それでも無理矢理に笑いながら、ペットボトルを下にトンと置く。
明後日にはここを引っ越す。短期間で探したにしてはいい部屋が見つかった。
捨てられるものは全部捨てていく。携帯も変える。そしてこの部屋ともお別れ。
連絡さえ取らなければ、雅貴と会う機会なんてほとんどない。営業で来ても対応は同僚や先輩がほとんどするから、顔をまともに合わせずにすむ。
これで、ホントに、おしまい。

「実咲ちゃん、最近メイク変えたわね。ナチュラル志向？」
仕事の帰り際、先輩に声をかけられ、実咲は顔を上げた。
「なんかあった？　最近、ちょっといい顔してる」
からかう口調に、実咲は思わず笑った。
「ありましたよ。彼と、別れました」
笑って誤魔化さなかったのは、誰かに言ってしまいたい気持ちがあったのだろう。そして、実咲自身、口に出して笑い飛ばして、何でもないことにしてしまいたかったのかもしれない。
上手く笑えているかどうか微妙だったが、それでもすっきりした

気持ちが、表に出ていたらしい。だとしたら、きっと、良い事なのだろう。別れた苦しさがまだ胸を刺すが、気付かないふりをして実咲は笑う。

「……別れたぁ？　逆かと思ったのに」

ごめんね、と慌てる彼女に、実咲は首を横に振る。

「そっかぁ。実咲ちゃんてさ、ほら、以前はあんまりメイクとか気にしてなかったじゃない？　きちんとはしてるし、清潔感とかはもちろんあったけど、あんまり女の子って感じじゃなくって。でも、それが、なんか思ってたのと違う方向に綺麗になっていったなぁ～って思ってたんだけど、まあ、かわいいし、良い傾向かなって思ってたのよ。私、かわいい子好きだしね！　ちょっと化粧濃かったけど。そっかー。彼氏の影響だったのね。んー、でも、ナチュラルメイクって、実咲ちゃんっぽいよね。なんか、良い感じで元に戻った」

先輩はにこっと笑って実咲をまっすぐに見つめる。

「そうですか？」

ちょっと気を使っているのか、いつもより早口になっている彼女に、実咲はクスクスと笑いながら、「ありがとうございます」と礼を言った。

何も事情を知らない彼女のフォローと褒め言葉との入り交じった言葉が、今の実咲には心地よく、これで良かったんだと思えて、ほんの少し救われる思いがした。

けれど、

「でも、女捨てちゃダメよ！」

そう続けられた言葉に、実咲は一瞬ドキリとする。

元の生活に戻るつもりだった。戻そうとがんばっていた。それを指摘されたように感じたのだ。

「確かに、この前までの実咲ちゃんは、ちょっと派手で、実咲ちゃんっぽくなかった。でもね、すごくかわいかったから。もっと実咲ちゃんらしいかわいらしさってあると思うから。元に戻るんじゃなくって、せっかくがんばって綺麗になったのを、踏み台にしちゃわ

ないと。もったいないわよ」
「……考えたこと、なかったです」
実咲は彼女を見ながら、思いがけない言葉に軽い衝撃を覚えていた。
言われてみれば、そうかもしれない。元に戻ったけど、以前よりメイクは丁寧にするようになっているし、何をするにしても、シンプルでも、ちょっと女性らしさを取り入れるのは楽しいと思った。
雅貴のためだけに、雅貴の好み通りになろうとしていたけど、その中にも、自分の好きな物だってあった。
そっか。なかったことには、できないんだ。
彼女に指摘されたことが、すとんと胸の中に落ちてくるようだった。
そして、なかったことにしたらいけない。
うん、全部捨てるんじゃなくって、苦しくて捨てたいと思った物の中にだって、きっとそこには私の得た物だってあって。
考え込んだ実咲に、芝居めいた口調と動きで、びしっと指を指して彼女が言う。
「で、もっと綺麗になって、また、いい男、捕まえなさい。今度は、実咲ちゃんが、実咲ちゃんらしくつきあえる相手をね」
「はい」
悪戯っぽく笑って話を切り上げた彼女に、実咲は笑って頷いた。
軽く話を済ませたい実咲に合わせてくれたのが分かった。その気遣いに感謝しながら、彼女に別れを告げ会社を出る。
そんな会社からの帰り道は、いつもより少しだけ心が軽かった。
彼女との思いがけない会話は、実咲にほんの少しだけ、自分で考えるのとは違う前向きな気持ちを運んでくれた。
雅貴を思っていた自分を切り離そうと思っていた。なかったことにして、全部元に戻そうと。でも、そうじゃなくって、そういうの、全部踏み台にして「いい女」にならないと、雅貴のことを乗り越えられないのかもしれない。

そうね。せっかくだから、踏み台にしてやろうじゃない。
そう思うと、ちょっと楽しくて、実咲の気分は、少しだけ上昇した。

雅貴に別れを告げて、二週間ほど経っていた。
苦しさから逃げるように物を売り払い、身軽になって慌ただしく引っ越しをした。
たくさん泣いたけれど、それ以上に慌ただしさが、泣く時間を減してくれた。
心機一転、というには、雅貴を思う気持ちを捨てきれずにいたが、それでも、だいぶ気持ちの方は落ち着いていた。
その頃になって、ようやく、涼子と話をする覚悟が出来ていた。
別れたことも、引っ越したことも、まだ涼子に話していなかった。
涼子に会ってしまえば、きっと泣いて、愚痴ばかりで、心配だけかけるだろうと思うと、とてもではないが話す気になれなかった。
きっと涼子の優しさに甘えて、どこまでも自分は落ち込んでしまう、実咲はそんなふうに悲しみに浸るのは辛すぎて、避けたかった。
実咲の様子がおかしいことに気付いていただろうに、涼子は何も口を出さず、実咲が話しをするのを待っていてくれた。
そして新居に呼んだ涼子と、ようやく実咲は向かい合っていた。
見守ってくれていた彼女への感謝を胸に、実咲は遅い報告をすると、涼子が静かに頷いた。
「そっか。やっぱり、別れたんだ」
確認するようにつぶやいた涼子に、実咲は「うん」と、小さく頷く。
全部話し終えた実咲はようやく一息つき、コーヒーを一口飲んだ。
涼子は新しい部屋を、ぐるっと見渡し、もう一度実咲を見つめた。
「いろいろ、すっきりしたよ」
あははと声を上げて笑う実咲を涼子が探るように見つめる。

「……大丈夫？　無理に笑ってない？」
実咲は笑顔のまま息を吐き、うなずいた。
「ちょっと無理してる。でもさ、笑えるくらいにすっきりしたのも、ホント。分かってたけどさ、やっぱり、一緒にいるの結構きつかったんだよね。好きだけじゃ、ダメだね」
笑顔に苦みがさすと、涼子の方が泣きそうな顔になった。
「あんたがいるのに、浮気するなんて、ホントに馬鹿よね。実咲の良さがわかんないような男に、実咲は絶対もったいない」
他人事と言っていたくせに怒りをあらわに怒鳴る友人の姿に、胸が暖かくなる。
いいな。友達っていいよな。
実咲はわき上がる気持ちを噛み締める。
雅貴のことばっかり考えて、周りを見てなかったのに、それでもこうして友人としてそばにいてくれたありがたさ。
うれしさを噛み締めていると、にやけている実咲を叱りつけるように涼子が強い口調で言った。
「実咲も、もっと怒りなよ。いっつもそんなになんでもないふりしてさ、溜めたら辛いよ？」
そういえば、さっきから彼女ばかり怒って、実咲自身は静かにうなずいているだけだ。
そう思うと、実咲は思わず吹き出した。
涼子がむっとした様子で「聞いてるの？」と実咲をにらみつける。
実咲は笑いながらうなずく。こんな心境でいられることが、やけにすがすがしかった。
「そうだね。でもさ、私の分、涼子が怒ってくれてるし。涼子がそんな風に私のために怒ってくれるのってさ、雅貴への怒りとか忘れそうなぐらい、うれしいし。……ありがとう」
にやけながら言った実咲に、怒っていた様子の涼子がわずかにひるむ。
「なにクサイこと言ってんのよ」

涼子が実咲のほっぺをぐにっと伸ばす。実咲から少し目をそらしたその顔が、耳まで赤くなっている。

「実咲、あんた、人がよすぎだよ」

実咲は頬を引っ張るその手を振り払うと、にやにやと照れた涼子を見つめながら言い返す。

「人がいいのは、涼子でしょ」

「あんたよ」

「涼子だってば」

口げんかのフリして言い合いながら、ちょっと涙が出た。うれしくて。こんな友達持ってるだけでも、私は幸せだなぁって、本気で感動して。

くだらない言い合いに、二人で笑いながら、にじんだ涙をぬぐう。

実咲は涼子と笑い合いながら、彼の面影を思い出した。

雅貴、あんたがいなくても、私はやっていけるよ。

23

しばらくは涼子の存在が実咲の支えとなっていた。
さりげなく気を使って、考えない時間を作ってくれる。
そんな時間の経過は、ゆっくりと実咲の気持ちを落ちつかせてくれた。雅貴のことを考えないでいられるようになっていた。
しかしいくら落ちついたとはいえ、全く胸が痛まないと言えば嘘になる。雅貴を好きだと思う気持ちが消える日なんて想像もつかないほどに、まだ雅貴のことを好きだと感じている。だから出来るだけ雅貴に関することには思い出したくもないし、触れたくもなかった。

それを思うと、少し甘かったかなぁ、と、実咲はデータ入力をしながら、溜息をつく。
実咲の背中の向こうで、同僚達の笑い声と、雅貴の話し声が響いていた。雅貴が納品にやってきているのだ。耳に入ってくるそれらを出来るだけ聞かないように遮断する。
これまでに何度か、さりげなく話しかけてこようとしているのには気付いていたが、雅貴と話したい同僚達のおかげで、簡単に避けることが出来た。
雅貴は会社ではあまり関わりたくないという実咲との約束を守っているらしく、無理に話しかけてくるような真似はしなかった。
その点に関しては感謝してあげてもいいかもしれない。
もし雅貴が気にせずに話しかけてくるようなら、場合によっては、仕事を辞めてしまおうか、などと、少なからず考えてもいたのだから。
話しかけようとしてきていることに気付いた時は強い不安感もあったが、すぐにそれが杞憂であると気付いた。
雅貴が無理矢理に話しかけてくることはないだろうと確信した時、

ほっとしたと同時に、不可解な胸の痛みを覚えたことについては、考えないようにした。

とりあえず今はこれで良い。会社を辞めるだなんて、出来ればそんな無謀なことはしたくもないし、話しかけられることがなくて良かったのだ。

もっとも、会社を辞めるだなんてちょっと想像するだけで本気で考えたわけではないが、それでも、もしこのまま雅貴と関わっていたら、自分の人生を棒に振る事になるのは想像に難くない。今、雅貴と関わらないためなら、必要があれば、本気で仕事さえも辞めてしまいそうな自分が恐かった。

実咲は雅貴と顔を合わす機会があっても、さりげなく拒絶と無視を繰り返す。

話しかけてこようとしていると感じるのが私のただのうぬぼれで、雅貴の方は特に何も考えていないのであれば、ずいぶんと未練たらしく滑稽に見えるのだろうけれど。

そう思うとおかしかったが、実咲はそんな自分を笑って、怒りの表現の一つということで胸の中に納めた。

実咲は雅貴に目を向けないように、何も感じていないように、いつも通りに仕事をしながら、雅貴が帰るのをじっと待つ。仕事で顔を合わせる相手と恋愛をするのは無謀だったな、と思いながら。

納品を終えた雅貴が帰っていくのを感じて、実咲はこっそりと息を吐いた。そこにいるだけで、緊張してしまっていたのだ。

元々実咲が雅貴の対応をすることがほとんどなかったために、関わらずに無視をするのは別段不自然でも気まずくもなかったが、視界に入るというのは、少し辛い物があった。

その上研究室内でも人気の営業さんの話は、否応なしに実咲の耳へと届いてくる。

最近は、実咲の会社の事務の子にやたらと声をかけているらしいとか。

実咲は噂を聞く度にこっそりとため息をついた。
その相手は、どうやら涼子らしいということまでは分かっているが、彼女が実咲には何も言わないから、詳しいことは知らない。
涼子が何も言わないのは私を思ってのことだろう、と実咲は思っている。
もしかしたら、と実咲は想像する。雅貴が電話も住所も変えた実咲の居場所を涼子を通じて調べようとしているのかもしれない、などと。
雅貴は女に執着することのない男だ。だから、まさかとは思うのだが、話しかけてこようとする素振りがあるということは、もしかしたら、まだ実咲に対しての未練があるのかもしれない。
だから涼子に近寄っているのかも……。
そう考えると、拒絶することのない思いとは裏腹に、そうだったらうれしいと思う気持ちも首をもたげる。けれど、もう、それに囚われるつもりはないのだから、出来るだけ考えないようにしていた。
何より涼子が何も言わないのだから、実咲の想像にすぎない。それでも、どういう理由であれ、彼女が何も言わないのはこれ以上実咲の心が乱されないよう、防波堤になってくれているだろう事は想像に難くない。吹っ切ったつもりでいても、雅貴の名前を耳にするだけで、まだ実咲の心はざわめき動揺するような状態であることを涼子は知っているのだから。
だから実咲は涼子が何も言わないことに、時々落胆しつつも、それでも今は、それがありがたい事だと、心の中で涼子に感謝した。
本当は、感謝していないと、雅貴と顔を合わせているというだけで、ずっと自分を気遣ってくれている親友にさえ嫉妬してしまいそうな自分を自覚していた事もあり、ことさら、良い方に考えるようにしていた。
別れてすっきりした。もう、雅貴とは、何の関わり合いもない。
そう思う気持ちに嘘はない。
けれど、雅貴を思う気持ちは、理性ではどうにもならなかった。

関わらないと誓っても、雅貴がいないことを受け入れても、名前を聞けば、どうしようもなく彼のことばかり考えてしまう瞬間というのがあるのだ。

雅貴が自分のことで涼子に声をかけているのだとしたらと考えただけで、これ以上関わりたくない思いと、どうしようもない期待感がこみ上げてしまう。

一人の女性に固執することのなかった雅貴が、自分にだけはあきらめきれずに追いかけてくれているのではないかと思えて、その期待感は胸を踊らせるのだ。

もう関わらないと決めているのに、そんな事がどうしようもなく嬉しくて、嬉しいと感じてしまう事がどうしようもなく悲しくて、そんな自分があまりにも滑稽で、実咲は笑う。

笑って、笑って、そして息をつき、彼のことを考えないように、今日も心にしまう。会いたい気持ちから目をそらす。

そうして、時折どうしようもなくかき乱される心とは裏腹に、生活は、淡々としていると言ってもいいほど、平穏で落ちついていた。

惑うのは、ほんのわずかな時間。すぐに気持ちを切り替え、実咲は新しい生活に目を向ける。

ほんの少し、心乱されて、けれど、穏やかな生活。

これでいい。

毎日、雅貴に振り回されることのない、悩むこともない生活。取り戻した自分らしさと、受け入れた新しい自分とを、少しワクワクしながら探る生活。

別れてからも楽しいことや、嬉しいこともたくさんあった。ちょっと金欠気味だけれど、今の自分が好きだと思う服やメイクを探したりするのが楽しい。そしてその充実している生活の反面、どこかむなしさが時折心をよぎる、そんな日常がここにあった。

だいぶ吹っ切ったつもりだったけれど、自分を押し殺してでも良いから側にいたかったほど好きだった人だ。すぐさま完全に吹っ切

れるはずもなく、忘れるには、もう少し時間がかかるんだな、と、半ばあきらめも込めて実咲は笑う。

出来るだけ笑顔でいると、少し落ち込んでいても気持ちが上を向く気がした。

24

最近、涼子が気を使っているのか、いろいろと連れ回してくれる。気が紛れてちょうど良いのだけれど、一つだけ、どうしようもなく気になることがあった。

「うん、かわいい、かわいい」

涼子が満足そうに実咲を見る。

実咲は引きつりながら涼子を見て笑った。

「私ね、最近の実咲の服の感じとか、すごく好きよ。シンプルで落ち着いてるけど、ちょっとフェミニンなの取り入れてるでしょ。似合ってる」

「ありがと」

上機嫌の涼子に、一応、口先だけの礼を言って実咲は溜め息をついた。

今日も、か。

連れて行かれる先に目を向けて、まったく、涼子も飽きないものだと思う。

涼子に連れ回される先々には、やたらと男が多いのだ。平たくいうと、合コン比率が高い。当分は男の人と遊ぶ気にはなれないというのに。もちろん彼氏も当分はいらない。分かっているだろうに、変なところにまで気を回すところが涼子のいいところなのか、悪いところなのか。

「前の男を忘れるには、新しい恋よ！」

冗談めかして言っているが、あの目は本気じゃないかと実咲は思う。

確かに、女を捨てるなといわれて、その通りだと思った。経験を踏み台にいい女になってやるとも誓った。やっぱりそれには男性の目があるのが一番かもしれない。

でも、今は、ちょっといらないかな。

まだ完全には吹っ切っていないし、それは、相手の男性に失礼な気がした。

せめてもう少し。ワンクール置いて欲しい。

が。そんな実咲の心は置いてけぼりで、涼子に別れたことを報告した直後から、合コン三昧の日々である。

週一頻度ってどういう事。

この二ヶ月ほどを思い返して、実咲はざわめく居酒屋の中で苦笑いしていた。

「実咲と気の合いそうなタイプの人も、今日は来るって言ってたからさ！」

そう言って、今回は断ろうとした実咲を無理矢理メンバーに引きずり込んだのだ。

すでにできあがってる数人のメンバー。そんな連中にさらなる追い打ちをかけようとする酒豪もいる。これは、合コンというよりかは、飲み会の雰囲気だ。

でも、こういうのは気楽で良いかな。

それは、ほんの少しだけ楽しくて、けれど、ちょっと疲れてしまう。

時折盛り上げる人がいて、わっと歓声が上がって。笑うみんなに合わせて実咲も笑う。

何なの、この体育会系。

涼子の言うところの「実咲と気の合いそうなタイプ」の男が見あたらないところに、涼子が口から出任せを言ったのだろうなぁという事が想像できた。

そこはあえて追求せずに、これが涼子の厚意だと、前向きに受け取ることにした。

それにしても、と、実咲は気付かれないようにそっとため息をつく。

こんなところで何してるのかな。

この日は、やたらと頭の中が冷めていた。

普段なら、もう少し楽しめる場の雰囲気が、今日はどうしようもなく心がしらけてしまっている。

理由は分かっている。最近の雅貴の様子だ。もう、声をかけてこようとしてこなくなっていたのだ。視線を感じることもない。むしろ、避けられているようにすら感じる。

切り捨てていたはずなのに、雅貴から避けられているという事実を前にしたとたん、全て終わってしまったのだと、絶望すら感じていた。

時折心の片隅で疼いていた希望をなくし、よかったじゃないと自分を励ますも、まだ、少し立ち直れていなかった。

実咲は周りのテンションについて行けず、一人冷静に、ちみりちみりとチューハイで唇をぬらしながら、帰るタイミングを計る。

適当なところで涼子に帰ることを耳打ちすると「ちょっと待ってて」とそばにいた青年を引きずり寄せた。

「実咲が帰るって言うから、送ってってもらえる？」

「ああ、帰るの？　いいよ」

青年はにこっと笑うと軽くうなずいた。

「え、いいよ、大丈夫」

涼子の行動と、立ち上がった青年にびっくりして実咲は大きく手を振る。

「気にしなくていいって。こいつは危なくないし」

涼子が笑いながら青年をばしっとたたく。

「や、そうじゃなくて……」

「まあ、酔っぱらいの言うことは聞いとくに限るよ」

実咲が断る言葉を考えているうちに青年が笑って実咲の隣に立った。

「んじゃ、気をつけてね～」

少し上機嫌で涼子が手を振った。

仕方なく実咲も手を振って「ごめんね」と青年に謝りながら一緒に居酒屋を出た。

「ごめんね、気にしなくてもよかったのに」
「いいんじゃない？　女の子が一人で帰るって言ったら、どうせ誰かついて行くと思うよ」
それはどうかなぁ、と思わないでもないが、隣の青年はにこにこと笑いながら言う。
人が良さそうだなぁ
ほんわかしたその雰囲気に、思わず実咲も笑みが漏れた。
「そう？　じゃ、甘えちゃおっかな」
実咲はいつもなら断るその申し出を珍しく受け入れた。喧噪の後の、暗い一人の帰り道が寂しく感じたのだ。
涼子を思い浮かべながら、実咲はこっそりと笑う。
人を飲み会に連れ出しておいて、私が一人で飲んでる間に自分はちゃっかりと気に入った人を側にキープしてたなんて。
一緒に歩く彼は話しやすかった。涼子とは、以前からの知り合いなのだという。
飲み会での話をしながら、実咲は青年のとの会話に居心地の良さを感じていた。感じのいい青年だったけれど、駅が近づくと彼を見上げて実咲は言った。
「ここまででいいよ」
笑いかけると、彼は「大丈夫？」と心配そうに首をかしげた。
ああ、こういう人を好きになりたかったな。
居酒屋から駅までの何気ない会話や仕草、そして雰囲気で、実咲は彼に好感を覚えていた。
「大丈夫、家も駅からそんなに遠くないし」
「そう、じゃあ、気をつけてね」
笑顔で別れて、彼が見えなくなると実咲はため息をついた。
何度か連れ回されてきた合コンにもいいなって思う男の人が時折いた。それでもそれ以上の気持ちにはなれない自分。好感を覚えても、それ以上でも以下でもなく。
涼子の、男を選ぶ目は正しいと思うよ。でも、ハイそうですかと

言って、あてがわれた男にふらつくことができれば、こんなに辛くないんだよねぇ。

実咲は心の中で独りごちる。

仮に「ハイそうですか」とふらついたとしても、今度は向こうの気持ちも問題になってくる。

今別れた彼なんか、最たる物だ。彼の態度を見ていれば、何となく分かる。彼は、たぶん涼子狙いだ。

実咲はくすりと笑う。

「人生ってうまくいかないな」

実咲は心の中でさっきの彼にエールを送りながら、軽く呟いた。

自分の人生はうまくいかない。

でも。

実咲は祈る。せめて、周りのみんなに、幸せが訪れますように。

周りの人が笑っていると、少しだけ、幸せをお裾分けしてもらった気分になれるから。

実咲は自分を取り巻く周りの人の温かさを思い浮かべながら、その幸せを噛み締めて、じんわりと微笑む。

そして、私も少しずつ笑顔に戻ろう。

部屋に帰り着くと、ベッドにぼふっと身を投げる。

ちょっと疲れたな。

でも、メイクを落とさなきゃ。それと、シャワーを浴びて、それから……。

何もする気も起きないまま、しなければいけないことを行動に移さないままだらだらと考えている時だった。

ピンポーン

突然呼び鈴の音がなった。

こんな時間に誰よ。

実咲は重い体を起こすとドアの外をのぞく。人影は見えるが、誰かは分からない位置に立っている。

誰だろうと、実咲はドアの前で躊躇った。
こんな時間にやってくる訪問者に対して、ドアを開くのは躊躇われた。
涼子かとも思ったが、彼女ならこんな時間に来る前にまず連絡をしてくるはずだ。
外を確かめるか躊躇う実咲の耳に、扉の向こうから声が届く。
「……実咲」
小さな声だった。
それはよく知っている声に似ていた。とても聞きたくて、二度と聞きたくない声。
まさか。
そんなはずはない、そう思うのに、実咲は震える手で鍵を開けた。
ガチャンとチェーンが張って、扉が少し開いたところで止まる。
チェーンに遮られたドアの隙間から見えるのは、二度と会いたくないと願ったその人だった。

25

「……雅貴……」

それ以上言葉が続かなかった。何をしに来たのだろう。それよりも、どうしてここを知っているのか。

表情こそ変わらなかったが、実咲はパニックに陥ってしまっていた。

なんで。

もう声をかけようとする素振りさえしなくなっていたというのに。

頭の中は真っ白で、ただ、呆然とドアの隙間から半分だけ見える彼の顔を見つめていた。

「久しぶり」

少し躊躇った様子で、ゆがむように、無理矢理笑ったような雅貴の笑顔が見えた。

「……何の用？」

低い、こわばった声が、自分でも驚くほどきつい口調で出た。雅貴の顔が苦しげにゆがんで見えた。

「少し、話、出来ないか？」

「話す事なんて、ない」

声が震えそうになりながら、きっぱりと実咲は言った。

「頼む、少しで良い。……十分ぐらい、ダメか？」

低く苦しげにつぶやかれる声は、どこか思い詰めているようにも聞こえた。

「頼む」

実咲はドアを閉めた。そして、閉じたドアを見ながらどうするべきかを考えた。このまま鍵をかけるか、それとも。

ドクドクと高鳴る心臓の音を聞きながら、どのくらい扉を見つめていたか。

まだ、ドアの向こうに雅貴はいるだろうか。

会いたかったのだと、気付かされる。今でも好きなのだと思い知る。このまま鍵をかければ、これまで通り少しずつ忘れていけるだろうか。それとも、今日の来訪の意味をいつまでも気にかけ続けてしまうだろうか。

未練がましい自分に、実咲は溜息をつく。

間違いなく、私は後者だ。

でも、大丈夫、雅貴のした仕打ちを思い出せば、きっと話を聞いても、流されたりしない。

実咲は、覚悟を決めて、チェーンを外し、ドアを開けた。ドアを閉めてしばらく経っていたのに、雅貴はまだそこにいた。

いっそ、諦めて帰ってくれていたら、諦めもついたものを。

「何の話？」

実咲の問いかけに、雅貴の顔が苦しげにゆがんだ。

「……十分でいい」

明確な答えは返ってこなかった。代わりに、ぽつりと低い声が響く。

「悪かったな、突然。こんな所まで押しかけて」

「そう思うなら、なぜ来たの」

「……謝りたかった」

実咲は眉をひそめる。

何を今更。

とっさにそう思う反面、わずかに浮き立つ心。それは期待なのかもしれない、それを心の片隅で感じつつ、実咲はその感情を押し殺して、怒りや不快感を優先する。

「そう。分かったわ。あの時のことを悪かったって言うのなら、その謝罪は受け取ってあげる。許す、許さないは、別だけどね」

実咲は打ち付けるようになる心臓の音を聞きながら、こわばる顔に笑顔を作る。

「じゃあ、用事は済んだわね。……帰って」

声が震えそうになるのを必死で押さえながら、実咲は何でもない

素振りをしながら言い捨てた。
雅貴はどこか苦しげに実咲を見つめている。
「許してくれなくていい、頼む、話がしたい」
低く、くぐもったような声が絞り出されるように雅貴から漏れた。
懇願するかのようなその表情は、よく見ると、ひどく苦しげで、顔色もどこか悪く見えた。
実咲は狂ったようにドクドクと波打つ自分の鼓動を聞いていた。
まともに思考が働かなかった。
今更何をしに来たのだろう。何を話したいというのだろう。
止まった思考の中、もう、これ以上関わってはいけない事だけは分かっていた。
なのにどうして自分は雅貴を振りきる事ができないのだろう。
情けなくて泣きたいくらいの気分なのに、会いに来てくれた、会えたうれしさばかりが胸をしめる。
それなりに落ち着いたと思っていたのに、本当は会いたくて会いたくてたまらなかった自分を、今更ながらに思い知らされる。
「話をして、どうするの」
躊躇う心とは裏腹に、自分の声が驚くほどに冷たいことに、実咲はほっとする。
実咲を見つめている雅貴の顔が、ひどく悲しげに微笑んだ。
「……もう一度、振ってくれたらいい。そしたら……二度と、個人的に声をかけたりしないから」
雅貴が、泣いていないのが不思議なほど弱々しくつぶやく。だから、頼む、話をさせて欲しい、と。
上辺だけの言葉や表情なら簡単に切り捨てることが出来た。けれど、そこには、別れた時のような軽さは欠片ほどもない。一つ一つの言葉が誠意を持って、真摯に実咲に向けられている。
ずるい、と、実咲は思う。断れるはずがないのだ。こんなふうに頼まれて、何の裏もなく、真摯さを見せられて。
実咲は雅貴の持つ二面性を知っている。女性に見せる軽薄な側面

と、友人や人に対してとても真摯で思いやり深い側面と。
今、雅貴から向けられているのは、実咲が好きになった、皮肉屋だけれど、情に厚い彼らしさ。
今の雅貴となら、話が出来るだろうか。
そう思ってしまうのは期待なのか。
実咲は躊躇いながらも、結局は雅貴を招き入れてしまう。
部屋に入った雅貴は、軽く中を見渡し、まるで緊張でもしているかのように浅い溜息をつき、そして口をつぐむ。
その姿はいつもの様子と違っていて、実咲は戸惑いながら彼を見つめたが、雅貴は実咲から顔を背け床をじっと見つめていた。
「コーヒー、飲む？」
沈黙に耐えかねて実咲は思わず話しかけたものの、言った直後に、自分の言葉が長居を促しているようにも聞こえると気付いて動揺する。
けれど雅貴はそれには全く気付かず、うつむいたまま、静かに首を横に振った。
「……いい」
雅貴の返事に、実咲は安堵すると同時に落胆を覚えた。
彼の反応に落胆してしまった自分に、実咲はどうしたいのかすら分からなくなっていた。
雅貴は相変わらず、どこかこわばった表情のまま部屋に佇んでいた。明かりの下で久しぶりに彼の顔を見ると、やつれているようにも見えた。光の加減かもしれない、そう思おうとして、目の下のクマに気付く。
疲れているのか、それともそれほどまでに仕事が忙しいのか。
久しぶりに顔を合わせた雅貴の様子が、実咲の知る彼の姿とはあまりにも違っていて、戸惑った。
仕事柄もあってか、こんな風に弱さを表に出すような男ではなかった。他人に気遣いや優しさは見せても、雅貴自身はそれを人に求めることがなく、むしろ疲れや弱音は隠そうとするきらいがあるよ

うな男だった。
その雅貴が、隠しきれない疲れを滲ませている。
その姿が、実咲の胸を突く。手を差し伸べたくなる衝動を必死に抑えた。
戸惑う実咲の気持ちを気づいてか気づいていないのか、さらに実咲の気持ちを揺るがすかのように、雅貴が視線を実咲に向け、まっすぐに見つめてくる。
見つめたまま沈黙を続ける雅貴に、実咲はたとえようもない居心地の悪さを感じた。
「で？」
口の中がからからになりながら、声を絞り出す。雅貴の姿に、何でもない言動に、未だ振り回されている自分に嫌気がさす。
そんな自分を知られたくなくて、強がって睨むように雅貴の目を見返した。
すると実咲の視線を受けて今度は雅貴が目をそらした。何かを思い悩んでいるようでもあった。
「……実咲」
ややあって、ようやく口を開く。同時に逸らされていた視線が再び実咲に向けられた。
「俺は、おまえのことが好きだ」
静かな声だった。

26

けれど、それはどこか苦しさを伴って響く。どこか悲しげにも見える雅貴の視線が実咲にそう思わせるのか。

何を今更……。

美咲は、雅貴の言葉、そしてその様子にひどく動揺した。

好きだという言葉を雅貴から向けられたのは、初めてだった。付き合い始めてから最後の瞬間まで、一度も向けられることのなかった言葉。

それを別れて二ヶ月もたった今になって、雅貴の口から聞くことになるとは。

向けられてくるまなざしを探るように見つめ返し、美咲は彼の真意を探ろうとした。

本気のわけがない。

そう思うのに、美咲の瞳に映る雅貴は、どこか憔悴し、まるですがるかのように美咲を見つめているのだ。どうしても、そこに嘘が見つけられない。

「俺は、お前に、最低なことをした。ごめん」

どくん、と実咲の心臓が大きくはねた。

なによ今更。

自分自身に対して半ば虚勢を張って実咲はそう思おうとした。

そうだ、今更だ。ごめんの一言ですむほど軽く済ませられないほど苦しかった。

なぜか泣きたくなるような気持ちがこみ上げて、それに気付きたくなくて、美咲はうなだれる彼をなじろうと、必死に言葉を探す。

出ていって。お願いだから、早く出ていって。

美咲は、許しそうになる感情から逃げるように、それを不快感にすり替えた。

そして口端を意識的に引き上げて雅貴に向かって笑いかける。

「最低なこと？　なにが？　雅貴に、何が分かるって言うの？　悪いなんて全く思ってなかったくせに」

言葉にした直後、美咲の胸がズキリと痛む。

自分の言葉の中に真実を見て、傷つく自分が情けない。美咲は自分を嗤う。嗤いながら雅貴を見つめる。

「ひどいことをしたなんて気持ちは、全くなかったくせに。よくそんな事が言えるわね」

この笑顔は、雅貴への嘲笑のように、見えているだろうか。

胸が苦しい。

早く、早く追い出さないと。

実咲は焦りを胸に、雅貴を見つめる目を逸らせた。

雅貴の視線が怖かった。時折まっすぐに見つめてくる視線が、偽りなく実咲をとらえているからだ。

以前のような上っ面で誤魔化そうとする顔ではなかった。

早く雅貴を家から出さないと、きっと、感情に負けてしまう。好きな気持ちに負けてしまう。二ヶ月前の雅貴ならともかく、今、目の前にいる雅貴を振り切るだけの自信がない。

実咲は笑いを納めて、気持ちを強く持とうと、睨むように雅貴を見ることで対峙しようとする。

それを受けて、彼は重く息を吐き、静かにうなずいた。

「実咲に切り捨てられたときに言われたこと、ずっと考えていた」

低い声。どこか疲れたようなその姿。

実咲の視線の先で、雅貴の表情が、苦しげにゆがんでいた。

「実咲の言うとおりだった。俺は女と付き合うことに、特に何も考えていなかったし、おまえと付き合いだしたときも同じだった」

雅貴は言葉を切ると、うつむき、また、ゆっくりと言葉をつなぐ。

「俺は、実咲のことは友達と思っていたし、大切にしたいとは思っていたけど、付き合うことに関しては、おまえと、他の女を分けて考えていたわけでもなかった」

静かな口調で、まるで他人事のように淡々と雅貴が言葉を紡いで

ゆく。
事実であるが故に、その言葉が、じわりと鈍く実咲の心を斬りつけるように浸透していった。
胸が、苦しい。
未だに、そんな雅貴の何の気もなしに紡がれる言葉で傷ついてしまう自分、未だに泣きたいくらい雅貴を好きな自分を、実咲は自覚する。
たった今、好きって言ったくせに、何よ。
これ以上雅貴の言葉を聞いていたくない、逃げ出したいという思いに駆られた。けれど実咲の気持ちとは裏腹に雅貴は淡々と言葉をつなげる。
「誰と付き合おうが別れようが、俺には姿が変わるだけでたいして違いはなかった。極端な話、女と付き合うことなんてセックスさえできれば後はどうでもいいことだった。……俺は、分かっていなかったんだ」
雅貴の声が、苦しげにゆがんだ。淡々としたその口調が、にじみ出る苦しさを吐き出すように絞り出される物へと変わる。
「俺は、実咲が俺にとって特別だと言うことを、分かっていなかった。当たり前にいてくれたから、それに甘えていることにさえ気付いていなかった。俺は、あんな事までしておいて、おまえと会えなくなるなんて、全然、考えてもいなかったんだ……」
苦しげな告白に、実咲の頭の中は、真っ白になる。けれど、ただ一つだけ、心に残った言葉があった。
私が、雅貴にとって、特別……？
どくんと、強く心臓が音を立てる。
「……なに、それ」
心の中を渦巻く疑問が、口をついて出た。
激しく打ち鳴らされる鼓動は雅貴にまで聞こえそうなほど大きな音を立てている。
その先の言葉を聞きたくて見つめた雅貴の顔は、先ほどまでの苦

しげな様子はなりを潜め、代わりに静かに、どこか悲しげに沈んでいる。それは実咲の目に、憎たらしいほど落ち着いていて見えた。

「……まともに付き合いだしたの、半年ぐらい前だったよな。それまでずっとおまえのことは友達だと思っていた。付き合うと言っても、それまでのつきあいにセックスが入ってくるかどうかぐらいの差にしか思ってなかった」

抑揚のない声で話す雅貴の眉間に小さくしわが入る。ややあって今度は息を大きく吸い込む。辛そうな表情だった。

「それまでみたいに二股かけてるの見て怒りながらも笑って小突いてた感じで、女のことで俺が何しても、笑って許されると思っていた」

そう言って見せた苦い笑いは、雅貴自身に向けられ、自分を嘲るように言葉を続ける。

「そんなわけないのにな。おまえが俺のこと好きって言ってくれてたのに、たぶん、俺はその意味がよく分かってなかったんだ。あんな事したら、おまえがどれだけ傷つくかなんて、考えてもなかった」

腹立たしいほど率直な言葉だった。特別だと言われた言葉への期待をたたき落とす程度には。

未だに雅貴の言葉に一喜一憂している自分に実咲は泣きたくなる。苦しさから逃げようと雅貴をなじる。

「だから？　それが何だって言うの。分かっていなかったから、仕方がないって？」

雅貴が言葉を見つけられないのか、息苦しそうに見つめて来た。

「……実咲……」

苦しげな雅貴の表情に反比例するように、実咲の中に沸々と怒りが込み上げてきていた。

意味が分かってなかった？　笑って許されると思っていた？　男友達と同等とでも言うのだろうか？　体以外、女として認めてもくれてなかったということなのか。

ああ、と、実咲は思い至る。

そっか。そういうことか。

ようやく、納得がいく。確かに、それならば好かれているのだろうと、実咲は出会い頭の告白の意味に気付く。傷つけて反省もしただろう。落ち込んだ様子の雅貴の姿も当然だ。

なぜなら、私は、彼が最も大切にする「友達」という存在なのだから。

腹立たしさと、あきらめと、悲しさと。渦巻いた感情が揶揄となって雅貴に向かう。

「女だけど、特別に友達として好き？　そんなこと言われて何を喜べって？」

怒りを通り越して、滑稽すぎて笑ってしまいそうだった。

分かっている。雅貴は女は大切にしないが、友達は大切にしている。実咲は他の女のようにどうでもいい存在ではないと、雅貴はそう言っているのだ。だから実咲は友達でいられたらよかったと、一時期は願っていたはずだった。

けれど、どうして今更それを喜べるのだろう。大切だと言われても女として見てくれないのなら同じではないか。

友達でしかいられないことと、女と見られれば大切にされないこと。立場は違っても、雅貴を好きな実咲にとって辛さに変わりはないではないか。

その思いが実咲を苦しめる。

女性として、唯一人の雅貴の恋人として愛されて、大切にされたいのだから。片方だけでは、けっきょく苦しみの形が違うだけで、辛い思いを繰り返すのだから。

泣きたかった。友達でいたかったはずなのに、それが叶いそうな今、それさえ不満に感じてしまう自分がいる。

今の実咲にとって、雅貴の特別な女性でなければ意味がなかった。友達だけではダメなのだ。

27

「違う！　そういう意味じゃない……！！」

なじる実咲に、雅貴が反射的に否定をしてきた。そして、とっさの語句の強さは、すぐに力ない言葉へと取って代わる。雅貴が感情を抑えようとするかのように震える溜息をついた。

「ごめん。俺は、また実咲に嫌な思いばかりさせているんだな。ごめん。そういう意味じゃなかったんだ。俺はおまえが好きだ。……俺はおまえ以外の女には興味ないよ」

どきりとした。望む言葉を返されて。それは心が読まれたかのような居心地の悪さだった。けれど実咲は必死で皮肉げな笑みを作って言い返した。

「そんなバカなセリフを、本気に受け取れって？　あんたぐらいの女好きなんて見たことないのに？」

雅貴の周りにいる女性と戦う土俵が違うのでは、結局実咲は苦しい思いをするのだ。何とも思っていないからといって他の女を抱く雅貴を見る羽目になるのがオチだ。

辛くてたまらない気持ちが表に出ないように押さえつける。

言い捨てた私に、低い声で雅貴が呟く。

「そうだな、顔と体がきれいな女となら誰とでもしてきたしな。そう思われるのが当然だと思う。でも、おれは別に女の子が好きなわけじゃない。俺は、今まで付き合ってきた子達が他の男とセックスしても何とも思わないし、好きだった子もいなかった」

必死で言い訳するような視線を、実咲は目をそらせることで拒絶する。

「……何それ。意味わかんない」

「恋愛対象として興味があった訳じゃない。俺が好きなのは実咲だけだ。俺は、おまえが他の奴とするのだけはイヤだし、実咲が俺以外の男と笑いながら歩いているところも見たくない。実咲以外の女

の事は、好きだったわけじゃないんだ」
言い訳がましい言葉を、実咲は笑い飛ばした。
「それで？　仮にそれを真に受けて私とあんたがよりを戻したとして？　私が他の男とやるのは許せないから、私が雅貴の彼女になって、あんたが興味のないセックスフレンドとやりまくるのを私に見てろって？」
実咲は軽く笑ってみせる。ばからしい、と。今までと何が違うの、と。
あり得そうなことだ。
そう思いながら、実咲は雅貴を見る。彼が必死に否定してくるのを期待しながら。
実咲は自分でも気付かぬ内に、期待していた。
不安を揶揄という形でぶちまけて、雅貴に否定してもらいたかった。
そんな実咲の無意識に応えるように、雅貴はきっぱりと断言する。
「実咲以外と付き合う気はない。もう二度と他の女には手を出さない。……今は、興味もないよ」
雅貴の真剣な表情で紡がれる言葉。
嬉しかった。
望んだとおりに、いや、それ以上の言葉を返されて。
胸を占めるのはたとえようもない悦び。
うれしくて、けれど、実咲は泣きたくなる。
雅貴の言葉を、素直に受け入れることができなかった。
「……それを、信じろって？　女に興味がない？　雅貴からそんな言葉聞くなんて、笑えるんだけど」
信じたい、信じたいのに、どうしても信じられない。泣きたいぐらいに嬉しい、けれど、泣きそうなぐらいそれを信じられない自分がいる。
「……どうやったら、それを信じられるって？」
泣きそうになるのを堪えながら嘲笑うように雅貴を見る。笑って

いないと、涙が堪えられそうになかった。
苦しい。
こんなに好きだと思うのに。私は雅貴を信じられない。もうあんな思いをしたくない。あんな苦しい思いはしたくない。彼の言葉に未来を見つけられない。彼の言葉が本当だという保証も、本当だとして、続くという保証も、なにもないのだから。
保証がなくても、純粋に願い、信じるには、実咲の受けた傷は大きすぎた。
信じると言うことは、悲しいほどに、難しい。一度不信感を抱いてしまえば、きっと完全にぬぐい去ることは出来ないのだ。深い傷は、どんなに綺麗に治っても、必ず跡が残るように。
雅貴の表情は真剣だった。彼は実咲からの非難を覚悟していたように、静かにうなずいた。
「俺が何を言ってもすぐに信用してもらえるとは思ってない。そう思われるだけのことをしたと思っている。俺が実咲の立場なら、……たぶん信用しない」
つぶやいたその顔が自嘲気味にゆがんだ。
「……ごめん。そんな事に気付くのに、二ヶ月もかかった。ただ、それが、今の俺の正直な気持ちだ」
雅貴は息を吐くと、口元を引き締めた。
そんな雅貴の様子を、複雑な気持ちで眺めながら、実咲は頭の片隅でちらりと考える。
今、ここで、信じられない、帰って、と、言ったのなら、雅貴は帰るのだろうか。そして、はじめに言ったように、もう、関わりのない人となる……？
考えて、ぞっとした。
雅貴との関わりを捨てていたつもりなのに、捨てる覚悟が付いていたはずなのに、今は、もう、それを失うことを、実咲は恐れていた。
半時間にも満たないわずかな時間が、二ヶ月費やして忘れようと

した心を、もう揺るがしている。
雅貴の言葉を拒絶しても、再び、雅貴自身を拒絶する勇気は、どこかに消えてしまっていた。
実咲は何も答えられずに、胸の中で渦巻く気持ちをもてあます。自分がどうしたいかさえ分からなくなっていた。雅貴の言葉を、どう判断すればいいのかわからない。
信じたい。雅貴を好きだと思う気持ちは、悲しいほどにぶれることがない。それは、気持ちを自覚したあの日から、ずっと、変わることなく。
でも、こんな事、続けられない。
実咲はそう自分に言い聞かせる。ずっと思い続けていた考えに囚われていた。囚われていたかったのかもしれない。傷つくのが怖くて。それ故に、雅貴を追い払おうとしなければいけない理由を必死で探した。
そして、不意に嫌な事実を思い出す。
雅貴は、私に嘘をついたことは、一度もない。
その事実に、ドキリとする。ごまかすことはあった。けれど、言いたくない事は言わなかったのであって、嘘はつかなかった。その点に関しては、付き合っていた頃も一貫して変わらず誠実であったとも言える。
また一つ、実咲は、雅貴を追い払えない理由を一つ作り出す。雅貴から逃げ出さないといけないと、ずっと思い続けていた強迫観念が、雅貴を遠ざけなければと実咲をせかすのに、「もう今更関係ない、帰って」の一言が、のどの奥で止まったまま出てこない。
逃げ出したい反面、実咲は、雅貴を許したかった。許して、今、目の前にいる、真摯な雅貴と、やり直したかった。
すがりたい。
実咲は思う。
雅貴の言葉にすがってやり直したい。
けれど、もう傷つくのは嫌だった。怖かった。

27（後書き）

注釈（？）

「雅貴を許したかった」というのは、実咲が雅貴に与える許しではなく、実咲が、実咲自身の中にある雅貴に対する負の感情に与える許しです。

許しとは、他人に与える物や他人から与えられる物ではなく、自分自身に与える物だと思うのです。

他人がいくら許しても、自分が自分自身を許さなかったら許せない。

言葉でいくら許すと言っても、理性がいくら許したいと思っても、許せない気持ちが消えないこともある。許しとは、自分が自分自身にしか与えることが出来ないと思うのです。

28

返事のない実咲を前に、雅貴はしばらく考え込んだ様子で黙っていたが、ためらいがちに口を開いた。

「もうひとつ話を聞いてもらいたい。気分のいい話ではないと思う。だから、迷っていたけど……、やっぱり、聞いて欲しい」

実咲は探るように雅貴を見ると、彼は躊躇った様子で目をそらした。

「俺が、実咲と付き合っていた間も、他の子と関係を持ってた理由」

言いにくそうに、雅貴がつぶやく。

どくんと、心臓が大きな衝撃を伝えてきた。

なに、それ。そんなの、聞きたくもない。

「今更言い訳？　そんなの聞いても意味がない」

ここに来て、何でそんな苦しいことを聞かないといけないのか。

言い捨てた実咲に、雅貴が小さく息を吐く。

「……そうだな。そんな事を聞いて欲しいと頼むのは、虫が良すぎるよな。はっきり言って、ろくでもない話だし、聞けば余計に実咲は俺を軽蔑するかもな」

そう言って雅貴は重く溜息をついた。

「でも、俺は、出来れば実咲とやり直したいと思っている。そのためにも聞いてもらいたい。その話を聞いて、実咲が俺を許せないのなら、俺も、諦めがつくから。最初に約束したとおり、もう、おまえに迷惑はかけない。二度とここにも来ない。約束する。だから、実咲は、俺をあきらめさせるためでもいいから、話を聞いて欲しい」

雅貴は静かに息を吐いて実咲を見つめてきた。

返事を求められて、自分の心臓が激しく打つのを聞く。

聞きたくない。

けれど、もし、雅貴の言い分が理解できて、信用できるようになるとしたら？　それとも、もっと軽蔑できる……？

聞きたくないけれど、聞きたい。
決着を、自分の心につけられるだろうか。
そんな期待がないわけではないが、聞くのは怖い。
実咲には選ぶことが出来なかった。
雅貴から目をそらすと、それをどう受け取ったのか、雅貴が話し始める。
「たぶん俺は、自分の好きなように組み敷けるのなら、誰でも良かったんだと思う。セックスがしたかったわけじゃないと思う」
意味が分からず、とっさに実咲は問い返す。
「じゃあ何がしたかったの」
責めるような口調になった実咲の声が震える。答えを聞けば、自分が傷つきそうな気がした。
実咲の目の前で雅貴は考え込むように口をつぐみ、そして、息苦しそうにつぶやいた。
「……見下したかったのかもしれない、と、思う」
雅貴が大きく息を吐いた。
それを感じながら実咲は自分の手をじっと見つめる。自分と雅貴の付き合ってた頃のことが脳裏をよぎった。そういうことだったんだ、と思うと泣きたかった。だから、雅貴は誰でもいいからあんな事が出来たんだ、と。
「きれいな顔して、何考えているか分からないような女が俺の思うとおりになるのが面白かった」
実咲の顔がゆがむ。その言葉が彼女の中で惨めに響いた。
「私も、その中の一人、か」
自嘲してつぶやいた言葉に、雅貴がきっぱりと否定した。
「違う。実咲は違う。実咲をそんな風に見たことはない。実咲と抱き合うのは、気持ちよかったよ。実咲は、他の女とは全然違う。実咲に触れるのは信じられないぐらい気持ちよかった。実咲の隣は、居心地が良かった。でも……居心地が良すぎて、正直イヤだった」
気持ちがいいと言ったその口で嫌だという。胸がずきりと痛んだ。

「……意味が分からない」
「たぶん、俺は、実咲のことも見下したかったんだろうと思う。でも、出来なかったんだ。人としてはもちろん、女としても、抱けば、いつだって気持ちよかったし、俺は実咲がかわいいと思っていたよ。俺ばっかり猿みたいにやりたがって、いつだっておまえが優位に立っているように感じていたような気がする。俺は実咲相手だと優位に立てなかった。だから、苦しかったんだと思う」
雅貴が深く息をつく。実咲は、それをどう理解したらいいのか、分からなかった。嬉しいような気もしたし、切なくも感じた。思いもよらない雅貴の告白に、感情がついていかない。
「たぶん俺は、怖くなったんだ。実咲相手だと俺はいつものように優位に立てない。俺と付き合いだしてから、やたらときれいになるし。……俺は、化粧をしてきれいになった実咲が、笑顔の下で何考えているのか分からなくなった。自信をつけて、他の男にも同じように笑いかけているかもしれない、そんな気がした。だから、実咲を抱いた後は余計にイライラしていた。実咲に見下されたくなくて、たぶん俺は必死で実咲をおとしめる為の何かを探していた。でないと怖かったんだと思う。実咲は俺なんか簡単に裏切るはずだと、ずっとそんな感覚があった」
その言葉に、呆然として聞いていた実咲の感情の一つが、ようやく目を覚ましわき上がってきた。
「私が、雅貴を裏切る……？」
怒りで声が震えた。その言葉を、そのまま雅貴に返したかった。他の女に同じように笑いかける雅貴を見て、苦しんだのは実咲だった。
「私がいつ……」
「実咲はそんな事しない。分かってるんだ」
雅貴が頭を抱えるようにしてうつむいた。そして息を大きく吐くと、もう一度顔を上げる。けれど実咲と目を合わそうとはしなかった。その表情は無表情なのに、実咲にはひどく苦しそうにも見えた。

「でも、俺は、そんな女しか知らないんだ。見た目のいい男を連れて歩きたい、後腐れのないセックスをしたい、そんな女しか俺の周りにはいない」

「それは、雅貴がそんな付き合いをして……」

実咲がカッとして口を挟むと、その言葉尻を取り上げるように、雅貴が続ける。

「そうだ。そんな付き合いしかしてこなかった。いい加減、気がつけば良かったのに。せめて実咲を傷つける前に。たぶん、俺は、女とのつきあい方のスタートを間違えたんだ。実咲と出会う、ずっと以前に、……俺は間違えていたんだ」

雅貴は、下を向いたまま小さく息を吐いた。

雅貴の告白はをどう受け止めたらいいか分からないまま、実咲の中にその言葉が重く響く。

「でも、俺はそれに気がつかなかった。実咲と一緒にいるのは居心地が良かったのに、そこで気がついても良かったはずだったのに。でも、それの違和感を居心地が悪いと逃げて向き合わなかった。俺は、怖かったんだと思う。居心地が良ければ良いほど、不安が募っていたんだと思う。実咲は、俺の中の安定を壊すんだ。実咲の側が心地よいほど、女の子を見下していたことで安定していた俺の立ち位置は崩れる。だから俺は実咲と一緒にいるほど他の見下す女の子が必要になったんだと思う」

浮気の言い訳としては、最低だと思った。

言い訳のつもりなら、話にならないと怒鳴ったかもしれない。

けれど、実咲は口を挟むことが出来なかった。

雅貴の言葉は謝罪の意志はあっても、許しを請うわけではなく、むしろ断罪を求めているように見えた。言い訳と言うよりも、これが雅貴にとっての事実なのだ。

それを実咲が怒りにまかせて責め立てたとして、雅貴は、ただその怒りを「そうだな」と受け止めるだろうと想像できた。

「そのくせして、俺は、実咲に依存していた。居心地がいいから、

甘えていた。だから、ずっと側に置いておきたくて、俺は実咲の優位に立とうとしていたんだと思う。それに実咲が優位のままだと、俺に実咲を引き留めておく力がないようで恐かったせいもあるかもな。俺はたぶん、実咲に「俺は実咲を傷つけるだけの力がある」って、思わせたかったんだ。そんなくだらない俺のプライドに、実咲を巻き込んだ」

雅貴はため息をつくと、わずかに微笑んだように見えた。

「勘違いも甚だしいよな。どんなに実咲を傷つけることが出来たとしても、俺自身が実咲に嫌われたら、なんの意味もないのに。どんなに俺が優位に立っていると感じても、切り札を持っているのは実咲の方だったことに、俺は、実咲に見捨てられて、ようやく気がついたよ」

29

実咲は言葉を失っていた。雅貴の言葉はどれも思いがけない物でどういう風にとらえていいのかさえ判断がつかなかった。ただ、分かったこともある。

恐らく、語られた事は雅貴の本心であるだろうと言う事。そして、弱みをさらけ出しているのだろうと言う事だ。

けれど、それでも答えを出せなかった。

だからといって何が変わるというのだろう、という気持ちがある。変わるはずがないという気持ちを維持したかった、と言った方が正しいのかも知れない。

結局のところ、失った信頼という物は、これほどまでに大きいということなのだ。

もう一度雅貴を信じたいと心は揺らいでいるのに、信用できるのか？　とストッパーが働く。

雅貴の言葉は、ほぼ間違いなく本心だと実咲は思っていた。それは、分かる、分かってしまう。女として雅貴と一緒にいた時間より、友達としてそばにいた時間の方が長いから。

けれど、今は本心でも、それはいつまでも続く気持ちなのか。

信じたらダメだ、と実咲は自戒する。

信じて馬鹿を見るのは、私なのだから、と。

黙り込んだまま、何も言わない実咲に、耐えかねたように雅貴が話し始める。

「今更、こんな事を言っても信じてもらえるとは思ってない。でも、信じれなくても、許すことができなくても、それでも少しは俺のことを好きだと思ってくれるなら、頼むからもう一度俺と……付き合って欲しい。信頼できるわけないのはわかっている。でも俺は実咲の側にいたい。実咲が好きだ。頼む。もう一度だけでいい。もう一度だけでいいから、やり直させて欲しい。前のことがそれで取り返

せるとは思わない。でも、実咲の信頼を取り戻せるようにがんばるから。実咲の信頼を裏切るようなことはしないと約束するから」

懇願にもとれるその言葉。

信じられる筈がない。事実だとしても、それを受け入れるいわれなんてない。あんな事をしておいて、どの面下げて……。

心の中で、実咲は何度も何度も目の前の苦しげな雅貴を罵る。

なのに。

……どうして、私はこんなに嬉しいんだろう。

考えることとは裏腹に、心の奥底からこみ上げてくるのは歓喜だった。

実咲は込み上げてくる涙を必死でこらえた。

どうして私はこの男がこんなに好きなんだろう。

実咲はこみ上げてくる気持ちに翻弄される。

私だけを好きだと言って、私だけを大切だというその言葉が嬉しくてたまらない。私はこの言葉が欲しかったのだと、喜びに胸が詰まるほどに。

信じられないのに、許したくないのに、再び雅貴を受け入れようとする自分がいた。信じたらダメだと実咲の理性は思っているのに、信じたくてたまらない。

たまらない幸福感が実咲の胸を覆い尽くそうとしていた。

私の知っている雅貴は女にこんな風に執着をしない。だから、これは信じていいはずだ。そんな言い訳を自分にして、信じていい理由をつくってしまう。そうしてまで受け入れたい自分を自覚する。

実咲は大きく息を吸った。

私は、決断しなければいけない。

「……イヤって言ったら……」

実咲は彼を見つめながら、震えそうになるのを堪えて言葉を絞り出す。

実咲の言葉に、雅貴がびくりと震えた。

「もう、顔を見せないでって言ったら、その通りにするのよね……

？」

実咲のつぶやきに、雅貴が震えた。握りしめた拳が、白くなるほど強く力が入り、その手がわずかに震えている。

「……ああ」

目を閉じた雅貴が、絞り出すようにつぶやいた。

胸が苦しい。

私のたった一言で、この人は離れていく。

そう思うと何かに突き刺されるような痛みが襲う。

この人を失える？

実咲は自分自身に問う。

これほど私を失ったと苦しんでくれるぐらい、好きだと言ってくれる、彼を失える？

こんなに、好きで好きでたまらないのに、彼を失って、私は後悔しない？

まるで最後通牒を突きつけられるのを待つ体の雅貴を見ながら、実咲は自分に問いかける。

失いたくなんか、ない。彼の手を、取りたい。

分かっていた。本当に分かっていた。雅貴が本気で言っていることを。雅貴が本当に自分のことを好きだと言ってくれていることを実咲は分かっていた。

雅貴の言葉がすんなりと自分に届く。今の雅貴の言葉にこの前のような軽さはいっさいない。今の雅貴の言葉には確かに真実がこもっていた。

けれど、実咲はその雅貴のさしのべられた手をすぐに握り返すことができなかった。また傷つくのが怖かった。信じたからといって、不安が消えるわけでもなければ、一度知った恐怖をぬぐえるわけでもない。一度知ってしまった感情は、もう、取り返しがつかないほどに、傷となって残っている。

かといって、彼の気持ちを知って、別れる決意も出来ない。

もしかしたらホントにずっと浮気はしないかもしれない。

けれどそれ以外にも問題がある。彼の言葉が仮に本当だとしても。けれど「いつか自分以外を好きになるのかもしれない」そんな考えがよぎる。雅貴を拒絶する為の言い訳が、最後の砦のようにそびえる。それは、今問い詰めたとしても、決して解決することのない不安だった。

雅貴の言葉が本当ならば、今はいいかもしれない。けれどいつ現れるかもしれない雅貴が自分以上に好きになる女性。いもしない女性の陰に自分はおびえながら過ごさなければならない。

希望と不安に心が揺らいで、たった一つの決断さえ出来なかった。言葉を返せずにいる実咲を見て、苦しさを耐えるように目を背けていた雅貴が息をのんだ。

今、私はどんな顔をしているのだろう。

どこか驚いた様子の雅貴を見て、実咲は逃げるように目をそらす。分かっている。たぶん、泣きそうな顔になっている。

だって、表情が、隠せない。どうしたらいいか分からない。

「……何でよ、信頼なんて、出来るはずがないじゃない」

声に涙がにじんだ。震える声は、涙に濡れてか弱く響く。

「何で、今頃、そんな……」

それは、雅貴を受け入れたい気持ちを滲ませて、弱く、弱く響く。

雅貴がその実咲の弱さにすがるようにつぶやいた。

「疑い続けてくれたらいい。俺はそうされるだけのことをした。疑わしいと思ったら俺を問いつめてほしい。そしたらちゃんと説明する」

雅貴はそこで言葉を切ると、苦しげに声を潜めた。

「……人から信頼を得るのは大変だよな。けど、失うのはほんの一瞬なんだよな。一度信頼を失ったら、取り返すのは最初の何十倍もかかる。だから実咲が俺をいつまでも疑うのは仕方のないことだと思っている。だから何回でも疑ってくれてかまわない。不安になったら、疑わしいと感じただけでも問い詰めて欲しい。俺はおまえがもう一回信頼してくれるまで、何回でも説明するから。だから、頼

む……！！　もう一度、考え直して欲しい」

苦しげに懇願してくる声、切なげに訴えてくる瞳。

雅貴が今まで見せたことのないそれらが、全て、実咲に向けられている。

胸が詰まる。苦しくて、泣きそうなぐらい嬉しかった。

雅貴の言葉が、実咲の心に染み渡っていく。言葉の一つ一つが、ひとしずくとなって、ゆっくり、ゆっくりと、実咲の心に浸透してゆく。

目の前にいるのは実咲が好きになった雅貴だった。案外思いやりがあって、人の気持ちを大切にする、大切な人には本当に誠実な人。好き。やっぱり、大好き。もう、いい。もう、どうでも良い。

実咲はこみ上げてくる涙を、手の甲で乱暴にぬぐった。

「雅貴が、私以外の女の人を好きにならないとも限らないじゃない」

涙声になりながら自分にとっての最後の砦を掲げた。もう、雅貴の手を取ろうとしているのに、最後にあがいてみせる。

「……そうだな。そうかもしれない。でもそうじゃないかもしれない。それは分からない。ただ、今は実咲以外には興味ないよ。俺にはそうとしか答えようがないから。でも、もしそんな女ができたら、浮気をせずに、おまえにはっきり言う。気持ちはどうにもならないけど、裏切るような行動は、絶対にしない。もし、そんな日が来たのなら、その先のことは、二人で決めよう」

盲目的に否定の言葉を言うのではなく、肯定するところに誠実さをかいま見る。雅貴は実咲の望む受け止め方を知っている。

30

いつからだっただろう、こんな雅貴が見えなくなっていたのは。
軽薄でダメなところばかり目につくようになってしまっていたのは。
でも、今は見える。実咲が好きになった雅貴が、確かに目の前にいる。
「……私のことが、好き？」
「好きだ」
端的に答えた雅貴の声は真剣で、笑ってしまいそうになるくらいまじめな顔だった。
「浮気はしない？」
「絶対しない」
力を込めて雅貴がうなずく。
もう、ダメだ、と思った。
自分が好きになった雅貴の姿を改めて見つけて、どうして拒絶できるというんだろう。見えなくなっても好きだった。どんなにイヤなところばかり目に付くようになっても、彼じゃないと、駄目だった。
いつから、あんな雅貴しか、見えなくなっていたのだろう。どうして、雅貴のそんな側面ばかりが向けられるようになったのだろう。
それは、雅貴の心の変化にも繋がっている。
雅貴は、女の子を見下したかったのだと言った。
けれど、雅貴は実咲を最初から見下していたわけではなかった。
じゃあ、いつから？
実咲は不意に気がついた。
ああ、そうだ。
胸が軋むように、その瞬間を思い出す。
きっと、あの頃からだ。あの頃から、私の好きだった雅貴の姿が曖昧にぼやけていったのかもしれない。

実咲は思い出す。雅貴のことを気にし始めて、ブランド物で身を固め始めた頃を、必死で、雅貴の周りの女の子達に合わせようとしていたあの頃を。

気付いて、実咲は息が詰まるような苦しさを覚えた。

雅貴が自分を友達でなく他の女と同じに扱い始めたのは、自分が雅貴の周りにいる女と同じような振る舞いを始めたから、雅貴がそんな風に扱う女の姿を自分自身が作り出していたからかもしれない。

思い至ったその考えに、実咲はぞくりと震えた。

もしかしたら、私が自分を作ったりせず、私のままで雅貴に思いを寄せていたら、こんな風にちゃんと誠実に思いを返してくれていた……？

だとしたら、雅貴との関係をダメにしたのは、私自身のせいなのかもしれない。

愕然と、そんな考えに思い至る。

実際そうしたところで、本当にそうなったかどうかは分からない。ただ、そう思えた瞬間、胸の中がすっと軽くなった。

よかった。

なぜか、そう思えた。

雅貴だけが、悪かったんじゃない。

その事が、訳も分からず、なぜかうれしかった。こだわっていた、雅貴への不信感がほどけるような気がした。

実咲はどこか晴れ晴れとした気持ちで泣き笑いになりながら、少しからかうような口調で質問を続ける。

「女と話してるだけで『何してたの？』って問いつめるかもしれないのよ。何にも疑われるような事してなくても、疑い続けるかもしれないのよ。そんなのをホントに我慢できるの？」

実咲の変化に気づいたのか、真剣なだけだった雅貴の表情が少し和らいだ。

「……それは、自業自得だから、がんばって前向きに受け止めさせていただきます」

神妙に、けれど少し冗談めかした返事が返ってきた。
実咲はうなずいて、雅貴の瞳をじっと見つめた。
「私と付き合っている間は、絶対に他の女の子に手を出さないで。手をつなぐのも、肩を抱くのもダメ。髪に触れたり、指先に触れたり、女の子がその気になるようなことも、全部ダメ。私以外の子としたいのなら、私と別れてからにして」
「わかった」
もう、実咲の答えに雅貴も気づいていた。
「私を傷つけたくないとか、そんなの、言い訳にもならないから」
念を押すと、神妙な顔をして雅貴が頷く。
「うん」
「絶対ね？」
「うん」
雅貴がほっとしたように微笑んだ。
「約束よ？」
「うん」
雅貴が優しく笑っている。
実咲の好きな、雅貴の笑顔だ。犬達に向けてるときと同じぐらい優しい暖かい笑顔。自分に向けられるのを失ったときから、ずっとずっと求め続けていた笑顔。
ああ、もう、好きだなぁ。
悔しい。悔しいけど幸せでたまらない。
この笑顔をまた向けてもらえるのなら、傷ついても、それでもいいから、一緒にいたい。
そう思った。
「いいわ、付き合ってあげる」
実咲は涙声で高飛車に言ってみせる。
泣きそうになりながら笑って言った実咲を、さっきまで微笑んでいた雅貴がくしゃっと泣きそうに顔をゆがめ「よかった……」と震える声でささやいて、抱きしめた。まるで、すがりつくように、強

く。

「……実咲、実咲」

抱きしめられたまま、何度もささやかれる自分の名前。切なげに、大切そうに自分の名前が呼ばれるその幸せ。

それは、もう、何もかもがどうでもよくなるぐらい、幸せな瞬間だった。

信じられないと、そう思ったことさえ遠くに感じる。

結局、自分はこの男から離れられないのだ。

実咲はそんな自分をすっきりした気持ちで笑う。

馬鹿なことをしている、と、心の片隅で訴える声がある。けれど、実咲はそれを笑い飛ばす。

愚かでいい。馬鹿でもいい。

怖くて良い、不安で良い。

自信がなくても。未来が見えなくても。

信じられなくても、もし、未来、また泣くことになっても。

頭の片隅では先の分からない未来を思って不安を感じている。

けれど、これから模索していくしかないのだと実咲は思う。

何度も傷つけられた。だから二の足を踏んでしまうのは仕方のないこと。ただ、彼から逃れると幸せになれる保証があるわけでもない。彼のそばにいると再び傷つくかもしれない。けれど雅貴は言葉通り本当に実咲だけを思い続けるかもしれない。

未来は、何を選んだとしても、保証なんてないのだから。

だとすれば、実咲は雅貴のそばにいることを選ぶ方が幸せなのかもしれない。

いくら考えたところで、どの選択肢を選んでも結局どれも確証のあるものなどないのだ。ならば、もう一度傷つく覚悟で、今幸せと感じられる道を選ぶのもまた一つの選択肢だと思う。

言い訳じみてる。

実咲は頭の片隅で自嘲した。

けれど、それでいい。

言い訳でいい。雅貴と一緒にいられるだけの理由になるのなら。それで自分が納得がいくのなら。

実咲にしがみつくように抱きしめていた雅貴の腕がふとゆるむ。顔を上げた実咲の目に雅貴の顔が映る。躊躇ったように実咲を見つめている。

「……キスしていい？　今、実咲に、すごくキスしたい」

実咲は笑って雅貴の背中に腕をまわした。キスひとつに躊躇う雅貴が見えただけでも、この選択は正解だったかも知れないと思うくらいに、貴重な言葉だと思った。

雅貴がコツンと、実咲の額に額を合わせる。

近すぎて顔がぼやけるのを、実咲はじっと見つめた。

「実咲が、好きだ」

囁く吐息が、実咲をそっとくすぐる。

「……会いたかった。ずっと、会いたかった。実咲と、言葉を交わしたかった。実咲に、触れたかった」

震える声が吐息と共に漏れて、唇と唇が、かするように触れる。

「実咲」

切望するような声が聞こえる。それは歓喜となって実咲の背筋を駆け上るようにゾクゾクと体を震わせた。

「俺は、実咲が、好きだ」

絞り出すような囁きの後、深く、深く唇が重なる。

泣きたいほど幸せな雅貴とのキスが繰り返される。

幸せだった。

重なる唇の感触が、懐かしく、愛おしく、実咲の心を幸せで満たす。

キスを交わしながら実咲は何もかもどうでもいい気分で思う。今は、少しの不安も未来も何も考えず、雅貴の側にいようと。この幸せに流されてしまおうと。

長いキスの後、離れた唇から溜息のような吐息が漏れる。息の上がった浅い呼吸をする実咲の体から、不意に雅貴の温もりが離れた。

雅貴はそのまま腕をほどく。
「ありがとう」
雅貴はぎこちなく笑うと更に体を離した。
「え……？」
思いがけない言葉と行動に、実咲は首をかしげた。
「その、今日は、帰るよ」
実咲は、後ずさるように離れていく雅貴の顔をのぞき見る。貼り付けたようなその笑顔と離れた意味を考える。
雅貴らしくない。
平たく言うと、いたせるときにいたすのが彼らしさだ。今の行動の違和感は、その辺りにある。
逃げているように見えるのだが、まさかね、と実咲は雅貴を探るように見つめた。
「どうしたの？」
ぼそっと呟くと、雅貴がえっと顔を上げる。
「雅貴、なんか変」
歯切れの悪い雅貴に、実咲はからかうように雅貴に詰め寄った。
「……何が？」
雅貴がぎこちなく目をそらす。
「しないの？」
「……していいの？」
うなるような低い声で雅貴が確認してくる。
お預けをくらった犬みたいだと実咲は思った。そうなると、おかしくて笑いがこみ上げてくる。
まさかとは思ったけど、やっぱり、そうかも知れない。
雅貴が、私に、遠慮してる。恋愛を関係に持ち込んでから、ずっと実咲は雅貴のすることに引っ張られっぱなしだった。慣れていない実咲からすると、最初の頃それはありがたかったけれど、今思え

ば、対等ではなかったのかもしれない。
なんだか、くすぐったいようなうれしさがこみ上げる。
これからは、これまでとは違う関係を築くのだと、信じられる気がした。
「そんな事、確認したことないくせに」
「……実咲に嫌われたくない」
雅貴がまるですねたように目を背けたまま低い声で呟く。
「今更」
実咲は笑いをこらえながらつっこんだ。
以前はずっと主導権は雅貴にあったような気がするが、少なくとも現時点では、主導権は自分にあるのかも知れないと、実咲は気付く。
これは、面白いかも。
たじろいでいる雅貴を見ながら、実咲はほくそ笑んだ。
「これでも、反省しているんだ。その、俺の都合ばかり実咲に押しつけてきたのを」
「ようやく自覚したの？」
体を引きながらもごもごと言い訳する雅貴を、実咲はにやにや笑いながら見つめると、雅貴が少し開き直ったように実咲をみた。
「はい、すみませんでした」
「心がこもってない」
実咲は笑って雅貴の顔をのぞき込んで、そのままキスをした。
「……いいよ」
実咲は呟いた。
「え？」
躊躇う雅貴の表情は見えない。けれど、実咲は雅貴の首に腕を絡めてもう一度キスをする。
「……いただきます」
耳元で囁いた雅貴の声が妙に神妙で、実咲は笑いながら雅貴を抱きしめる腕に力を込めた。

これなら意外と、やって行けそうな気がした。

31

セックスの後も帰らずに、雅貴がすぐ隣にいる。

実咲は不思議な気分で隣に寄り添う男の存在を感じていた。いつもなら、こんなに遅い時間だと、犬たちのことがあるから、すぐに帰るのに。そう思うと、くすぐったいような、うれしいような気持ちになる。

今日だけは、許してね。

雅貴の肌の感触に身をまかせながら、彼の帰りを待っているだろう犬たちに心の中で謝る。

こうして一緒にいることは心地よかった。

普段とは違う「近さ」が生まれる。何もかも、全部がどうでもいいような感覚。許しあえるような。セックスの後の特有の近さというか。いつもなら話せないことも話せるような、そんな近さ。

そうだ、今なら、聞けるかもしれない。

実咲は雰囲気にまかせて訊ねてみた。

「雅貴は、どうして女の子を見下したかったの？」

唐突な問いかけだったが、雅貴は格別驚いた様子もなく、けれど少し困ったように眉間に皺を寄せると、目を閉じて実咲に甘えるように抱き寄せた。

「……話した方がいい……？」

雅貴が少し嫌そうにつぶやくが、抱き寄せられていた実咲にはその表情をうかがう事ができない。

「あんまり話したくないような話？」

実咲の問いかけに少し考えていたのか、わずかな沈黙の後、彼の小さくうなずく動作が肌を通して伝わってくる。。

「……そうだな。今となっては、どうでもいいし、大したことないって思えるけど……」

「じゃあ、いい」

無理に聞かなくてもいい、そう思った実咲に、雅貴が間髪を入れず首を振って否定する。

「……実咲には、聞く権利があるよ。聞いて気持ちのいい話じゃないと思うけど。ただ、たぶん、話したら、言い訳がましくなる。俺が、今でも許せずにいることだから。それでも良かったら、話す」

少し体を離し、まっすぐに見つめてきた雅貴の視線を受け止め、実咲は肯いた。

「聞きたい」

雅貴がわずかな沈黙の後、覚悟を決めたように頷く。

「高校生の頃だった。父親が再婚したんだ」

雅貴は、実咲を抱いたまま、ゆっくりと話し始めた。

「再婚相手は俺と年齢は十才ぐらいしか離れてない人だった。気分の良い物じゃなかったけど、母親が亡くなってから五年経っていたしね、小学校から高校までの五年っていうと、ものすごく経ったような気持ちもあったし。反対する理由もなかったから、普通に一緒に暮らしていたよ。

十歳年上でもさ、結構美人だったよ。それがやたらと話しかけてくる人で、義理の息子と仲よくなろうと必死にがんばっているんだと、最初は好意的に思っていた。

けどあの人は、俺が好意的に接していたらすぐに誘うように触ってくるようになって、最後はとうとう押し倒された。

さすがに父親の嫁さんとどうこうなるのは気分悪いから逃げたけど。

そしたら、今度は脅された。なんとしてでも口止めをしておきたかったんだろうな。じゃあ最初っからするなよって感じだけど、自分に自信があったんだろうな。意外と、俺が逃げたことに腹が立っていたのかもなって、今なら思うけど。

アレでなんか、思ったんだよ。

女って、こんなもんなんだって。

それからかな、言いよってくる女の子達も、あの人と同じように思うようになっていったんだろうと思う。

たぶんね、あれで、俺の足場が崩れちゃったんだと思う。

当時俺は、親に養われるしかない子供でさ。父親に見放されたら生きていけないわけで。それを盾に取ってきたあの人の言いなりになるしかなかったのが悔しかった。

俺は、あの人の言いなりになりたくなかった。

たぶん、俺は女の子をあの人の替わりにしたんだと思う。女の子を見下すことで、あの人に負けた自分のプライドを取り返したかったんだと思う。

だからそれまでは、もっと、ちゃんと女の子とも付き合っていたんだけどね。

でも、その後は手当たり次第に付き合っていったような気がする。相手が俺の見た目だけに寄ってきているのなら、適当で良いような気がしてたんだろうな。そしたら、本当に、誰と付き合っても、全部似たようなもんだった。みんなあの人の代わりに敵視できるような女の子ばっかりだった。そういう子を選んでいたんだからしかたないんだけど。

余計に、まじめに付き合うのがばからしくなった。

結局俺に寄ってくる女の子は、俺の容姿が気に入っているだけで、セックスして、隣歩いていたら満足なんだよ。

俺じゃなくても良いんだ。連れて歩けば自慢できるような男なら誰でも。

お互い、性欲満たして、見せびらかして、持ちつ持たれつって言うの？　そんな感じで。

結局、そんな付き合いしかしなかったから悪循環っていうか。俺に近寄ってくる子は、どの子も似たようなもんだったな」

雅貴が、思い出すように、ゆっくりと話す。

実咲は、時々うなずきながら、口を挟むことなく聞いていた。

雅貴が、ふっと息を吐くとすこし笑って、ぎゅっと実咲を抱きしめた。

「実咲だけが、違った。

実咲は、始めから他の女の子とは違っていた。俺がよれよれの格好で隣歩いても気にしないし、ファミレスで良いって言うし、話しても面白いし、俺が犬ばっかかわいがっても、一緒に笑って犬かわいがってるし。

実咲は、最初から違ってたんだ。

そんなのは、最初から分かっていたことなのに。

初めてまともに話したとき……捨て犬を拾ったときのこと、覚えているか？　あのとき俺は実咲のした事を否定したんだ。なのにおまえは笑って『ありがとう』って言ったんだ。

あんな風な反応した女の子は、初めてだった。

俺はずっと実咲のことが好きだったよ。

実咲は、最初から他の女とは違っていたんだ。

どうして俺はおまえを試すような真似をしたんだろう」

雅貴は、ゆっくりと、話し終えると、小さく息をつく。

ごめん、実咲。

実咲を抱きしめながら雅貴がつぶやく。

実咲は何度も首を横に振った。

かける言葉が見つからずに、ただ首を横に振ることしかできなかった。

実咲は雅貴の言葉にどうしようもない後悔を覚えていた。

私が、雅貴に試させるようなことをさせたんだ。

実咲の中にその思いが、間違いないこととして、胸の中に落ちて来た。

雅貴は、ちゃんと私を見ていた。なのに、私は自分から、雅貴が信用していない女の方へと進んでいったのだ。雅貴にとって信用が

出来ない女に、私は望んでなってしまった。
雅貴の話を聞いた実咲には、そう思えてならなくなった。
雅貴のした事は、実咲にとって許せることではない。いくら過去のことと流そうとしても、思い出せば胸が痛む。
それでも、雅貴だけが悪いわけではないのだと、雅貴がそんな行動に走るに至る原因を自分も少なからず持っていたのだと、そう思えたのだ。
そのことに気付き、実咲は自分自身の愚かさに動揺していた。
そして、悔いる雅貴をわずかながらも冷静に受け止めることが出来るような気がした。
雅貴のことだけを悪いと思っていれば、きっとこの先付き合い続けることは難しかったかもしれない。
自分に、何かできることがあったんじゃないのか。そう思えた瞬間から、今までのことは、雅貴だけの問題ではなかったのかもしれないと思えた。雅貴の方が多分に悪いという気持ちは今でも少なからずある。けれど、それでもこれは雅貴一人の問題ではなく二人の問題だったのだと思えた。
雅貴が変わるだけでは、きっと同じ事を繰り返すのだ。
きっと私にも悪いところはあって。
そういうところに気付くことから、もしかしたら二人の関係は始まるのかもしれない。
きっと、今までとは違う物に変えてゆける。
私も、雅貴と一緒にいたいのならば、彼と良い関係を作るために変わらなければいけない。責めたり、求めるだけではきっと良い関係は築けない。
こっからをスタートにしよう。
雅貴に抱きしめられているのを感じながら、実咲はゆっくりと目を開ける。
実咲が身じろぐと、雅貴は彼女に視線を合わせて、穏やかに微笑んだ。

雅貴の表情と、腕の中の心地よさに、実咲の顔に自然と笑みが浮かぶ。

「……雅貴が好き」

いろんな気持ちが胸の中にあって、今はまだ、言葉にならない。気付いたこと、今生まれた後悔のこと、話したいことはたくさんある。

でも今は、もう少しだけ、この腕の心地よさに身をまかせていたかった。

31（後書き）

次回、本編、最終話です。

32　最終話

後日、いろいろ分かったことがある。

雅貴が引っ越し先を知っていたのは涼子が教えたのだと言うこと。

「そういえば、この前まで涼子と噂になってたよね、あれは何？」

訊ねると、雅貴はこの上なくイヤそうに顔をゆがめた。

「ああ、佐藤さんね……。あの人のことは、何も話したくない」

口を割ろうとしない雅貴を「後ろめたいことがあるんでしょ」と脅して実咲は無理矢理聞き出した。

それによると、実咲の引っ越し先や電話を聞き出そうとして、ようやく待ち合わせをして話をさせてもらえると思ったら、合コンの現場を見せつけられたりとか、結構いろいろな仕打ちをされたらしい。その上ようやく話を聞いてもらえるかと思えば、どういうつもりか問いただされて、納得のいく答えが返ってくるまで「そんなんじゃ会わせるわけないでしょ」とだめ出しを受けていたりだとか、さんざんだったと雅貴がぼやいた。

「俺は、最近、佐藤さんの顔を見ただけで、体がこわばるようになったよ」

あながち冗談でもなさそうなその重い声と表情に、実咲はぶっと吹き出す。

それを見て、雅貴も、仕方なさそうに笑った。

「まあ、おかげで、見えたこともいっぱいあったし、良かったとは思うけどな……」

不承不承といった様子でそう締めくくった。

持つべき物は、強者の親友である。

実咲の知る限りでは、雅貴と一度別れた後、涼子は本気で雅貴を嫌っていたように思う。

それぐらい、実咲の気持ちを真剣に考えてくれているのが分かった。

雅貴に合コン現場を見せつけたというのも、たぶん、「仕返し」の一環だろう。

それが一番きいたらしいので、涼子の作戦がちというか、棚からぼた餅というか、良い方向に転んだことを、心から感謝した。

特に、実咲を訪ねてきた夜のことは、かなり不満があったらしく、涼子に対しての恨み辛みがこもっていた。

雅貴は、あの日、ようやく涼子から実咲の家の住所を聞いたらしい。そして、早めに仕事を切り上げていくと、仕事はとっくに終わっているはずの実咲がいない。すると、涼子はわざわざ電話までかけてきて「今日も合コン」だと電話口でいったのだという。ご丁寧に店の名前まで言うので迎えに行って見ると、実咲が男と二人だけで店から出てくるという場面に遭遇する羽目になった。

「絶対、あれは俺に見せつけるために狙ってやったことだ」

憎々しげに呟く雅貴に、実咲は吹き出しそうになるのを必死でこらえる。

「佐藤さんだけじゃない。実咲は実咲で楽しそうにあの男と話しているし。家まであの男がくっついていってたら、俺は間違いなくあの男に喧嘩を売ってたね」

「……そんな事を自信満々に言われても……」

実咲は笑うのをこらえながら、あの時を思い出す。

「そうね、でもまあ実際、楽しかったしね？　優しそうで、誠実そうで、感じいい人だったし？」

実咲はからかいながらいやみったらしく語尾を上げて雅貴の顔をうかがった。

「すみませんねぇ、感じ悪くて誠実さに欠けてて」

少しすねたように雅貴がぼやく。

「おかげでその後、声をかけられないまま後をつけるみたいになって、変に考える時間が出来たもんだから、実咲の部屋に行くのにも勇気がいったし、とにかく、電気が消える前に行こうって、悶々と窓見てた。佐藤さんのせいでさんざんだった」

わざとらしいぐらい嫌そうにため息をついた雅貴を見て実咲は笑う。

「なに、その、ストーカーっぽり」

「知らなかったの？　最近の俺の趣味、実咲のストーカーって」

雅貴が笑った。

実咲も一緒に笑う。

少しずつ、少しずつ、以前のような関係を取り戻していた。

でも、二人で一緒にいるのが当たり前になっているのが、友達だっただけの以前とは違うところ。

そして、少しだけ、雅貴が変わった。

以前は割と、人の気持ちを優先して気がきく、人の手を煩わせない人だったのに、最近は、なんというか……、だらけているなーと実咲は思う。気が抜けているというか、わがままになったというか、甘えているというか。

甘えてきて、こちらの様子を時々うかがって、どこまで大丈夫か探っている様な気がする。それを受け入れると、ほっとした様子で笑う雅貴がちょっと可愛いかも、とか思う。

以前はセックスの時以外あまり触れてこなかったのに、今は何でもないときにすぐに触れてきたり、べたべたとくっついてきては、ただ存在を確かめるようにしまりのない顔でほおずりをしてきたりする。たぶん反動もあるだろうから、そのうち落ち着くだろうけど、今のそういう雅貴の態度は素直にうれしいし安心するから、実咲は甘えてくる彼に身をまかせている。

いろいろと、女性に対して気が張っていたところが抜けたのかも知れない、などと、実咲は自分の都合の良いように解釈している。

女性関係は、雅貴ファンの同僚による噂によると、ずいぶんとストイックになっているらしい。実咲からすると、以前の方が人当たりは良かったが隙がなく、ある意味ずっとストイックだった気がするのだが。とはいえ、「アレは絶対に本命の彼女ができたんだよ！」とか言うのを聞くと、一体どっからそんな情報を仕入れてくるのか

と思いつつ、少しくすぐったいような、うれしいような気持ちになるのだ。

以前は気持ち悪いほどに出来過ぎだった雅貴が、些細なことでいろいろと手がかかるようになり、何となく、思いも寄らない方向に変わったような気がするけど、その代わり、とても自然に一緒にいられるようになったように感じている。

そして、なんでもない話をしながらいつものように手をつないで歩く。そんななんでもないことが小さな幸せ気分を運んでくる。

これから先、どうなるかは分からない。でも、できれば、このまま一緒にいられればいいなと実咲は願う。

……そして、いつか……。

実咲は純白のドレスをそっと想像する。

そんな日も来るかも知れない。

そう思えるようになった今を、心から嬉しく思う。

ちらりと雅貴の顔を横目で見上げて、つないだ手の感触を確かめるように、握る手に少しだけ力を入れる。

実咲は、そんな小さな幸せを噛み締めながら微笑んだ。

32　最終話（後書き）

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。
少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

まだ、雅貴視点がありますが、そちらは、ぼちぼちと、更新していきます。
来週辺りから、囚心の方を再開したいと思っています。
涼子さん大活躍で、最終話の涼子の仕打ちの内容が事細かに描かれます。
フルボッコでへこたれる雅貴を見てやってもいいわよって方は、是非。

引き続きアクセサリーを読んでいただけたらうれしく思います。
もうしばらく、どうぞ、お付き合いよろしくお願いします。

囚心　1

彼女に背を向けて雅貴は服を着けていた。
「雅貴」
彼女の声がした。振り返るのが面倒だった。
いつもそうだった。彼女を抱くのはいつでも気持ちが良い。他の女性を抱くときとは違う快感が胸をしめる。
けれど、抱いた後は不思議なくらい落ち着かなかった。彼女の顔を見るのさえ不快になる。
嫌いなわけではない。むしろ大切に思っている。けれど、彼女を抱いた後は、どうしても彼女の側にいるのが耐えられなかった。
なのに彼女を抱くのをやめられない。
「なに？」
彼女に答えた声が、どこか冷淡に響いた。けれどいらだちを押さえながら雅貴は願う。彼女が、この冷ややかさに気付かなければいい。決して、彼女を傷つけたいわけではなかったから。
わずかな沈黙の後、彼女がつぶやいた。
「別れようっか」
一瞬、心臓が止まったかと思った。先ほど見せた自分でも理解できない冷たさが彼女を傷つけたのかと、だから突然そんな事を言われたのかと。
振り返ると、しずかな瞳で自分を見ている実咲がいた。
訳が分からなかった。確かに、あまり良い態度ではなかったかもしれないが、別れを切り出されるほどのこととも思えなかった。彼女の真意が見えなかった。
「なんで？」
理由を尋ねても、彼女はすぐには答えず、分からないことをあざけった。
「だろうね、雅貴は思い当たらないかもね」

ゆがむように笑った彼女は真っ直ぐに雅貴を見ていた。
「雅貴さ、昨日何してた？」
挑むような瞳で見つめてくる彼女が、今にも泣き出しそうに見えたのは気のせいか。
雅貴は、彼女の様子と、そしてその内容に動揺した。
答えることができなかった。言ってしまえば、彼女が泣くのではないかと思うと怖かった。
彼女は知っていたはずではないかと、雅貴は自分に問いかける。
そう、彼女は知っているはずなのだ。自分が平行して、何人もの女性と遊ぶことを。
雅貴は何故今更彼女がそんな事を気にしているのか理解できなかった。
彼女は自分の事を名目だけの彼女だと、そういって笑った。
名目だけ。
違う。
雅貴は思った。
むしろ、今までで唯一「彼女」らしく接してきたのが実咲だった。
雅貴の視線の先で彼女は笑っている。その表情はとても冷静で、そしてあきらめているように見えた。なのに、今にも泣き出しそうだ、と雅貴は思った。
「私さ、やっぱり理解できないし。わかってたつもりだったけど、ああゆうことやられるのはやっぱりイヤだし」
彼女が、思いがけないことを次々と言葉にしてゆくのを、雅貴は呆然と立ち尽くして聞いていた。
そんな感情を表に出すようなことはしないが、雅貴は少なからず動揺していた。彼女がそんな風に感じているとは、想像もしていなかったのだ。
「雅貴、うっとうしいの、嫌いでしょ？」
彼女が確認するようにつぶやいた。小さく息を吐いて、彼女の視線が雅貴を突き刺す。挑まれているように思えた。

けして雅貴からの否定を求めていない瞳。
こんな言い回しをされれば、否定して欲しがっているのだろうと、雅貴は考える。「そんな事はない、おまえだけだ」とでも言わせたいのだろうと思いながら、「そうだな」と肯定するのだ。そうすれば大抵の女は終わらせられる。
けれど、彼女は違う。
これは確認でしかないのだ。
彼女は自分の肯定を得て、終わらせるつもりなのだ。雅貴の否定を望んでいなかった。
その事が更に雅貴の動揺を誘った。
彼女はどうしてそんなに簡単に終わらせられると思っているのか、いっそそのことの方が不思議だった。
自分たちはうまくいっていた。
確かに、実咲を抱いた後の訳の分からないいらだちを紛らわせるために、他の女性と関係を持ったことは何度かあった。けれど、そのどれもが、その場限りでしかなく、実咲のことを適当に扱ったつもりは一度もなかった。
こんなに大切にしているのに、それに気付いてない実咲に、思わず笑みがこぼれた。
「実咲なら、それでもいいけど？」
その言葉に、彼女の顔が複雑そうにゆがんだ。
彼女は自分の事が好きなのだと、その表情から改めて認識すると、自然と雅貴の表情はゆるんだ。
こんなに大切にしているのに、そんな些細な事を実咲が気にする必要はないのに。
そう思う反面、えもいえぬ興奮と快感が雅貴の中に、わずかに湧き上がる。
傷つき、逃げようとする実咲。
その彼女を再び手に入れ抱きしめるのを想像すると、いつものいらだちが払拭されるようだった。彼女を抱きしめるといつも理解で

きないいらだちにとらわれた。けれど今なら大切に抱きしめられる気がした。

彼女のことを手放す気は毛頭ない。雅貴は実咲のことを気に入っていた。

けれど、別れるつもりでいる彼女を引き留める言葉が見つからない。

もし相手が実咲でなければ、いくらでも引き留めるための言葉を言う事ができる。上っ面の、耳障りの良い言葉を。

けれど、なんとしても引き留めたいこんな局面にもかかわらず、何故か彼女に対してだけは、当たり障りのない恋人らしい言葉を言う気にはなれなかった。むしろ、不快だったと言ってもいいほどに。彼女に、恋愛感情で縋っていると思われるのは、雅貴にとって、絶対的に譲れないところだった。理由などない。ただ、自分が彼女を好きなのだと、彼女にそう思われるのだけは避けたかった。

雅貴は考えた。

「じゃあ、賭けるか？」

我ながらいいアイデアだと、雅貴は思った。

彼女は自分の事を好きなのだ。彼女が賭に勝っても、負けても、彼女にとって有利。これならば、自分の事を好きな彼女は思いとどまるかもしれない。

彼女はそんな雅貴に呆れた様子で、しかし、それでも賭けを拒まなかった。

十分だった。彼女が自分の側にとどまることが決まった、そのことが雅貴には重要だった。

彼女のことが好きだった。恋人としての実咲である必要はない。友達としての関係で十分なのだ。むしろ、友人関係が続いていた方が良かったのかもしれない。彼女と抱き合う心地よさは捨てがたいとはいえ、あの頃は意味不明のいらだちを彼女に感じることはなかったのだから。

けれど彼女の性格を考えるに、別れたりすれば彼女はきっと雅貴

の元を去ってしまう。その後に友人関係としてつなぐことは難しいだろう。それだけは避けたかった。実咲を彼女としてでいいから、引き留めたかった。

とりあえず、それはうまくいった。実咲はまだ雅貴の手の届くところにいる。

「なあ、も一回しようか？」

彼女に被さると、それに応えてきたことにほっとした。

彼女に口づけ、抱きしめる。

彼女に触れるのは、ひどく気持ちが良い。それは、腹立たしいほどに。

囚心　2

賭を切り出して以来、ずっと続いていたいらだちがおさまっていた。彼女にだけ感じる、不可解ないらだちが。

あの賭の日以降、感じることがない。

大切にしたいと思う気持ちのままに、彼女に優しくいられた。抱いた後も、かわいいと思う気持ちのままに抱きしめることができた。彼女が望んでいるだろう形の関係がそこにあった。

あの日以来、ほかの女性を抱きたいという衝動はなくなった。彼女へのいらだちと連動しているかのように起こっていたあの衝動。かわいい女の子と話すのは楽しい。特に、男慣れしたような女の子。

でも今は、全く興味すらわかない。彼女と一緒にいるのがただ心地よい。

少し素っ気なく突き放すように、けれど求めれば決して突き放すことはない彼女。躊躇うその動作一つに、彼女の好意を垣間見る。それがたまらなく心地よかった。

実咲は俺のことが好きなんだ。

そう実感するほんの些細な一瞬に快感を覚える。そんな彼女がかわいくてたまらない。

かわいい実咲。いっぱい優しくしてあげよう。

優しくしてあげるから、以前のように、楽しい関係にしよう。

雅貴は機嫌良く携帯を触る。電話をかける先は、もちろん実咲だ。

彼女としての実咲も、意外と悪くないと思えるようになっていった。

元々、実咲から求められて始まった関係だった。

「つきあって」

と、あのとき言われた突然の言葉にひどく驚いたのを思い出す。

彼女がそんなことを言うわけがないと、心のどこかで思っていた。

あのときは彼女から向けられる好意を、初めて重いと感じた。けれど、少なからず緊張した彼女の様子から、もし断れば、彼女は迷わず離れていくのではないかと思えた。つきあいを断った後も、変わらず友達でいられるような器用な付き合い方が出来る女ではないだろう。きっと少しずつ距離を置くタイプだ。うなずく以外に、彼女を自分の元に引き留めるすべはないのではないかと思えた。

まあ、いいか。

そう思ってうなずいた。ぐだぐだ考えても仕方のないことだし、とりあえず実咲とのつきあいが切れなければいいのだ。

友達としての付き合いに、体の付き合いが加わるだけ、そんな感じになればいいと思っていた。幸いにもそう思えるぐらいに、実咲の雅貴に対する態度は変わらなかった。特にべたべたしてくるわけでもなく、変に彼女ぶって口出しをしてくるわけでもない。

彼女の傍は、以前と変わらず居心地が良かった。趣味が似ていて、話が合う。友達でいた頃と変わらない彼女。

ただ、付き合い始める前から思っていたことだったが、彼女は急激にきれいになっていった。

興味を持っただけだと言っていたが、本当に興味がわいてきれいになっていったのか、雅貴に見せる為になったのかは分からないが、とにかくきれいになった。

雅貴の好みに合った「いい女」に。

どうせ抱くのなら、好みの女の方が良い。元々の自然な感じの彼女も好ましく思っていたが、やはりあれでは友人としての感覚が強かった。

人間として好ましく思っていた実咲が、女らしい魅力を持って、雅貴のそばに自然にいる。

友人としての実咲を失うぐらいなら、女としての実咲はいらない。けれど、両方ならばそれも悪くなかった。

けれど、結局、破綻したのだが、それでも何とか取り繕った現状は、これはこれで悪くない。

電話をすると、少し堅い彼女の声がする。けれど、だんだんとほぐれて、聞こえる声の端々に、彼女の笑顔が思い浮かぶ。

そんな彼女の様子が想像できて、雅貴は軽く浮き立つ。

彼女と電話で話をするのは、こんなに楽しかっただろうか。

電話だけではなかった、彼女の気持ちを引き留めるつもりで連日会いに行っていただけだったのに、しばらくすれば、単純に彼女といることを楽しくなっていた。

そういえば、と雅貴は気付く。最近、こんな風に彼女と会話を交わしたことがなかった。抱き合う気持ちよさにばかり流され、訳の分からないいらだちに、彼女と距離を置いていた。その時期をなんだったんだろうと思い返す。

ずっと今みたいな関係でいられたら良かったのに。

距離を置こうとしながら、隠し切れないまま雅貴に向けられる、彼女からの好意。

それに気付かないふりして、彼女をもっと楽しませてあげて、彼女に気付かせてやりたい。

どうやってごまかしても、俺のことが好きだという事に。

雅貴の表情が自然とゆるむ。

心配なんかしなくても、実咲は特別なのに。

それに、あの賭がなくても、今は他の女性に全く興味がわかなくなっていた。雅貴自身不思議なぐらい、全く。

それよりも、彼女がどんな反応をするか、彼女とどのようにすごすかの方に興味があった。

彼女の警戒を解きたい。

彼女に関わることすべてが、楽しくて仕方がなかった。

彼女は、手をつなぐのが好きだ。

雅貴は、自分から少し離れて歩く彼女をちらりと見る。

彼女と歩くときに手をつなぐようになったのは、ちょっとしたきっかけだった。

それはいつだったか。つきあい始めて間もない頃だったように思う。何かの拍子に手を差し出したとき、少しはにかんだ表情でうれしそうに彼女が手を重ねてきたのだ。

あのときの表情がかわいくて、もう一度見たくて、彼女と手をつなぐのがくせになった。

腕を組んでも肩を抱き寄せてもそんなに表情が変わったりしない彼女が、手を差し出したときだけは、未だにやはり表情がゆるむ。

手をつなぐぐらいであんなにうれしそうな表情をするのならと、恥ずかしそうに顔を赤らめる実咲を期待して肩を抱いた事もあった。その結果、むしろ嫌そうな顔をされた。事もあろうに肩に置いた手をちらりと見て、仕方なさそうにため息をつかれたのだ。二度と肩を抱くものかと思った記憶がある。しかし、そのときは、意地でもこの手を離してやる物かと思った。

指を絡めるつなぎ方も、肩を抱いた時と同じような反応をされた。そんなことがあって、手をつなぐという事を、意識的にするようになった。いつも冷静で落ち着いている彼女が見せる、手をつなぐ瞬間のゆるんだ表情が見たかった。

雅貴は手を差し出すと、ためらいがちにつながれた手を握り返し、なんでもないふりをして歩く。彼女の緊張した表情が、わずかにゆるんでいくのを、さりげなく確かめる。

肩を組んだり、腕を組んだり、指を絡めたり。以前はそういう触れ方の方が親密だと思っていた。けれど、どうやらそれは、誰にでも当てはまる物ではないらしい、と雅貴は思う。

彼女にとっては、手をつなぐことの方が、親密なのだ。

慣れると、これも悪くない、と思えた。

普通にただ手をつないでいる状態で、肩を並べて歩く。離れすぎず、近づきすぎない、動きを邪魔されない、ほどよい距離感。つながっている感覚、触れている感触。少しはにかんだような彼女の表

情。
手をつないだ瞬間は特に、ゆっくりと柔らかく時間が過ぎているように感じた。
「どっかでメシ食ってく？」
声をかけた雅貴に、そうだね、と少しゆるんだ表情で彼女がうなずいた。
彼女と共に過ぎていく時間は心地よかった。
賭など彼女をとどめるためのただの口実だった。
その結果、思ってもいないほど、心地よい関係が出来上がっていた。
雅貴は、そのことに満足する。
彼女が喜ぶのなら、このまま警戒を解いてくれるのなら、この状態をずっと維持してあげようと、心底思った。

囚心　3

会社で打ち合わせをしながら雅貴は気付かれないように時計をちらりと見る。
思った以上に遅くなっていた。
予定外の仕事が入り、実咲との約束に間に合いそうになかった。
もう既に約束の時間をわずかに過ぎている。
雅貴は合間を見て抜けだし、彼女に電話をかけた。
『もしもし？』
落ちついた彼女の声が響く。
「実咲？　ごめん。仕事が入って、今日は行けそうにない」
『そう。大変そうね』
少し気遣うように穏やかな声が返ってくる。電話の向こうで彼女がわずかに微笑んでいるのが想像できた。
『じゃあ、がんばってね』
このところ忙しく、雅貴がドタキャンをしたのは、三度目だった。約束をしたのは雅貴自身で、それをキャンセルするのも雅貴自身。なのに、彼女はただ静かに受け入れる。
ほっとする反面、彼女は腹が立たないのだろうかと思う。電話口や、会ったときの彼女の様子では全く気にした様子もないのだが。
「誘っておいて、何度もごめん」
『良いよ。ちょうど行きたいところもあったし』
時間が出来たよ、そう言って彼女が電話の向こうで笑った。
「ありがとう。じゃあ、また、連絡する」
雅貴は電話を切り、小さく息を吐いた。
いつかの、訳の分からないいらだちに似た感情が、わずかに、雅貴の胸に芽生えていた。
以前のいらだちと似ているようで、どこか違う。
あのときはイライラすると彼女を見るのもいやだった。

けれど、今は、今すぐ、彼女に会いに行きたい。
仕事が終わると、訳の分からない感情につき動かされるまま、彼女の部屋に向かい、部屋に明かりがついているのを確認して、彼女の部屋のベルを鳴らした。
「……雅貴？」
夜遅くの訪問に驚いた表情の彼女が顔を出した。
寝る前の、すっぴんで色気のないパジャマ。気の抜けたその感じが、意外とかわいくて動揺する。
「……最近、会ってなかったから」
「会ってないって。何言ってるの？　ついこの前会ったのに」
あきれたような声と困ったような彼女の笑顔。けれどすぐに彼女はほほえみ、雅貴は部屋に招き入れられた。
雅貴は、その様子にふと考える。
もしかして、彼女は、俺の相手をするのが本当に煩わしいのではないだろうか。
距離を取ろうとしているのは、煩わしいから……？
なかなか会えずに、自分がイライラしている間、彼女は全く気にせずに過ごしていたのだ。しばらく会っていないと感じる自分とは裏腹に、会えない時間は彼女にとって長くはなかったのだ。
「これでも、ドタキャン続きを反省しているんだけど」
雅貴が会いたいと思うほどに、彼女はそうは思っていない、そのことがわずかに癪に障る。
「仕事なんだし。気にしなくて良いよ。私、専門バカだし、詳しいことはわかんないけど、営業って、大変なんでしょ。そんな事で私に気を使わなくても良いよ。待たせておいて連絡くれなかったら腹も立つけど。ちゃんとくれてるし」
探る雅貴には気付く様子もなく、彼女は穏やかに答える。少し言葉を選びながら、ゆっくりと、雅貴が気を使わずにすむように。
彼女のその様子を見て、雅貴は力を抜くようにふっと息をつく。
雅貴の視線の先で、彼女がグラスにお茶を注いでいる。

「会えなくて寂しくない？」
雅貴がからかうと、彼女は笑った。
「今、会ってるし」
そう言いながら、どーぞとグラスを渡される。
雅貴はそれを飲んで、ぶほっとむせこむ。
「何これ」
口の中に広がる苦みと、そして独特の臭い。
雅貴の動揺する姿を見て、彼女が楽しそうに笑った。
「どくだみ茶。まずいでしょ。なんか、この前親がくれたんだけどね。あんまりまずいから、早く消費しようかと思って」
「俺に飲ますなよ」
苦笑いする雅貴に、彼女がすまして答える。
「私一人で飲んだら、なかなかなくならないじゃない」
彼女はそう言うと、からかうように雅貴を見た。その様子に雅貴もわざとらしくため息をついた。
「やっぱり、実は怒ってるだろう」
「怒ってないって」
彼女は楽しそうに笑っている。
雅貴も笑った。
楽しくて、居心地が良くて、それが胸の奥をわずかにちりちりと痛ませた。
楽しい気持ちの中に、なにか、小さなしこりのような物を感じていたが、雅貴は笑いながら見ぬふりをした。
グラスを置いて彼女にキスをする。
「どくだみ茶臭い」
そう言って笑った彼女の鼻をつまんで「誰のせいだよ」と笑顔を交わす。
笑いながらキスをして、彼女のパジャマの中に手を滑り込ませる。
ここは居心地が良い。このまま彼女とこの関係を続けていたい。

今は、まだ……。

雅貴はその日、久しぶりに落ち着いて実咲と会えた気がしていた。ようやく仕事が落ち着いた休日前の夜だった。

隣に彼女がいる。それが心地よい。

「ねえ、どうして最近、こっちに呼ぶの？」

彼女の言葉に雅貴はちらりと目を向けると、彼女はソファーに座り子犬を抱いているのが見えた。伸ばした背筋、少し堅いその表情。

雅貴はにやっと笑って返事を返す。

「はぁ？　実咲、おまえ、俺に何してきたか覚えてないわけ？」

「……何よ」

虚を突かれたようでわずかに彼女がひるんだ。

「行くと連日どくだみ茶出されて。おまえんち行くと、飲み物、どくだみ茶しか出てこないじゃないか」

雅貴の言葉に彼女が笑った。

「最近、飲み慣れたから気にしてなかったよ」

少しずつ彼女の緊張が解けてゆくのが見て取れた。

その様子に雅貴は気分を良くする。

雅貴が自分の家に彼女を呼ぶようにしたのには理由が他にあった。家に呼ぶと、わずかに彼女が緊張するのだ。少し強張り、少し動揺しているようにも見える。雅貴はその緊張をほぐすのを楽しんでいた。

まだわずかに緊張を残していた彼女が、犬たちに触れて、ふと表情がゆるむ。力の抜けたその表情に、訳もなく軽くいらだちを覚える。

ゆるんだ表情で、彼女が子犬にキスをした。

相手が違うだろう。

それが気にくわなくて、雅貴は子犬を取り上げると、彼女にキスをした。なぜか、たったそれだけのことが、楽しかった気持ちに影

を差す。雅貴は軽くイライラしていた。
緊張していたくせに。俺のことが好きなのなら、この部屋にいるのだから俺のことを考えていればいいのに。
そんないらだちを隠し、けれど、その隠したいらだちにまかせて、彼女をベッドに誘った。
すると、わずかに彼女の体がこわばり、再び緊張しているのが分かる。
イヤなのだろうかと一瞬考えるが、抱きしめると彼女の腕が背中に回ってくる。
雅貴の口元がゆるんだ。
そうだ、俺のことだけ、考えていればいい。
キスをすると、彼女が舌を絡めて応えてくる。
満足して少し体を離し、彼女の様子を見る。どこか、遠くを見るような様子で何かを考えているように見えた。
胸がざわつく。腹の奥に沈んでいたしこりが、またざわざわと波紋を広げていく。
「……何考えてんの？」
ざわめく気持ちを隠して、雅貴はなんでもないふりをして彼女に尋ねた。
「ドアの向こうで、寂しがってる子がいるよ」
彼女の言葉でドアの向こうで甘えた声を出す犬の存在に、初めて気付く。
犬の事なんて、どうでもいいだろう。
一瞬、そんな事を考えた自分に驚く。
雅貴は、なんでもない顔をして笑った。笑いながら彼女をからかう。
犬のことなら俺が考える。彼女は俺のことだけ見ていればいい。
雅貴はいらだちを隠して、彼女を欲しいと思う欲求のままに彼女に覆い被さった。
俺のことだけ、考えていればいいのに。

週末、雅貴は初めて彼女を自宅に泊めた。
同性の友人以外にこの家に人を泊めたことはない。
雅貴はため息をついた。
なぜだろう。落ち着かない。
仕事は今週いっぱいが山だった。つまり、今週いっぱいは、彼女と会う時間はとれなかった。
出来るだけ時間を取って彼女に会おうと決めていたのに、先週からはキャンセル続きで、まともに顔を合わせたのが週末だった。
それは、楽しい週末の筈だった。実咲の機嫌も悪くなく、雅貴の思い通りに過ぎた休日。
あの日の彼女は相変わらず少し距離を取りつつ、けれど、仕切り直した頃に比べれば笑顔も自然にこぼれるようになっていた。
それを望んでいたはずなのに、彼女との距離が縮まるほどに、雅貴は訳の分からないいらだちを感じるようになっていた。
それは、仕切り直す前、実咲を抱いた後に感じていたいらだちと、よく似ていた。

囚心　4

週末、雅貴は初めて実咲を自宅に泊めた。
同性の友人以外をこの家に泊めたことはない。
思い出して、雅貴はため息をついた。
なぜだろう。落ち着かない。
仕事は今週いっぱいが山だった。つまり、今週いっぱいは、彼女と会う時間はとれなかった。
出来るだけ時間を取って彼女に会おうと決めていたのに、先週はキャンセル続きで、ようやくまともに顔を合わせたのが週末だった。
それは、楽しい週末だった筈だった。実咲の機嫌も悪くなく、雅貴の思い通りに過ぎた休日。
あの日の彼女は相変わらず少し距離を取りつつ、けれど、仕切り直した頃に比べれば笑顔も自然にこぼれるようになっていた。
それを望んでいたはずなのに、彼女との距離が縮まるほどに、雅貴は訳の分からない苛立ちを感じるようになっていた。
それは、仕切り直す前、実咲を抱いた後に感じていた苛立ちと、よく似ていた。

また持て余し始めた苛立ちに、ふと、雅貴は想像する。
それは、ほんのいたずら心だった。
少しずつ実咲に対して大きくなっている苛立ち。雅貴の中での実咲の存在は大きくなっていて、彼女が悪いわけではないのは十分に分かっていた。彼女のことがかわいくて、愛しくてたまらないとすら感じているのに、それでも募る苛立ちがあった。
一度離れかけた彼女が、側にいることを実感したくて、毎日電話をかけていた。彼女の声はいつでも心地良く、彼女が自分の彼女で

あることに、ただ安堵していた。
なのに、その思いに反して募っていく、理解できない苛立ち。
彼女と一緒にいるときに時折感じるどうしようもない焦燥感。それは雅貴の中でしこりとなり、腹の底をずんと重くする。そして、一人になると、腹の底からどうしようもない苛立ちがわき上がってきた。
会うたびに、じわりじわりと重くなっていく腹の底にあるしこり。会うたびに大きくなって、波紋を広げ、苛立ちを増していく。
そんなときに不意に思うのだ。

「彼女を傷つけてみたい」

と。
どうしようもなく、感情のままに彼女の心を踏みにじってみたいという欲求が胸の中を渦巻いた。
けれど、想像はしても、実際にはそんな事をするつもりはなかった。一緒にいればそんな気持ちよりも、大切にしたい想いが勝る。彼女が笑顔でいられる状態を作りたいと感じる。
けれど、間違いなく雅貴の中で広がっていく、苛立ちという名の波紋。

少しだけ。

雅貴は想像した。
そうだ、少しだけ、小さないたずらをしてみよう。
少しだけ、彼女が傷つくいたずらを。
その思いが止められなくなった。
自分のせいで傷つく彼女を見たかった。どうしようもなく彼女を傷つけたくなった。
その考えは、想像だけでたまらなく楽しく雅貴の心をくすぐる。

傷ついた彼女を見てみたい。そして、傷ついた彼女に、なんて声をかけようか。

何をすれば、彼女は傷つくだろう。

手放したくない想いと、傷つけたい想いとが、雅貴の中では何の軋轢を生じることなく同時に存在していた。彼の中では矛盾することなく、当然のように。

雅貴はかつてセフレとして関係を持ったことのある女性を呼び出した。

実咲と付き合いを仕切り直して以降は、全く顔を合わせることもなかった女性だが、今の彼女をちょっとからかいたいんだ、という雅貴の言葉に彼女は楽しそうにうなずいた。

行動範囲が似ていた為に、別れてからも時折顔を合わす機会があり、今でも言葉を交わすぐらいには親しい仲だった。しかし、体の関係はあっても、それ以上の関係ではない。

もうすぐ待ち合わせの時間だった。

実咲は、どんな反応をするだろう。

想像して、雅貴は口元がゆるむ。

それは、たわいもないいたずら心でしかなかった。

怒るだろうか。悲しむだろうか。それともなんでもないふりをするだろうか。

そういえば、と、賭のことを思い出す。

雅貴が浮気をすれば「何でも言う事を一つ聞く」そういう賭だった。キス程度で浮気になるかどうかが微妙だとは思ったが、セックスまでする気にはならなかった。

今は、実咲以外を抱きたいとは思えない。実咲だけで良い。

だから、ちょっとだけ傷つけて、彼女が望むのなら本当にこれっきりにしよう、彼女を思い浮かべながら、雅貴は想像する。

思いついた悪戯は考えるほどに楽しかった。

とはいえ、悪戯でした、では彼女も納得はしないだろう。そう思って、何をすれば許してもらえるかも考えておく。消去するのが面倒で携帯に残っている女性達のメモリーも全部消せば納得でもしてくれるだろうか。

そうこう考えているうちに彼女が来た。

それを確認して、実咲が自分たちに気付く頃合いを見て、女性とキスをした。キスをしながら、ちらりと彼女を見る。

実咲が驚いた様子で固まっているのが見えた。

もう一押ししておいた方が良いだろうか。

雅貴は、もう一度見せつけるようにキスをする。

彼女のこわばった顔から、表情が消えたのが見えた。

しまった、やり過ぎた。

たかがキスと思っていたが、実咲にとってはそうでもなかったのだろうか。

雅貴はとっさに女性から身を離すが、既に実咲は背を向けてその場を去ろうとしていた。

慌てて女性に別れを告げると、実咲を追いかけた。あの様子では、かなり彼女を怒らせたらしい。女性の文句を言う声が聞こえたが、それにかまっている暇はなかった。

「実咲！」

駆けより彼女を呼び止める。

けれど、どんなに謝っても、彼女の態度は軟化することはなかった。それどころか、賭の話を持ち出すとより怒りを増した様子で、静かに雅貴を切り捨てた。

「二度と私の前に顔を見せないで」

背中を向けたまま、彼女が冷たく言い捨てる。

血の気が引くような言葉に、雅貴は息をのんだ。腹の底にあるしこりが、いつものようにずしんと重くなる。けれど広がる波紋はいつもの苛立ちではなく、どうしようもない焦りだった。

「悪かった、ホントに悪かったから！　そんなに怒らないでくれ」
必死になって言いつのると、彼女が冷めた目で雅貴を振り返る。
振り返った彼女にほっとしたが、それはつかの間の安堵となった。
雅貴が必死で彼女の気持ちを和らげようと思っても、彼女の表情は硬くなるばかりで、それどころか時折あざけるように雅貴を見つめている。
実咲のそんな視線をうけたのは初めてだった。
違う、俺の望んだことは、こんな事じゃない。
雅貴の胸の中がざわめく。息苦しかった。
「俺のこと、好きじゃないの？」
雅貴はその事実にすがった。
だから怒っているんだろう？　そう、彼女の気持ちを探った。
やり直そうという雅貴の言葉に、嫌悪感すら浮かべて彼女は嘲笑する。
「あんた、何したか分かってないわけ？　人傷つけて、それが簡単に許されるとでも思ってんの？」
言われてみればその通りだと思った。けれど、違うのだと雅貴は訴えたい衝動に駆られる。
確かに彼女を傷つけたいと思っていた。けれど、ほんのいたずらに過ぎなかったのだ。そこまで彼女が怒るとは思ってもいなかった。こんなに怒るほどに傷つけるとは思っていなかった。賭を持ち出してわびればすむと思っていた。
ほんの少しだけ傷つけて、彼女を抱きしめたかっただけだった。
けれど、言い訳をする雅貴を、彼女は怒りもあらわに切り捨てた。
「所詮あんたはゲームみたいに遊んでいるだけでしょ？」
彼女の言葉は嘲りを伴って、斬りつけるように雅貴を襲う。怒りの中に彼女の苦しみが見え隠れする。それはそのまま彼女の言葉の重さとなって雅貴に突き刺さった。

けれど実咲は更に雅貴を斬りつける言葉をたたきつけてくる。
「本気でもないあんたをみて、何を喜べって？」
彼女の言葉に、雅貴は動揺していた。そんな風に思わせていたとは思ってもいなかった。返す言葉がない。自分がやって来たことは、つまりそういうことだとようやく知る。
けれど、それだけじゃない。
雅貴は実咲との思いのすれ違いに動揺しながら、どう言えば分かってもらえるだろうと考える。
雅貴の中に彼女を思う気持ちは確かにあったのだ。やり方は良くなかったかもしれない。けれど、彼女だけと付き合うつもりだったのは本気だった。それは分かってもらいたくて雅貴は言葉を詰まらせながらその気持ちを訴えた。
けれど、雅貴の必死の言い訳を聞いたとたん、彼女の顔がゆがんだ。
その表情の変化がどういう意味なのかは、雅貴には分からなかった。ただ、その言葉で、決定的に彼女が雅貴の存在を切り捨てたのが分かった。
何がいけなかったのか雅貴には分からなかった。
実咲が望むのなら、彼女とだけ付き合うつもりだと、本気だと訴えたというのに。
彼女は何も言わなかった。ゆがんだ彼女の顔は、嘲笑しているようにも、怒っているようにも、悲しんでいるようにも見えた。
だがすぐにその表情さえも消え、彼女は雅貴に背を向けた。
「バイバイ」
去り際に聞こえてきた素っ気ない彼女の声。
雅貴は呆然と彼女の背中を見送った。

なにが、いけなかったのだろう。

彼女の背中を見ながらぼんやりと彼は考える。

ちょっとしたいたずらのつもりだった。
けれど、それは最悪の判断だったのだと、この時になってようやく気付いた。

途中まで、あんなにうまくいっていたのに……。
……俺は、どこで間違えたんだろう……。

遠ざかっていく彼女の背中が、どこまでも冷淡に、雅貴を拒絶していた。

囚心　5

携帯電話を手に取り、液晶画面を見ながら、いつもの操作をする。
発信履歴が表示された。
後は、発信ボタンを押すだけだった、が、押しかけて、雅貴はふっと力を抜くように息を吐くと、やめた。
携帯をぽんとソファーの上に投げる。
何を言えばいいのか分からなかった。彼女があれほどまでに怒った理由さえ、雅貴には分からなかった。
分かっているのは、ただ、取り返しのつかないことをしたのだと、それだけだ。
電話をかけても、きっと彼女は取ってはくれない。
その確信がある。彼女は、あの瞬間雅貴を拒絶したのだから、あの様子だとそう簡単に許してもらえないだろう。そう思うと、また雅貴から一つ溜息がこぼれる。
そんなつもりはなかった。
そう、心の中で、言い訳を繰り返す。
ほんの少し。ほんの少しだけ、彼女を傷つけたかっただけだった。
それが、こんな結果につながるとは思いもせずに。
ほんの少しでよかったのに。
雅貴は思いも寄らない結果を後悔して溜息をつく。
いや、そもそも、どうして俺は実咲を傷つけたかったのだろう。
雅貴は、初めてそのことを考えた。確かに彼女に対して苛立っていた。だから、傷つけて、たぶん「冗談だよ」と抱きしめたかったのだろうと思った。
その考えに至り、雅貴は自分が何も考えていなかったのだと気付く。
溜息が出た。
雅貴は自分が彼女がどんな気持ちでいるのか、彼女がどう感じる

かとか、全く考えていなかった事を、今になって知る。
ただ、自分に都合良く彼女を動かそうとしていた。彼女の気持ちをすべて分かっている気分になって。
やりきれなさを抱えながら、雅貴はソファーの背もたれに体を深くあずける。沈み込んでいく感触は、自分の今の気持ちのようにも感じた。
俺は、実咲の何に苛立ちを感じていたのだろう。
自分の中に答えを探るが、何一つ彼女に悪いところはなく、いくら考えても分からなかった。
しばらく時間をおこう。
雅貴はベッドに潜り込むと目をつぶる。
お互い、もう少し頭が冷えてきた頃に連絡を取ればいい。
今は、雅貴自身、どうすればいいのか分からなかった。

実咲に別れを突きつけられてから数日が経っていた。雅貴は、会社の玄関を前に立ち止まると、覚悟を決めるように息を吸い込む。
その日は、実咲のいる研究室への納品日だった。
彼女と話す機会があるかと少し緊張しながら雅貴は研究室の前に立ち改めて深呼吸をすると、そのドアを開け、いつものように声をかけながら室内を見渡す。
実咲はデスクワーク中のようで、一番雅貴の近くにいた。
彼女が声に反応して振り返ると雅貴を見た。
ほっとして声をかけようとした雅貴は絶句する。実咲が、雅貴を見た瞬間に不快そうに顔を歪ませたのだ。
まだ、怒っている。
当然だと思う理性とは裏腹に、腹立たしくなった。あれは、ただのいたずらだった。そこまで嫌悪されるようなことをしたつもりはなかった。
苛立ちを押さえながらも彼女にどう声をかけるか、迷っている間

に、他の女の子がやってきた。内心そのことに不快感を覚えながらも、雅貴は営業らしくにこやかに商品を受け渡しする。そして研究室を後にしながら、雅貴はちらりと実咲の背中に目をやった。

雅貴に視線を向けることなく仕事を続けている彼女に、まだ、怒りは解けてないことを感じ取る。

もう少し、様子を見よう。

雅貴は自分を落ち着けるように、そう心の中で呟く。悪いのは自身であることは分かっていたが、それでも実咲の態度が腹立たしくもあった。かといって、彼女が許してくれないからと、諦めるつもりもない。

それでも今は、互いに時間が必要であろうと思われた。

どう謝れば、彼女は怒りを解いてくれるだろう。

雅貴は鬱々とした気分で考える。対応一つ間違えば、確実に彼女は離れていく。慎重に事を進めなければいけないのだと、雅貴は先日の失敗を思いだして、自分に言い聞かせる。

苛立ちに振り回されて対応を誤ったらおしまいだ。

必ず、もう一度実咲を手に入れる。

それだけは諦めるつもりはない。焦ってたら仕損じる。

雅貴は深く息を吐き、感情を抑え込む。

もう少し、時間をおこう。

雅貴は、焦る気持ちを抑えつけて、行動を起こすのを堪えた。

それが間違いだと気付いたのは、彼女に振られてから一週間以上が過ぎてからだった。

ことごとく、俺は実咲に対しては読み違いをするらしい。

雅貴は携帯を握りしめて重い息を吐いた。

電話がつながらない。

電話番号が変わっているらしい。

動揺して携帯を持つ手が震えた。

実咲に拒絶をされるのが、これほどまでにきついとは思わなかっ

た。たかだか電話ができなくなった程度だというのに。

彼女は、本気で自分をたち切ろうとしているのだと突きつけられた。

対応を間違えずに、真剣に気持ちを伝えれば彼女は許してくれるはずだと高をくくっていた自分に気付いた。

もっと早くに謝りに行くべきだったのだ。

握りしめた携帯をじっと見つめる。胸の辺りがずんと重く、いくら息を吐いても軽くはならない。

わざわざ離れていった女に執着する必要はないだろうと、頭の片隅で考えたりもした。けれど、すぐにその考えは打ち消す。実咲と今までの付き合った女とは、雅貴にとって全く価値が違うのだ。代わりのきく人間だと、もとより思ったことがない。女に執着しているんじゃない、実咲だから関係を取り返したいのだ。そもそも、雅貴は一度たりとて彼女との関係を壊したいなどとは思っていなかったのだから。

実咲のことはずっと大切にしてきた。してきたのだ。今まで一度も適当に扱ったことはない。何故それが分からない。何故そんなに簡単に俺を切り捨てる。途切れた電話を持って彼女への怒りにも似た思いがこみ上げる。

イライラする。こんなにも大切に思っているのに、分かろうとしなかった彼女が腹立たしい。

雅貴は少し浅くなった呼吸を整えながら、あふれそうになった苛立ちを押さえる。

違う、傷ついたのは実咲だ。怒って良いのは、俺じゃない。

雅貴はそう自分に言い聞かせる。

とりあえず家に行ってみよう。

雅貴は立ち上がった。が、時計を見て諦める。今から彼女の家に向かえば十一時を過ぎる。ただでさえ怒っている相手に、こんな時間に行っても顔を出してもらえると思えなかった。

明日、会いに行こう。

もう一度息を深く吐き、今すぐ行動に移したい衝動を抑えた。
毎日、溜め息ばかりが増えている気がした。

行き慣れた道だった。
実咲の車が駐車場にない事にもすぐに気が付いた。
どこか、買い物にでも出かけているのか。
雅貴は部屋の前で待とうと、実咲の部屋に向かった。
通路を進みながら、彼女の部屋のドアを見て、びくりと体が震えた。
まさか。
いくら何でも、と、自分の考えを否定する。きっと、チラシか何かだろうと。
けれど、ドアの前にたどり着いて、そのまさかが、まさかだったのだと知った。
入居者に向けた書類だった。
つまり、この部屋は、空き部屋という事だ。
実咲は引っ越したのだ。引っ越しをするほど、自分は拒絶されているのだ。
「……そこまで……」
自分でも信じられないほどの衝撃を受け、雅貴は思わず口に出して呟いた。
俺は、実咲に、そこまでさせる、何をしたのだろう。
呆然と、空き部屋になったドアを見る。
なぜ、そこまで拒絶されなければいけないのか、雅貴には分からなかった。
ほんのいたずらだったと実咲には言ったのに。
彼女が怒るのは当然だ。それはさすがに一応は理解した。だが、電話番号を変え、引っ越しをし、雅貴からの連絡が取れなくさせるほどのことかと問われると、とてもそうは思えなかった。
ただのキス一つ、浮気と言っても些細な物なのに。最初に実咲に

別れを切り出されてから、あのいたずらでしたキスまで、あんなにうまくいっていたのに。そこまで拒絶される意味が分からなかった。

確かに、その辺りの倫理観に、少々隔たりがあるのは雅貴にも分かるが、そうはいっても、たかが冗談のキス一つなのだ。

何度自分の中で繰り返したか分からない言い訳を、雅貴は今日もまた繰り返す。

後悔と苛立ちと、どうしようもない苦しさと、絶望感、表現しようのない怒りが雅貴の中をせめぎ合っていた。

囚心　6

実咲の会社とは研究室からの注文と、事務から受けるオフィス用品の注文がほとんどだ。

実咲のいる研究室は消耗品であるシャーレの回転によりけり、一、二週間に一度納品に行く程度。

雅貴は、事務室に向かいながら、ちらりと研究室に向かう通路を見つめる。用もないのに押しかけたり、他の研究員のいるところで声をかけたりというのも、何度も考えた。雅貴自身は、そんな事は全く気にならない。

しかし実咲は、自分と付き合っていることを知られるのを極端に嫌っていた。

雅貴のファンが多いから居心地悪くなるようなことは絶対にやめてと、とことんまで念を押された。もし今、人前で実咲になれなれしく声をかけよう物なら、修復不可能になりかねない。ただでさえ何度も打つ手を間違えているのに、これ以上失敗をするわけにもいかないのだ。

研究室に向かいたい気持ちを抑えて、雅貴は事務室のドアを開けた。

そこで、あれ？　と一人の事務員に目がとまる。

そういえば、佐藤さんは実咲の友達だったな……。

雅貴は彼女に目をやりながら、ただ一人、この会社で雅貴と実咲が付き合っている人間がいたことを思い出した。

「佐藤さん？　ちょっと良いかな」

雅貴はにっこりと笑って、彼女に声をかけた。

何なんだ、あの女……。

雅貴は、仕事を終えて家に帰ってから、ソファーに横たわった。

犬たちがわらわらとよってきて雅貴を歓迎する。
「ああ、ホント、お前らは優しいよな……」
犬たちを撫でながらため息をつく。
実咲が親友と言っていた涼子に声をかけて、ちょっと電話番号を教えてもらおうと思っていただけなのに、ものすごいボディーブローをいただいて帰る羽目になった。しかも、何の収穫もない。
あれで、本当に実咲の友達かよ……。
雅貴はげんなりとしながら思い返す。実咲は割と物をはっきり言うとはいえ、基本的に穏やかで優しい女だ。
ところが電話番号を聞いた雅貴に、涼子はにっこりと華やかに笑うと、人気のないところに連れて行かれ、ものすごい棘のある言葉でぐさりとやられた。

「井上くんさぁ、私がそんな事教えると思ってるんだ」
クスクスと楽しそうに笑ったその目が、ものすごい怒気をはらんで睨み付けてきた。
「信頼できない人に、教えるわけないでしょ」
全く笑っていない目つきで、けれど、口元と声は楽しげに彼女は言った。
「それは、佐藤さんが決めることではないんじゃない？」
雅貴が不快感を覚えながら、言い返すと、彼女はにっこりと笑って肯いた。
「その通りね。実咲があなたに会いたくないんだから、私は絶対に教えないわよって言った方が良い？　勘違いも甚だしいわよ、井上くん。私さえも説き伏せられないような人が、実咲の信頼を取り戻せると思うの？　実咲の恋心につけ込んでも、また実咲を傷つけて終わるがオチよ。だいたい、本人の許可もないのに教えたりなんかしたら、プライバシー保護法で訴えられちゃうじゃない？　他の人に聞こうなんて気は起こさないでね？　そんな事したら、実咲、会社自体をやめかねないから。井上くん、そこまで実咲を追い詰めた

って、……分かってないでしょ？」
雅貴が探るように涼子の目を見ると、彼女はひるむことなく、嘲るように視線を返してきた。
「分かってたら、こんなに軽々しく私に電話番号を聞けるはずがないしね。もう少し、自分のしたことがどういう事なのか、よく考えてから出直して頂戴」
言いたいことだけ言うと、涼子はひらひらと手を振り、さっさと雅貴を残して事務室に帰っていった。雅貴は彼女の怒気に押され、口を挟むことさえ出来なかった。

思い出しただけで腹が立つ。ちょっと電話番号を聞いただけなのに。なぜあそこまで言われなければいけないのか。彼女には全く関係のない問題なのに。
そう思い返して、雅貴は盛大にため息をつく。
だが、変な詮索をされることなく実咲との連絡を取る手段は、思いつく限り彼女しかいなさそうだった。
他に共通の知り合いで、自分と実咲が付き合っていたことを知る実咲と親しい友人はいない。
雅貴は、苦々しい気持ちでため息をつく。
急がば回るしかなさそうだ。まずは涼子を説き伏せることからになりそうだった。

それから、雅貴と涼子の攻防が始まった。
思った以上に涼子は手強かった。雅貴が何も手を出せないことをいい事に牽制と暴言とで、精神的にたたきのめされている気分だった。彼女が、絶対に実咲に手を出させないという決意をしていることは明らかだった。少なくとも、今の雅貴のままでは。
そう、彼女は「絶対に」教えないとはいわないのだ。「今の井上くんには」教えないと言うのだ。
雅貴は、涼子への対応に困り果てていた。

実咲にしたことが褒められたことでないのは分かっているし、実咲を傷つけたことをこれ以上ないほど後悔していたし、もう二度とする気もなかった。ちゃんと謝って、実咲を説得して、やりなおしたいと思っていた。

しかし何度反省していることを説明しても、本気だと訴えても、涼子は「そんなんじゃ、同じ事繰り返すわよ」と繰り返す。なぜかと尋ねても「ちゃんと考えて。自分の考えが正しい、私がいちゃもんつけてると思ってるからわかんないのよ」と言うばかりで、答えようとはしなかった。

何度目のトライだっただろうか。苛立ちを隠しながらの雅貴の懇願に、とうとう涼子から違う言葉が返ってきた。

「今度、駅前のファーストフードの店内で九時頃待っててもらえる？　見つけやすいように、窓際に座っておいてね」

そんな時間にどういうつもりかと思ったが、雅貴は言われたとおりに指定された店内の窓際で涼子を待った。けれど、時間を過ぎてもなかなか彼女は現れない。

いいかげんに帰ろうかと思ったところで、歩道を歩く集団の中に涼子を見つけた。

男女入り交じって楽しそうに話しながら歩いている。

合コンの後かよ。

ため息をつくと、涼子と目があった。彼女は、にんまり笑うと、雅貴に手を振る。

それが、隣の女性から隠れて手を振っているようで、ふと、後ろ姿になっている女性に目を向ける。

実咲だった。

あの女……！！

雅貴は、涼子を睨むと立ち上がった。とたんに、笑っていた涼子の顔が豹変した。憎しみでもこもっているかのような目で雅貴をにらみつけ、来るなと牽制する。

雅貴は我に返り、拳をぐっと握りしめもう一度椅子に座った。今、

あそこに行ってしまえば、実咲の反応がどう返ってくるのか分からない。今、あそこに行くのは、おそらく自分にとって不利だ。

椅子に座って睨み付ける雅貴を満足そうに見つめて、涼子はにっこりと笑うと手を振り去っていった。

雅貴は今にも噴き出しそうな怒りを抑えながら、それを見つめる。

どういうつもりなんだ。

怒りに駆られながら見つめる視線の先に、実咲の後ろ姿がある。笑いながら隣の男と話をしていた。

腹立たしかった。他の男と話す実咲への怒りなのか、実咲と話す男への怒りなのか、わざわざそれを見せつけてきた涼子への怒りなのか、雅貴は自分でも判別付かなかった。

ただ、今はこらえるしかない怒りが胸に渦巻いているのを、必死で抑えていた。

囚心　7

「佐藤さん、この前のあれ、どういうつもり」
あの合コンを見せつけられた日から三日が経っていた。さすがにもう沸き上がるような怒りはなかったが、涼子に対してにこやかになれるほど落ちついているわけでもなかった。
「どういうつもりって……、仕返しに決まってるでしょ」
涼子がいかにも楽しそうにクスクスと笑った。その様子に雅貴は苛立ちを隠しきれないまま呟く。
「佐藤さんに仕返しされる覚えはないんだけど」
「あれは、井上くんへの手助けよ。ヒント」
イラッと来て、「はぁ？」と低い声で詰め寄りそうになるのを必死でこらえる。息をゆっくりと吐きながら、どこまでも感情を逆なでるのが上手な女だと雅貴は思った。
「だから。井上くん、分かってないみたいだから、ヒントをあげたのよ」
どこまで本気で言っているのか分からないその言葉の後に、涼子が挑戦するように笑いかけて来た。
「井上くん、怒ってるみたいだけど、どうして怒ってるの？　騙した私への怒り？　それとも、嫉妬？」
「……え？」
思いがけない問いかけに一瞬ひるむ。
「百聞は一見にしかず、ってね。井上くん、あなたあの時のこと、怒る権利あると思ってるの？」
目の前で涼子がじんわりと笑った。視線は雅貴よりも低いというのに、見下ろされているような錯覚に陥る。
「あるだろう。佐藤さんは待ち合わせに来なかったじゃないか」
わざと話をずらした雅貴に、涼子が笑みを深めた。
「そうね、それは悪かったと思ってるわ。でも私『待ってて』とは

言ったけど、私も行くとは言ってないんだけどね。勘違いをさせたことは、悪かったと思っているのよ」

彼女は話をずらした雅貴の話に乗っては来たが、全く悪いとは思っていない謝罪はおもしろくない。怒る権利の話をはぐらかしたことを追求されることはなかったが、ほっとする反面、屈辱的にも感じた。

どこまでもイライラする女だと思った。

「……まあ、なんにせよまだまだね。それじゃあ、井上くん。私は仕事に戻るから」

涼子が笑って背を向けた。

雅貴は彼女の後ろ姿から目をそらし、拳を強く握った。

苛立ちが、少しずつ、少しずつ降り積もっていくようだった。

家に帰ると、雅貴は深く息を吐き、ようやく肩の力が抜ける安堵感を覚えた。

三匹の家族が雅貴を温かく迎えた。

彼らがいる。そして、今はここに帰る場所がある。落ち着ける場所がある。

その安心感を雅貴は噛み締めた。

家を購入したのは三年ほど前になる。

家を出たのは一七才の頃。もう、九年が経つのか、と雅貴は家を出てからのことを思い返した。

家を出るきっかけとなった、義理の母親に押し倒されたあの日がよぎる。

あの時、義母の拘束から逃げた雅貴に彼女が言った。

「父親（かれ）に言おうなんて考えない事ね。あなたが、私を襲ったのよ。彼は、どちらを信じるかしら？」

嘲笑うような彼女の顔は、今もまだ脳裏に焼き付いている。

あの日のことを思い出せば、あの時のどうしようもない怒りもま

たよみがえる、今も尚忘れられぬ怒りだ。

高校二年生の頃、義理の母親にレイプされかけた。体がある程度できあがっていた雅貴が、それから逃げるのは容易かったが、一度逃げれば終わる問題ではない。

彼女の近くにいることがどうしようもなく不快だったし、一緒に暮らすなどとてもではないが出来るはずもない。雅貴はその足で家を出るためにアパートを探した。

そして父親には理由らしい理由も言わず、気を使うからと逃げるように家を出た。

そんな息子の態度をどう思ったのか、それとも彼女から何かを聞いていたのか、その時、父親は何も言わずにアパートを借りることを了承した。

家を出てほっとしたのと同時に、どうしようもない空虚さがおそった。とはいえ、気が楽になったのは間違いのないことであったのだが。

家を出てほっとしたのもつかの間、すぐに家に置いてきた犬たちのことが心配になった。家にいる犬は全て雅貴が拾ってきた犬だった。そして、母親が死んだとき、仕事ばかりで帰ってこない父よりも、ずっと雅貴の支えになったのが犬たちだった。

『あなたが責任を持つのよ』

子供だった雅貴にそう何度も繰り返し言ったのは、犬の飼い方を教えてくれた母親だった。だから、母親の死後はどんなに嫌でも、どんなにやる気がなくても、母親との約束と思い、犬の世話だけはかろうじてしていた。そしてそんな雅貴に、犬たちはそれまで以上に懐くようになった。

それまでは犬たちが最も懐いていたのが母親だった。お互い、亡くした彼女を補うように、雅貴は犬たちをかわいがり、犬たちは母親に懐いていたように雅貴に懐くようになった。

犬がいなければ、雅貴が立ち直るにはもっと時間がかかったかもしれなかった。

だから、犬たちを置いて家を出た時、残していく彼らのことだけが心配だった。義理の母親がまともに犬の世話をするとも思えない。雅貴はすぐにペット可のアパートを探し、父親に了承させた。

けれど、ワンルームで3匹が雅貴を待って暮らすのには窮屈そうだった。何より、親に家賃を出してもらって暮らす部屋であると思うと、落ち着かなかった。

義理の母親はもとより、父親も信用できない。父親は、何一つ聞かずに家から出ると言った雅貴を捨てた。そう、あれは、捨てたのだと、雅貴は思っている。会話すら成り立たぬ息子が、家を出たいと言ったのを良いことに、金だけ出せばいいと、捨てたのだ。

彼はろくに話もしない煩わしい息子より、若くてきれいな妻を選んだのだ。

捨てた息子に、父親がどれだけのことを融通するかなど、とてもではないが、信用できない。いつ、援助が打ち切られてもおかしくない。雅貴にはそう思えた。

雅貴の生活の基盤は、自分を疎ましく思っている彼らの考え一つで揺らぐのだ。

それを肌で感じ、ぞっとした。

それからだった。

雅貴は自分の家が欲しいと考えるようになった。犬たちがそれなりに不自由なく暮らせる、そして自分の力で手に入れた、自分の帰る家を求めた。

バカみたいにアルバイトしながら、気晴らしがてら手当たり次第に女と付き合っていた当時を思い出す。

あの頃は、それこそ犬たちがいなかったら自分はダメになっていたかもしれないと雅貴は本気で思っている。

自分の帰りを待つ彼らがいたから、なんだかんだと遊んでも夜には家に帰ったし、朝はどんなに寝不足でも起きて散歩に連れて行っていた。彼らを窮屈なアパート暮らしから開放するためにも、まと

もな職に就きたかったから勉強もした。あの頃の、まともに生活する意味は、共に暮らしていた犬たちにのみ存在していたのかもしれない。

犬たちがいなかったら、途中で家が欲しいという執着さえなくしていたかもしれないとさえ思う。

雅貴は、当時からいる二匹の犬を見つめる。一番辛い時期を支えてくれていた犬たち。

「お前らがいなかったら、俺はどうしてただろうな」

頭を撫でながら部屋の中を見渡す。

今の家を手に入れたのは社会人になって二年目のことだった。アルバイトで貯めた金と給料とを頭金に、ようやくこの家を購入した。古いが、庭の広い、犬たちを安心して飼える家だ。

それは、ようやく手に入れた、雅貴の帰る場所だった。

誰に頼ることなく得た、帰ってこられる場所。誰にも奪われることのない場所、大切な犬たちがある程度の自由さを得られる場所。

ようやく得たこの家は、雅貴の唯一落ち着ける、救いの場所となっている。

囚心　8

雅貴は深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。この家は雅貴にとって安全地帯であった。この家にいる間は気持ちを落ち着けることが出来る。

雅貴は、体の力を抜き、脳裏をよぎる過去を振り切るように頭を振った。ここでなら、ゆっくり考えることが出来る。落ち着いて、冷静に。

そうだ、考えるのは、実咲をどうやって取り戻すか、だ。

そして、今日の出来事を思い返す。

「……」

思い出して、雅貴は苦い顔つきでため息をつく。

過去よりも不快なことを思いだしてしまった。

『あの時のこと、怒る権利、あると思ってるの？』

涼子の言葉が頭の中で繰り返される。

冷静にというのは無理そうだった。

むしろ、頭が沸騰しそうだ。

今日は、ろくでもないことばかりが思い出される。雅貴はガシガシと頭をかいた。

せっかく忘れていた、昼間のことが頭を悩ませ始めたのだ。

せめて彼女のことは今日は忘れていたかった。思い出すだけでイライラする。どうしようもない苛立ちが沸き上がる。あの、挑発じみたバカにしたような涼子の目。彼女にはもう関わりたくない。

とはいうものの、実咲は取り戻したい。すると、やはり涼子とは顔を合わせるしかない。

雅貴は息を吐いて室内に目を走らせた。

この家に入れたことがある人間は、信頼できる友人と実咲だけだ。

他の女性を入れたことはない。

他人を入れると居心地の悪いこの部屋も、実咲は自然に、当たり

前のようにこの部屋にいた。彼女がいて居心地が悪くなったことはない。

彼女が隣に座って笑う姿をもう一度取り戻したい、という思いがわき上がる。

そういえば、と実咲と初めて会った時のことを思いだした。

なぜ、あの時実咲を家に入れたんだろう。気付けば、不思議な物だと雅貴は思う。そもそも、女性に家を知られるような真似はしないようにしていたのに、と。

思い返せば、雅貴は出会った時から、彼女に対する警戒心がなかった。

犬を連れて実咲の車で送ってもらった日、家まで連れて行っても大丈夫かどうかさえ考えなかった。待たせるのが悪いからと、気にせずに家の中まで案内した。その時に警戒したのが雅貴ではなく実咲だった辺りが、今になって思い出すと笑ってしまう。

あの時のことを思い返していて、雅貴は笑った。

そうだ。あれだ。

捨て犬にかまうなと俺は言ったんだ。保健所に連れて行くか、捨てておけと。

雅貴の知っている女の反応は、「えー。冷たい！」「可哀想じゃない」とか、その場しのぎの好意に自己満足する女の反応だ。それが優しさと思い込んでいる、浅はかで身勝手な思考でしか物事を計れない女の反応しか知らなかった。

なのに、実咲は雅貴の言葉をまっすぐに受け止めた。そして受け入れた上で、笑って礼を言った。気付かせてくれてありがとう、と。

あれだ。

その記憶はどこか小気味よく、思いだしただけで笑みがこぼれた。

だから、家まで来てもらうことになっても何も思わなかった。それでなくても、元々実咲が営業にくる雅貴に興味がなさそうだったのだ。不安を感じる要素があまりなかったのかもしれない。

思い出す実咲の姿は、どれも気持ちよくて、自然に肩の力が抜ける。今なら、思い出したくない涼子の仕打ちも何とか受け止められそうな気がした……ような気もする。

「ヒント、ねぇ……」

溜息混じりに、苛立ちを押さえて雅貴は呟く。

何がヒントなんだか。意味が分からない。どう見ても、ただの嫌がらせだ。実咲が涼子に何を吹き込んだのかは分からないが、相当、雅貴の印象が悪い物だったのだろう。

実咲が他の男と合コンしていたのを見せられるとは。

どれだけ嫌われているんだと、前途多難っぷりが、簡単に予測できる。

実咲と会話する男の笑顔を思い出すだけでどうしようもない怒りと、焦燥感がこみ上げてきた。

『何で怒ってるの？』

そう言った涼子の言葉が、ふとよぎる。

この怒りの意味。自分は、実咲が他の男と話す姿を見たとき、何に怒っていたのか。

考えてみると、自分でも意外な結論が出た。

そうだ、嫉妬だ。

別れても、それでも実咲は自分の物だと思っていたのだと気付く。

彼女を他の誰かに渡す気はない。必ず取り戻す。それを邪魔された苛立ちもあったのかもしれない。

雅貴は、笑いながら話をしていた実咲の姿を思い出して、ずきりと胸が痛むのに耐えた。

もう、実咲は「彼女」ではない、その事実が突き刺さっていた。

怒る権利など今の自分にはないのだと思い知らされた。

何が手助けだ。

悪意のこもった目でにっこりと笑った涼子を思い出して、雅貴は悪態をつく。

彼女は、ただ、自分が実咲とはもう関係なくなったのだと見せつけたかっただけだ。

イライラする。

雅貴は不快感を吐き出すように、はぁっと、盛大に息を吐く。もう彼女には関わりたくなかった。思いだしただけで腹が立つ。だが困った事に、雅貴と実咲を問題なくつなぐ線は彼女しかいない。結局は、またそこに戻ってしまうのが、これまた腹立たしい。

雅貴は派手に舌打ちをした。

あの女は信用できない。これから先、また同じ事されるかもしれないと思うと不快感ではらわたが煮えくりかえりそうに思えた。

しばらくは顔も見たくないと思っていた矢先、雅貴は、その本人から声をかけられた。

「今度は、私もちゃんと顔を出すから、一回話しをしたいんだけど」

納品を終えて帰ろうとした雅貴は、こそっと告げられたその言葉に立ち止まった。

振り返ったその表情は、不信感をあらわにしている。営業先にもかかわらず反射的に返してしまったその自分の顔に、雅貴はとっさに取り繕うと、話しかけてきた涼子の表情を窺う。にっこりと笑った涼子の営業スマイルに、雅貴は少なからぬ嫌な予感を感じながら、それでも渋々とうなずいた。

やはり、うなずいたのがそもそも間違いだったかもしれないと痛感したのは、彼女が待ち合わせ場所に来た直後のことだった。

「実咲、今日も合コンに行かせてあるから」

にっこりと涼子が笑う。

「佐藤さんが、どれだけ俺のことが嫌いなのかは、よく分かったよ」

引きつりそうになりながら雅貴も無理矢理笑ってみせる。ここで腹を立てたら負けだと思った。営業の意地である。

「へぇ。やっぱり、井上くんでも、そういうのイヤなのねぇ」

涼子が笑う。
「当たり前だ。好きな女が他の男と……」
「……どうして当たり前なの？」
雅貴の言葉を遮るように、涼子がたたみかけてきた。
涼子の顔が真顔になった。
「何が好きな女よ。自分はずっとしてたくせに。実咲の合コンなんて、かわいいもんじゃない。ただ飲むだけ、話すだけなのに。しかも今は別に井上くんと付き合ってるわけじゃないのに。フリーの実咲が何しようと、実咲がいながら散々不特定多数の女の子と関係持ってた井上くんに文句言われる筋合いはないわね。付き合っている実咲がいながら他の女と出来るぐらいだから、井上くんはもしかしたら実咲が誰と付き合おうと平気なのかもと思っていたわ。まさか、自分は浮気するけど、別れた実咲が合コン行っただけで気に入らないとか、あり得ないわよねぇ？」
最後の一言で、いやみったらしく涼子がにっこりと笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2856t/

アクセサリー

2011年10月21日09時57分発行